女鑑

天長節號



第十七年第十一號

「デパアトメント、ストーア」とは如何なるものなるや？

新荷到着

新柄呉服太物類
歐米流行洋服類
化粧品小間物類
室内裝飾用品類
帽子洋傘洋杖類
鞄靴履物旅行用品類
玩具其他諸雜貨類
外に
寫眞場、食堂の設あり

「三越」を主題とせる文學的製作の懸賞大募集締切期限は十一月十日なり詳細は時好編輯部に照會せられたし

三越呉服店

地方より御注文被下候御華主様の爲め冊子「冬小袖」を發刊せり御一報次第送呈仕る可く候

「デパアトメント、ストーア」を說明するものは「三越」なり


（犬の聲！）
何と云ふ藥が
欲しいのですか
THE BEST POCKET MEDICINE
SEIKAIGAN
清快丸
價金十錢、廿錢、五十錢、一圓
捻布着二十錢藥罐廿五錢
（令孃の答）
私は高橋盛大堂の
清快丸が欲しいのです
あの藥は勉強して肩が凝たり氣が欝いだりした
時に能く奏効ますからね

女鑑　第十七年第拾壹號目次





上品の容姿は完全なる前髪じんに依りて装ふ事を得る

米國製

束髪前髪じん



ヘヤロール

○一大注意　ヘヤロールは今や歐米に流行しつゝある束髪前髪じんなり、從來の毛製品は彼の忌むべき癩病患者又は肺病患者の遺髪の交りある慮ひありて衛生上恐るべきは勿論、常に鬱陶しく頭部に痒みを起し果ては禿げる心配等ありて知らず〳〵一生の不幸を來す恐あり大に注意すべし



○本品の特長　ヘヤロールは細微なる金線にて製し軽きと鳥羽の如く空氣の流通至極宜し。故にフケを生ぜず伸縮自在なれば大小の前髪になづみ最も上品の容姿を装ふべし。且、脳病又頭痛の方には衛生上最も有益の新輸入品と謂ふ可きなり外部を優美なる絲網にて覆はれ毛を損じスベリ出す憂なし。

類似の粗品續々現はるに付き米國と御指定を乞ふ

（定價一個卅八錢送料八錢）

團体にて多數御注文の際は割引御便利可致候

輸入元　東京々橋區鎗屋町一　日加商店　振替貯金八六六九

特約店　東京日本橋區橋町四　御園おしろい本舗　丸見屋商店
大阪東區南久寶寺町　婦人小間物問屋　小栗小三郎

販賣店　各地和洋小間物化粧品店

第五回內國勸業博覽會賞牌及襃狀受領

登錄商標

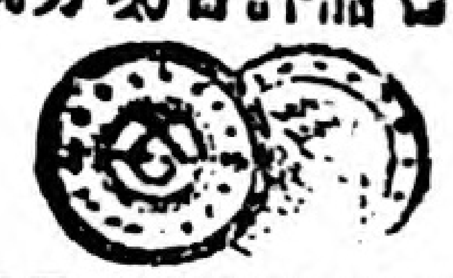


◉壽美禮おしろい

◉ねり製 定價（大壜 二十錢 小壜 十二錢）
水製 定價（大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢）

ヴワイオレット水製

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
壜詰附 乳白硝子器入
壽美禮ねりおしろい





錫栓附乳白硝子壜入

すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素新成績液體等を以て配劑しあるを以て肌を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの性あり「壽美禮白粉」は常に用て御顏肌へを滑々しく天然の色白きに至るべし菫『おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨んで衞生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◉西洋洗滌劑 壽美禮あらひ粉の特性

◉弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞贊する香料及弊舖新製の原料を用ひて製せしものなれば朝夕此洗粉を用ひ給へば能くあかを落し御肌を美くしくなす

◉常に髮洗ひに用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半えりハンカチーフ絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總ての物を深白する性あり

◉使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

緑、藍、紅彩蝶番ひ 大袋入 二錢
鑵詰 六錢五厘 袋入 一錢

登錄商標

西洋色白くなるあらひ粉

SUMIRE

Washing Powder

壽美禮あらひ粉



製造本舖 東京東兩國 元町兩國橋際

壽美禮堂謹製

販賣所は全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場ニ有リ


東京砲兵工廠技手
日野清三郎君案出
新案登錄
露國陸軍の刻印あり
戦利廢棄弾丸
藥莢で出来た
真に趣味ある
戦利好紀念物
ナイフ
ペン軸
電話下谷
宮内省
御用
玉寶堂
取次御望みの方には御相談に應ず

天長の佳節



飯澤天羊筆

東宮殿下



第二回女子教育講演會講師



鳩山春子君

右より 岡田博士、澤村博士、重野博士、高島先生、寺尾博士、

才媛百佳選



其の十　中牟田子爵令嬢　貞子君

其の十一　澤村博士令嬢　八重子君

菊の花




カメリヤ洗粉
艶麗花の如く純潔雪の如き
美貌は本品の愛用によりて顯る
カメリヤ洗粉は最新の化粧法に基き學理的に配劑なせる高等美身術に適したる最良の化粧料なれば皮膚の營養を助け、きめを細かに光澤を増し肌膚を艶麗美白ならしむる特効を有し其香氣の優秀なる永く身邊に薫りて自ら快感を起さしむ
殊に寒冷に遇ふて肌を荒害する憂なきは全く本品の純良なるが故なり
定價
大瓶 壹個 廿五錢
小瓶 同 十五錢
大袋 同 五錢
小袋 同 三錢
鑵入 同 十三錢
本舖
東京神田 小林富次郎
發賣元 ライオン歯磨

嵯峨侯の家庭

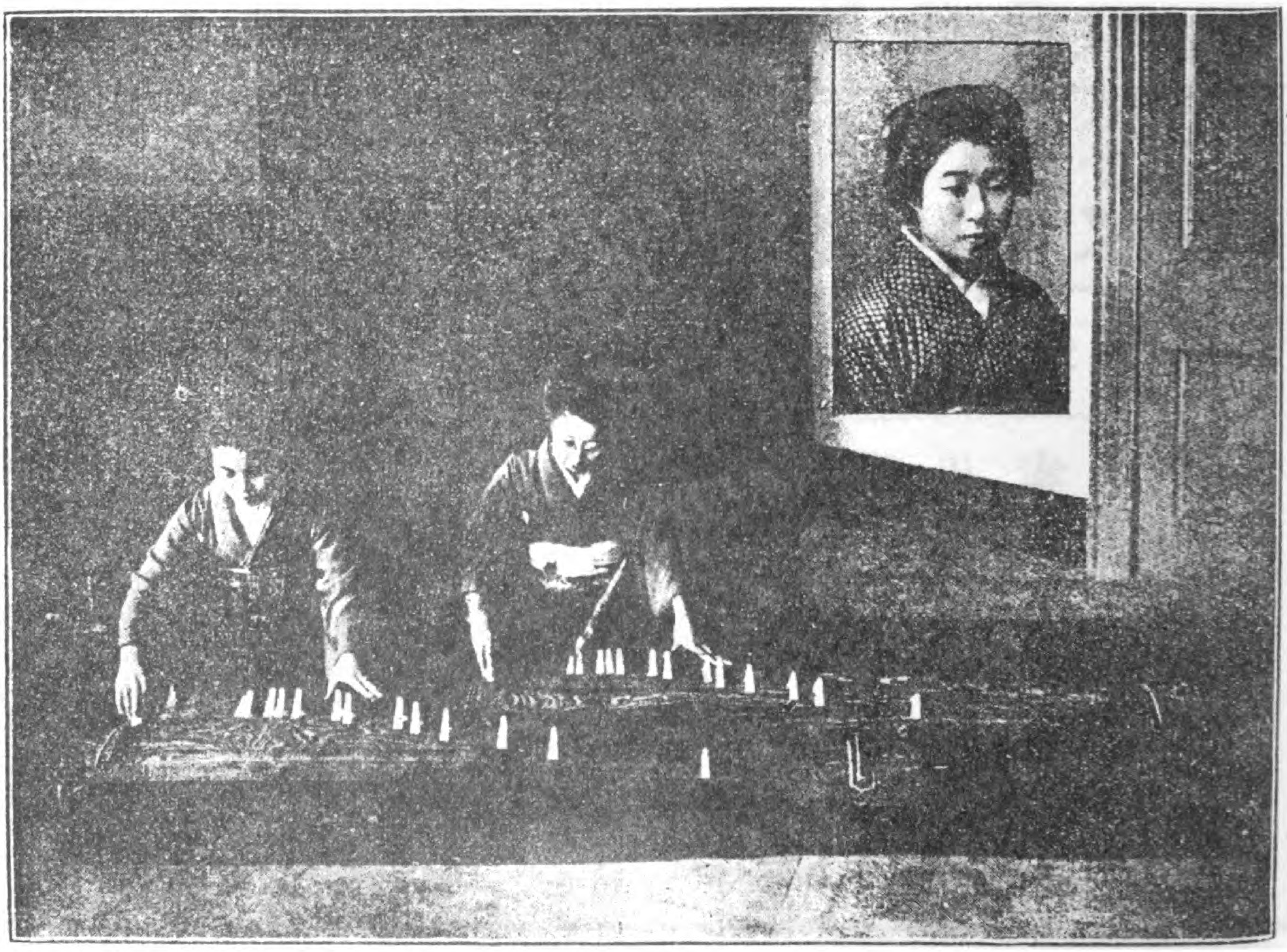


右圖の中年の乳母を除くの外は皆侯爵の令息令嬢なり

第二回女子講演會餘興



仕舞（右より 田島秀子君、山階明子君、同美代子君）



富本（齋藤とし子君）

箏曲（左 山室千代子君 右 大木のぶ子君）

伯林の幼兒風俗



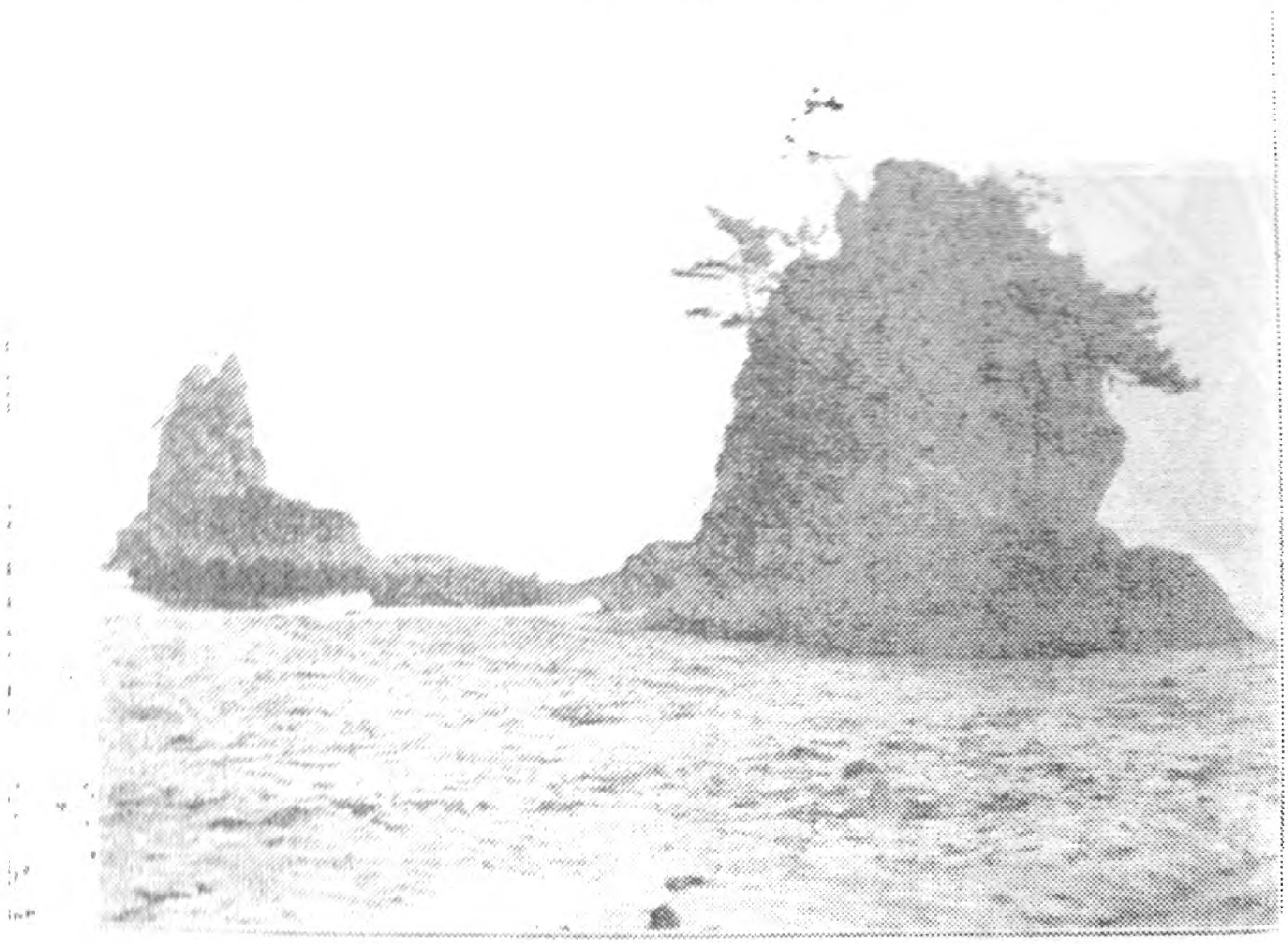
上圖假裝行列頗ろ振へり



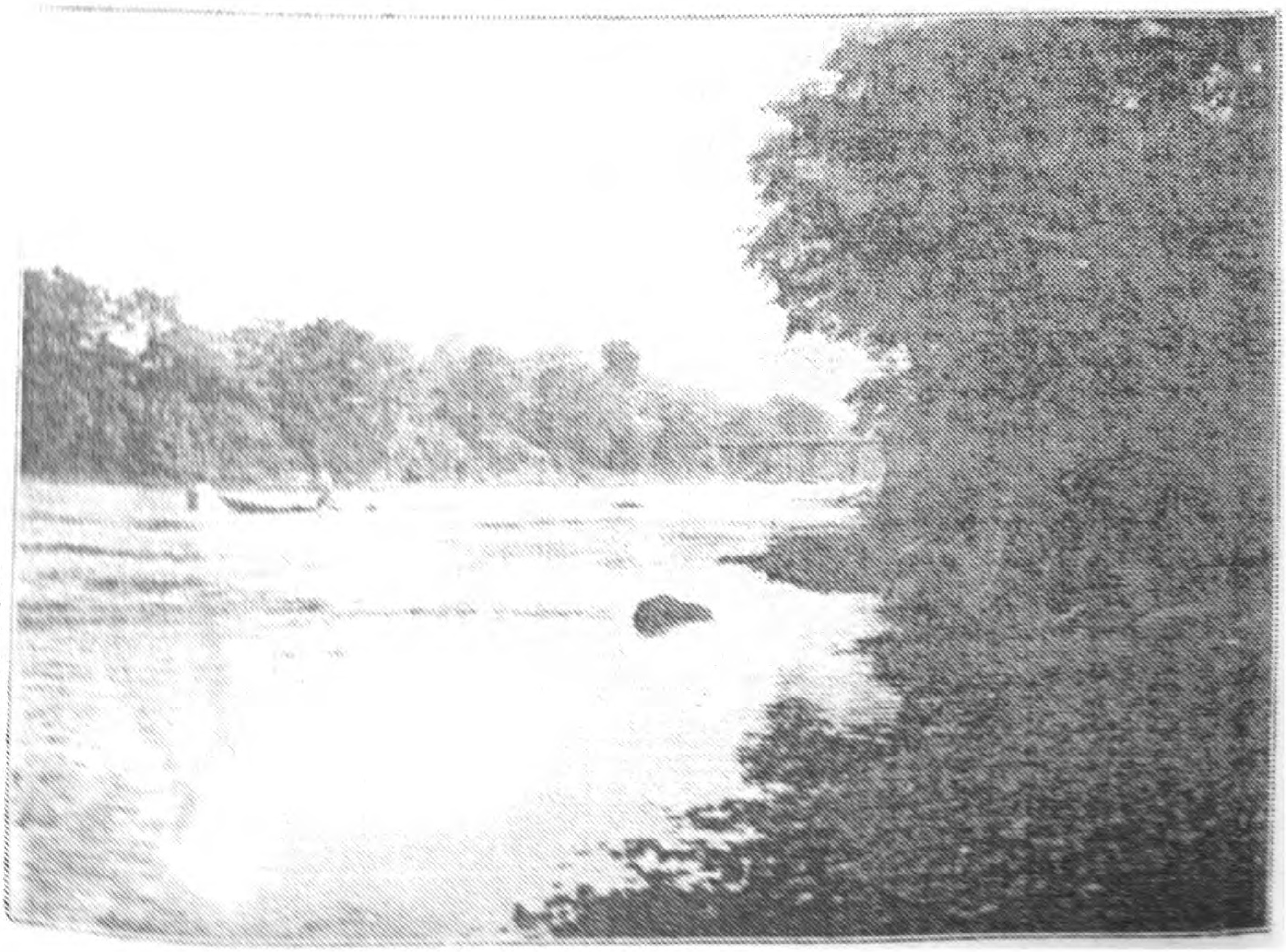


溪水氏寄贈

海と川



勿來の二つ岩



熊本の白川

渡邊清次郎君撮影

壹等賞牌受領
於東京勸業博覽會

各女學校御用
美術造花材料

附屬品並に
造花器械類一式

東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地

天野卯兵衛

電話(長)浪花一六四三番
振替貯金口座四九七〇番



切取線

◉營業目錄御入用なれば此切取線を
添へ御申越被下度候

縣　郡　町村

女鑑

大日本淑女學會

第五回新學期開始

比際入會者に限り入會金全免すべし！

▲御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする方は、本會におはいりなさい

▲本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義録を發行します。講義の親切丁寧なことは云ふまでもありませぬ。新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法をとります

▲卒業は二ケ年で會費も低廉であります

▲會員には講義録の外『姫百合』と云ふ美くしい躰裁の利益になる女學雜誌を毎號無料で進呈いたします

本會の講義録

▲大版三百頁優麗なる册子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は専門女子教育家也
▲科外講師は博士學士廿家
▲毎號科外講話を附録とす
▲純潔高雅の家庭小説あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義録は貳ヶ年完結とす

◉詳はしい**規則書**は申越次第差上げます

◉東京神田駿河臺（電話本局三千四番）　大日本淑女學會



女鑑

第十七年第十一號

菊の花

やれし垣根に吹く風の　いとも淋しき秋ながら
さくしら菊の花見れば　こゝろの底も晴やかに
そのいろその香その姿　これを乙女に譬ふれば
花のすがたの美くしさ　袂に染めて着まほしく
塵に染まざる花のいろ　清くかをれる花の香は
これを心のかゞみとし　高きみさをの友と見ん
あはれゆかしき菊の花　あはれやさしき菊の花
幾代かはらで乙女子の　清きこゝろの庭に咲け

《中川愛氷作》



天長節の話

文學博士　松本愛重

天長節は年中大祭日の中でも、大節の一として最も慶賀すべき大祝日である、我國に於て、天皇陛下の御誕辰を天長節と名けて祝し奉ることは、由來の久しいことで、決して近年に始まつた事では無い、尤も文字は支那の書籍に見えて居つて、舊唐書などに天長節に百僚壽を上るといふことがあるから、天皇の御誕辰を天長節として祝賀することは、支那の昔より行はれたことゝ見える、我國の天長節のことも國史に見えて居る、

謹んで按ずるに、續日本紀卷の三十三、光仁天皇の條下に、天皇御即位の後、即ち寶龜六年の九月十一日に、勅して曰く、十月十三日は是れ朕が生れし日なり、此の辰に會ふ毎に感慶兼ね集る中略海内の諸國宜しく屠を斷つべし、内外百官に酺宴を賜ふこと一日、仍つて此日を名けて天長節と爲す、庶幾くは、斯の功徳を廻らして、先慈に虔奉し、此の慶事を以て、普ねく天下に被らしめん、といふことが見えて居

る、之が我國最古の起源である、

是より先、臣民たる者、故なく多人数より集りて宴を開くことは厳禁の制度があつたのであるが、此の天長節の日には其を許されたのである、故に勅語の中にも酺宴を賜ふとある、是より毎歳之を行はせられ、次々の天皇の天長節も行はせられたもので有ッたらうが、中絶して居たのである、併しながら天長節といふ祝日は、其源此の如く遠いのである事を忘れてはならぬ、

然るに、今上陛下の御代となり、明治元年の九月廿二日は陛下の御誕辰であるから、天長節として群臣に酺宴を賜ひ、天下の刑戮を止めさせられた、その御趣意は御誕辰を祝し玉ふ大御心に出させ玉ひしものなれども、此の時は宮中の御宴に止まつて、天下の衆庶一般に祝し奉ることは無かつたのである、降つて明治の三年に至り、始めて天下一般に布告を下して、臣民一同に奉祝すべき佳辰と制定せさせられたので、當時は九月二十二日であつたが、

一年を越えて明治の五年、太陽暦の頒布と共に、陛下の御誕辰をも換算し奉りて十一月三日と改定なさせられたのである、

さて此の日は、宮中にては如何なる御式を行はせらるゝかと云ふに、仄かに拝承する所によれば、此日、賢所、皇靈殿、神殿の御祭がある、早旦より御殿の御装飾を奉仕し、御扉を開き神饌を供し、樂を奏し、掌典長が祝詞を奏し陛下の御代拝が御玉串を捧げ奉り、次に皇后陛下、皇太子同妃兩殿下の御代拝が御玉串を捧げ奉るといふ御式がある、此の賢所、皇靈を御拝遊ばせらるゝといふは、前に掲げたる、光仁天皇の勅語中に在る、虔んで先慈に奉ずとの思召におのづから一致するものと推し奉るのである、

序でに一言して置くが、宮中に奉祀あらせらるゝ、賢所と申し奉るは、天照皇大御神の御鎮座まします御殿で、もとは内侍所とも申し上げた、これが眞中で、之に向つて右側に神殿と申して、八神及び天神地祇の神々を鎮齋し奉ッた御殿がある、又左側に皇靈殿と申して、神武天皇より以下御歴代の天皇の皇靈、

并に后妃后親の御靈を鎭齋し奉ッた御殿がある、紀元節には皇靈殿で御親祭あらせられ、神嘗祭は賢所で御拜あらせらるゝといふが如く、御祭によッて區別がある、けれども天長節の如きに、三殿ともに御祭あらせらるゝのである、

既に三殿の御祭が畢ると、觀兵式があり、それから群僚百官を豐明殿へ召させられて酺宴を賜はるのである、この酺宴と申すは、天下の共に慶賀すべき時に際して、盛宴を賜はるとので、簡單のものではないのである此の酒饌を賜はる間は、音樂を奏する例であるが、新年宴會の時は古樂を奏し、此の天長節には歐洲樂を奏せしめらるゝ例であるといふ、以上は天長節に於ける御儀式の御模様を書物にあるのと、或故老から聞いたことゝを取り集めて御話したのである、

凡そ日本の地に生れ、日本の粟を食で居るものは、誰一人として、日月の如く高き天恩を仰がぬものはあるまいが、殊に女子に至りては、昔日のやうな窮屈な境界を脱することを得たばかりでなく、聖世の賜物として女子の敎育を奬勵せられし結果、文學、技藝、その他百般の事に至るまで、各自の望みに任せて修得する事が出來るやうに爲つたのは、誠に諸孃の爲に慶すべく祝すべきことであるが、それと同時に我國女性が固有の美德を發揮し、他日賢妻として家政を整理して力を内助に致し、はたまた良母として、國家有用の材を鞠育せられん事を望むのである、これやがて天よりも高く、海よりも深き聖恩の萬一に酬ゆるのである、然れば常に念を此に運ぶ貞淑温良なる諸孃は、誰か共に與に、聖壽の無疆を奉祝しないものがありませうや、

論説

婦人の品性

子爵　松平直敬

男女に拘はらず、凡て、品性と云ふことは最も大切なることで、その中にも殊に婦人の品性と云ふことは緊要なることである、而して今婦人の品性と云ふことを述ぶるに先ちて、品性とは一體如何なるものを云ふのであらうか、また如何なるものを指すのであらうかと云ふことを詮索するの必要があるであらうと考へる、

品性と云ふものは、今更めて言ふまでもなく三角とか四角とか、或は堅いか柔いかと云ふに、元より聲もなく香もなくして無形のものである、然らば形が無いものであるから、タヾ吾人は漠然と品性なる語を用ゐて居るのかと云ふに、決して左樣では無い、確に吾人は一種の感應等に由りて之を認むるのである、去ながら前陳の如く無形の物であるからサウ無造作には定義を下し難いものである、

併し形もなく又容易に定義を下し難いものであるけれども、それが自然に其人に由つて現はれて來ることは爭ふべからざる事實であつて、而してそれを男或は女の品性と稱へるのである、が、然らばその品性なるものは如何な風に表はれて來るかと云ふに、今一々は名狀が出來ない、けれども彼の人は品格がある此の人は人格が高いなど〻呼ぶのが即ち品性の現はれたのである、

その人格と云ひ品格と稱するものは、その名稱こそ二つになつて居るが、吾人の考へでは畢竟二つにして一つのものであると考へる、只少しく見る方面が違ふので、例へば、同じ物でも縱から見た時と、又横から見た時とでは自から其所に少しの相違があるのと同一理由であらうと思ふ、ソコデ人格と呼び品格と名くる、約めて云へば品性なるものは、無形なる所謂吾人の本性で、之が各人の上に現はれて來るものであると考へるのである、最もこの品性には、高いものと卑いものとの二種がある、

故に品性なるものは、自分で強て作らうとして骨を折つても決して造れるものではない、依つてあの人の品格が高いからと云つて、その人の眞似をしても出來るものでは無い、例へば、品性の卑いものが立派な扮裝をしたり、又は鷹揚なる態度を繕つて己れを高く見せやうとしても似付かないのと一般である、尤も斯うすると鑑識の力が地平線以下に位する世間並の者からは、態度はよし人格も有るやうに見えるであらう、また思つても居やう、けれども少しく眼のある人から見れば、それが誤つて居る、彼の人格の卑いと云ふことが直ちに判別せらるゝのである、是を以ても品性といふものは殊更に作らるべきものでないと云ふことが知れるであらうと思はるゝのである、

然らば如何にせば具はるものであるかと云ふに、品性と云ふものは、素その人の徳に由つて自然に備はるもので、決して後から繼足しをして組付けたものでは無い、それ故に、その人の心の位地が高ければ高い程品性も高くなるのである、之れに反して卑いものは幾ら高くしやうとしても、却つてます／＼卑くなるのみで、尚は強て造らうとすれば、遂には沐猴にして冠すなどいふ冷評を招くに至るのである、之は如何も致し方の無いもので、その露はれて來る品性の高いも卑いも、一に己の徳の厚薄に因る報であつて、人爲を以て之を左右すると云ふことは出來ないのであるから、各自にその徳を油斷なく修養さへして行け

ば高きものは倍々高く、卑いものは知らず〳〵高まつて來る、

世には斯の品性なるものは學んで得べきものであると說くものもある、或は出來るかも知らんが甚だ困難なことと思ふ、何故なれば、現今その呼聲の高き德育なるものに就ては、孰れの學校に於ても、古今の偉人傑士または賢婦烈女の傳記は勿論、その他言行錄等を講說して、頻りに之が涵養に努めらるゝのであるから、一人として悖德汚行等を敢て爲る品性の卑い者が無い筈であるが、是等があるのを見れば、學んで到ると云ふことは容易でなからうと思はれるのである、

畢竟それは聞くものゝ心の地面に由つて耕さるゝのであるから、迚も此方の思ふ程に行くものではないけれども若しも導くものゝ說を聽いて、成程と合點して常にその通り行つて往くならば、漸々に心の地面も廣くなり且つ位置も高まつて來るのである、斯うなれば其德が酬いて、品性が高いとか又は品格が善いと云ふやうに現はれて來るものであると考へるが、これが至つて六ケ敷いのである、

婦人の品性といつて特別に擧げるまでも無いが、既に男女と分れて居る以上は、自から男は男女は女の品性即ち德があつて顯はれて來るものであるから、まづ婦人は婦人として外面どこまで女らしく、而して斯の心の內は確乎に大きく高く有つて、女子の爲すべき事を爲し、又目的を貫かんとする者は何處までも其目的に向つて進んで行くも善い、兎に角女子だからとて遊んで居るべき時では無いので、能ふだけ働き勤めねばならぬのである、而して惡に染まず善に向つて進めば、それだけづゝ德を積んで行くのであるから、それと同時に品性が高まつて來るのである、

この婦人の品性と云ふことに就ては、人々に依つて說や議論が異つて一樣には云はれぬが、孰れも皆一部分を捕へ來つて論議せらるゝので、所謂既に現はれたる品格、尙ほ換言すれば眼の前に露はれたる事に

就て一小部分づゝを言議せられてあるので、未だ之が根本に遡つて深く詮索を遂げられた說では無いやうに考へる、されば其の多くある言議の中で、一體人の品性なるものは何處より現はれ來るものであるかと云ふ問題を解釋するに方りて、其は全く倫理や修身で養成さるゝものであるとの斷案を下されたものもあるが、吾人は少しく其と意見を異にして居るのである、

前陳の如く品性なるものは作らるべきものでは無い、元來品性なるものは吾人が先天的に賦與せられつつあるものなれば、倫理を說き修身を講ずるのは斯の天與の賜物を減らさぬやうに助けて發揮して行く仕事と思ふ、重ねて言ふが、生れながらにして德すなはち品性なるものは各自に稟けて來て居るのであるから、助長すべきものでこそあれ決して作爲せらるべき者では無い、彼の佛家の所謂宿德の因緣と云ふも其であらうと考へる、即ち今日作されたる德が高ければ、次に現はれて來る所の其德の報、換言ふれば、品性の他に現はるゝものは、必ずそれ相當の應報があると云ふことは自然の學理で、決して動かすことの出來ないものと深く信じて疑はないのである、

此所に氣が付かずして、その德の無い者が無暗に之を獲やうとして血眼になつて目前の事に焦つて驅廻はるけれども、それは無駄な事で、所謂骨折損の草臥儲けと云ふもので、極見地が卑い者と云はなければならぬのである、故に其樣な事をするよりも、先づ自分は何れ位な品性を有つて居るものであるかと云ふことを自覺して、苟も自己の有する德が薄かつたならば、退いて之を助長することを勉めねばならぬのである、しかも、己れが程度の高低を省みないで一足飛に他の德の厚い品性の高い人と肩を並べやうと焦るときは却つて惡い結果を來すのである、

尤も婦人には一種異例な、氏なくして玉の輿に乘るなどゝ云ふことがある爲に、偶々低き位置に居るも

のが俄かに高きに登りもすれば、立派な衣服を著たり又は高價な持物を持ち、或は飾りを施さなければ品格が無いやうに考へて、急に夫等を新調して著ける、けれどもそれが爲に直ぐに品格が揚るものでは無いのみならず却つて一種の厭ふべき惡感を吾人に與へるものである、一歩を讓りて假りに盛裝すれば品格が昂るものとすれば、彼の襤褸を著て居るものは悉く品格が無いと謂はねばならぬ道理であるが、事實は決して左樣でない、縱し洗ひ曬しの單衣でも又は襤褸の綿入を著て居やうとも、品格のあるものは決して蔽ひかくすと云ふことは出來ないものである、これと云ふも畢竟は精神の修養が行屆いて內に積みたる德の光が自づと外に現はるゝので、一朝一夕に蓄へたるものでは無い、若しも一夜作りに出來るものならば少し極端かは知らんが、彼の袖乞なるものが盛裝したるならばそれで直ちに威嚴が備はり品格が高まりさうなものだが、決して左樣は行かぬのである、

之に依つて見るときは、品性の修養といふことは中々六づかしく、且つ長日月を要するとである、とは云ひながら、右に鑑みたならば、各自その分を守りて働けるだけ働き爲すべきだけを爲し、而して其間陰に德を積んでさへ行けば自然に品性は備はつて來るものであるから、何うか左樣いふ風に心掛けられん事を希望する、特に婦人は目前の事に齷齪する習癖があるが、深く夫等を愼みて女德を損失してはならぬ。

夫婦の別

文學博士　星野恒

私は儒教の方であるから、或は陳腐くして當世と相容れないかも知れん、且つ話せば少し根本に溯つて來るのであるから、自然學說に涉る點も尠くないので、諸孃方には却つて御迷惑であらうと考へる、けれど

も折角の訪問であれば、まづ雜と要旨を搔摘んで述べて見やう、

儒敎で敎ふる人倫の道といふものは、凡て相對的すなはち貴賤とか又は尊卑と云ふやうに二つのものを相對して設けられてあるので、決して箇々銘々に孤り立つて居るものではないから、單に一方ばかりを片落ちに責るといふやうな事はしないのである、例へば、品位に尊卑の別があらうとも、格式に貴賤の差があらうとも、共にその職その責を竭さなければならぬので、唯一方の者ばかりが盡せば、他の一方は何うでも宜いと云ふのでは無い、即ち君と臣、父と子、夫と婦、兄と弟といふやうに相對して居るが、君と臣との間には義といふのが無ければならず、父と子との間には親しみ、夫と婦との間には別、兄と弟との間には悌と云ふやうに各々履むべき道がある、若しも其を履み違へば不臣と呼ばれ不孝等と稱せらるゝのであるから、君は君、臣は臣、父は父子は子と各自に其踐むべき道を履んで、行ふべきを行ひ、務むべきを務めねばならぬのである、

假りに臣たるものが君を侵したり、子たるものが父を淩いだりするやうな事があつたならば如何でせう幾んど世は暗黑と云はねばなるまい、ソコデ古先聖王は之を憂ひて彜倫の道を講明せられて敎導せらるゝ中に夫婦と云ふものゝ間には別といふものが無くてはならぬと云ふ事を敎へられたのである、

一體夫婦の間柄といふものは、相互に親しみ睦み合うて行きさへすれば宜い、それで事足るのであるから、如何かさう爲せて行きたいとの聖人の思召で五常の道といふものを立てられたのである、尤も斯の五倫の道を設けられた當時は、夫婦間の親しみは今日に比すれば餘程厚かつた事は推測することが出來るのである、之を推測することが難からざると同時に、その親しみの厚いのが、月を重ね年を經ると共に狎れて我儘を生じ、種々なる弊害を釀して來て遂には婦女にあるまじき振舞をしたり、又は夫に抵抗する

と云ふやうになる、それに婦女といふものは男子と異つて情一偏に走りたがるものであるから、その爲に知らず〳〵我儘を生じ易い、所謂己に克つと云ふ意志の力が弱い、

一たび情に偏して我儘が募ると云ふやうに爲つて來ては、迚も一家と云ふものが治まるものでは無い、苟くも其樣な事があつては大切なる一家の存亡に管はることであるから、之に就ては確然と夫婦の間に互に相守るべき道を定めて置くべき必要があると認められましたから、ソコデ聖人は、夫婦と云ふものは互に相親しみ相愛せねばならぬが、その間に互に相敬すると云ふ事が無ければならぬと敎へられた、

云ふまでもなく、妻は夫を助け夫は妻を助けて互に相愛し相親しむ中にも、愛が過ぎて我儘の出ないやう、又親しみが餘りて道を失はぬやうに禮節を守るべきものであると敎へられてある、故に少しく身分のある所では居室すらも異にして居るのである、是の儒敎で男女が室を異にすると云ふことに就て種々な說がある中にも、儒敎は女子を奴隷視するものであるなど〻云ふ極端な事を云ふものがあるが、現今世上で中流以上の方々が生活して居らる〻狀態を觀ても、是は主人の書齋、彼は妻君または令孃の部屋と稱へて分けてあるのを見ても思ひ當ることであらうと考へる、若しも論者の云ふ如くであつたならば、現今の生活狀態は何と評せらる〻であらうか、豈夫惡いとは言はれまい、して見れば今より遠き昔に於て定められた聖人の卓見には服せない譯には行くまい、まづ其は兎も角として、夫婦といふものは前陳の如くあるべきもので、而して物事なにくれと無く愼しみ深くいたして各々道を履み外さぬやうに專ら努むべきものである、

昔時水戸の黃門公が、一日侍臣を集めて夫婦別ありとは如何なる意義であるかと問はせらる〻と、各自思ひ〳〵の意見を以て答へましたが、一つとして公の思召に契つたものがない、ソコデ黃門公の仰せらる

ゝには、夫婦別ありと云ふことは即ち新枕の翌朝のやうなものであると說き聞かせられました、成程新婚の翌朝といふものは、互に愛しもし又親しみもして居るけれども、まだ何んだか氣愧かしいやうな一種異樣な感があるもので、その間に自から互に愼しみの意があるものである、その時の心持を持續けてさへ行けば宜いのみならず、愛情も繼續して行くことが出來るのである、繰返して言ふが、男女共に其新枕の翌朝の心持と云ふ其間の消息さへ會得すれば、之が取りも直さず夫婦別ありと云ふ眞面目に合體するのである、然るに下ざまの者などは、忽ちその心を打忘れるのみならず、直ちに愛に褻れ、我儘を生じて、遂にはあられもない無作法を働くといふやうになるが、それは大いに心得違ひと云はねばならぬ、依つて夫婦の間柄といふものは、互に斯新枕の翌朝の心を以て行かねばならぬものである、此語は簡單でこそあれ、よく夫婦の間には敬ふと云ふ心を互に失つてはならぬ、それと同時に親密が淺くてはならぬと云ふ、所謂夫婦別ありといふことを少しも遺憾なく言ひ表はされたもので、公が文教に熱心の程を窺ひ知るのみでは無く、眞に公が非凡の方であると云ふことが判ると云ふことを、安藤爲章といふ人の書た年山紀聞で承知したが、實に黄門公ならでは斯くも平易に萬人の合點の行くやうには解かれまいと感服して居るのみでは無い、夫婦の別を說く毎に引證するのであるが、如何か夫婦の間柄は斯うありたいことゝ思ふのである、

或者は支那の書には男女別ありと稱へて、殊更に男女を別々にするの風がある、が、之は夫婦の間で云つて見れば、愛と親とに遠からせるやうにするので甚だ宜く無い、若しも斯く相互の間を遮るやうにすると、遂には情が隔絕して離婚するやうになると云はるゝが、それは決して左樣では無い、何も男女を別々に部屋へ押籠て置くと云ふのでは無い、男女の室を異にするといふ事は既に前に述べたるから今は省きて此所に夫婦別ありと云ふことは、何も男女に始終別室に居れと云ふのでは無くして、是また前來述ぶるが

如く、愛に狎れ親しみが過ぎて道を失うてはならぬ、それ故に之を豫防するために禮節といふものを設けて、猥りがはしき事や不和惱のやうな事があつてはならぬと誨へて、而して夫婦の間と云ふものは相互に敬ひを致さねばならぬと云ふことを示されたものである、以下少しく例證を擧げて見やうならば、

孔子は、その夫婦の間には愛と敬との二つが大切であると云ふことに就て、禮記の哀公問の章に、昔三代明王の政は必ず其妻子を敬するに道あり、妻は親の主なり、敢て敬せざらんやとあり、又左傳の僖公三十三年に、晉の臼季といふ人が冀といふ國へ使者に行つた途次、冀缺といふ者が耨して居ますと、丁度晝飯頃のことゝて其妻が辨當を持つて行つて、捧げつ受けつするその有樣は全く互に賓客のやうに敬ひ合うて居るのを見まして、心の中に頗る感服して、還つて後に之を文公に推薦して云へるやう、敬は德の聚るなり、能く敬すれば必ず道あり、德は以て民を治むと云つて、下軍太夫と云ふ重き役に冀缺を用ゐられました、これ孰れも夫婦の間には愛と敬との二つが大切であると云ふことを證明して居るのである、

之を以て見るときは、儒敎には決して妻を輕蔑するなどゝ云ふ敎は毫も無い、のみならず夫婦と云ふものは互に持ちつ持たれつして行かなければならぬものであると云ふ事に就ては、易經に、男は位を外に正うし女は位を内に正うす、男女正しうするは天地の大義なり、又父父たり、子子たり中略、夫夫たり婦婦たり而して家道正し、家道正しうして天下定まると說てある、決して夫は何を我儘をして宜いが婦はならぬ、婦は働くべきもので夫は稼がなくとも宜いと云ふやうな無道理のことは一つも說てないのみか、明らかに夫は夫、婦は婦らしくあらねば家道が治らぬと示されてある、この中の如何なる所に妻女を輕んじ侮るやうな意義を發見する事が出來やうか固より無いのであるから發見されやう筈がないのである、

之に加ふるに夫といふ字は扶と通ふので、扶はタスケルと云ふのであるから、女子に比ぶれば男子は剛

健の德に富んで居るものであるから、萬事につけて女子を扶持して行くと云ふのが夫の字義である、而して婦は服に通ふので、一體女子は柔順なる性質のものであれば、前陳の如く、位を内に正うして舅姑に仕へ、夫を助けて家事を取賄うて行くべきが務めである、それらの務に服すると云ふのが婦の字義で、妻は齊に通ずるのでヒトシと訓むのであれば、夫と同等の位置を有つて居るのである、本來妻といふ字の源に溯つて格好を示して說明すると能く解るのであるが、今は略して單に成立ちを話して見れば、妻といふ字は貴き女と云ふ二つの文字を集めて出來て居るのである、されば其意義も高潔なもので、決して陋劣のものでないことは推して知らるゝのである、之が妻の字義なるにも拘はらず、何時の頃よりか知らねど、正妻または內緣の妻などいふ忌はしき文字が往々新聞紙上などに散見せらるゝが、之は頗る彝倫の亂れて居ることを表はすもので、文明の邪事ではあるまいかと思ふのである、故に彼の婢妾などは家にありたりとてそれは謂ゆる召使であるから決して妻と稱することは出來ないので、即ち夫と同等なる位置を有つて家政を整理するものでなければならぬのである、此くの如く齊しく同等の位置を有つものであるとすれば、その實力の上から云ふときは決して甲乙の差は無い、已に甲乙の差が無いとすれば、その間に輕侮の劣視のと云ふ溝渠があらう筈は無いのである、

次に男尊女卑と云ふことは且らく位の上より云ふことであるが、是また如何ともすべからざる事と思ふ何せなれば、身體または性質の上から云へても男子は剛健で外に向つて百般の仕事をするものなれば、如何しても位置が高い、けれども女子は柔順なるもので家に在りて萬事を取り賄つて行くものであれば內助が根本である、それ故に男尊女卑と云ふのは、猶は天は上に在つて地は下に在り、天は施し地は育つると同一理法である、若しもその尊卑が轉倒して地尊天卑と云ふことになつたら如何であらう、それは實に可

笑なものであるが、地尊天卑と云ふことは決して道理上許すべきことでは無い、一體尊卑と云ふ字に拘はつて尊は非常に高く、卑は極めて低いといふ一種の感念より割り出すから宜くないのである、假りに之を眉毛と眼に喩へて見れば、眉毛は上にあるから尊いといひ、眼は下にあるから卑いと云つたとて、何にもその間に効用の隔てが無いと同じである、若し眼が眉毛に向つて不足を訴へた結果、兩者が位置を異へたら如何でせう、その外見の悪いばかりで無く、眼は上の方より落來る塵埃を防ぐべき眉毛が無いから、何れ位困るか知れたものでは無い、故にその止まるべき位置によりて尊卑の名を下すのみで、何もその間に輕侮的嘲笑的などいふ意義は少しも加味せられて居るのではない、

是の故に男尊女卑と云つたからとて、男子は好な我儘をしても構はない、けれども女子たるものは何處までも男子に屈服して、如何に虐げられても一言も返すことは出來ないと云ふ意味なのでは無い、却つて男子たるものは柔順なる女子を扶けて行かねばならぬものであるから、女子に先だちて男子たる者は其道を竭し、其任務を果すべきものであると定められてあるのである、何故なれば、夫の字を編として見の字を作りとすれば規と云ふ字になるので、即ち丈夫たる者は、道理を辨へ品行を愼しみ、己れを見て手本とせしむるやうに爲ることそ實に規の字の意義である、然るに丈夫にして丈夫らしき義務責任も果さず、又男子たるの行爲が無いとすれば婦女に對して規矩となるの價値が無いのである、されば男子は男子らしくあらねばならぬことは規の字を見ても曉るべきである、それと同時に女子もまた縱ひ男子に些の過誤がありたりとても、それを侮り慢ずるやうな事があつてはならぬのである、

往古周の世に牝鷄の晨するはこれ家の索るなりと云つて、鷄の夜鳴を不吉とするが如く、女子の餘りに口數の多いのは良くない、謂ゆる女賢しうして牛賣り損ふと云ふが如く、兎角女子は饒舌なるものである

がそれを愼しまねば遂には家をも亡ぼすに至ると云ふ誡めである、されば女子は何が務めかと云ふに、女子は中饋に在りと規定されてあつて、女子たるものは家の中に在りて炊事その他育兒、接客等の事を掌べきものであると云ふのである、

女子が外事に預つた爲に害を惹起した事は、夏の世の末に桀が末喜の言を用ゐて國を亡ぼした如く、又殷の紂王は妲己の色に溺れて、一から十まで其言を容れたるが爲に社稷を喪つたのが最も適切な例である謂ゆる殷の鑑み遠からずであるが、降つて周の世の初めの皇后方は孰れも賢婦人であつたから勃興した、けれども彼の夏殷二代の末に方りて末喜妲己の二婦人が外事に預つた爲に、國を傾け身を喪ぼしたに懲りたるは勿論一は、時勢の然らしむる所とは言ひ、兎に角國家に害を及ぼすと云ふは恐るべき事であるを覺つたから努めて男女ともに各自その職分を盡して、夫は夫、婦は婦とその境界を誤らず且つ侵さぬやうにして勸め勵みて家道を正しくすべき事を規定されたのである、

前來述べたる所に依りて大率夫婦の間には別あるべきことを了解せられた事と信ずるが、彼の勅語の中にも夫婦相和しと仰せられたるが如く、互に親み愛して親しみたる上に和和せねばなりません、たとひ和睦親愛しても其間に敬といふことを遺れてはなりません、その極意は黄門公の訓誨の言の如く守らねばならぬのである、



胃腸の養生法（承前）

醫學博士　長與稱吉

三　營養品の主成分＝所謂食素（續き）

五、水。　一口に水といへば何んでもないものゝやうであるが、此の水分は吾人の身體にとつては、中々大切なものである。勿論、滋養品としての價値はないが、他の滋養品を體內の成分とするには、是非此のものゝ援助を藉らなければならないのである。

水は化學上水素と酸素とより成り、吾々身體の重さの三分の二を領して居る、即ち血液や淋巴液の中には言ふまでもなく、腦、脊髓、筋肉、骨質等、到る處にこれが存在を認めぬはない。

水の作用　斯の如く身體各所に存在して居る水分は如何なる必要があるのかといふに、先づ第一に、消化液となつて食物を溶解し、又はそれを稀薄めて吸收に便せしめ、或は其の溶解した營養分を荷つて、身體の各所に分配し、又は不要成分たる老廢物を體外に搬ぶ媒介を爲し、或は重要な機關の中や、筋肉の中に潜在して居て、體温を常に適度に調節してゆくのである。即ち汗となり、小便となつて、季候の變化に伴ひ、隨時發散を増減し、以て吾人の體温を一定度に保つてゆくのである。

水分の消費と補給　水分は前にも言つた通り、汗となり、小便となつて、身體を出づる他に、大便の中

にも混じ、又は呼氣の中にも加はり、時としては又鼻涕、涙のやうなものにもなつて、絶えず蒸發し、消散し去るのであるから、吾人は適宜に水を飲用して夫れを補ふべきは勿論である。が、然し吾人は通常、特別に渇した場合を除く他は、單純の水を以て補給を計るといふことは少ない。多くは飲食物に含まれて居る水分によつて。自然に其の消費が償なはれるものである。



然るに今若し、水分の補給が充分につかなかつたり、又は全然杜絶すると、漸次身體諸機關の水分が涸れて來て、血液は濃厚となり、心臓の運營は減じ筋肉の力も亦衰へ手足の尖端から漸々厥冷くなつて、尿量は減じ、遂に痙攣を起し、死の手に攫られるのである。

ルュプネルと云ふ學者は、動物に試驗をして見た結果を綜合して、人體が體内にある水分の十分一を失へば機關の運轉に故障を起し、五分の一乃至それ以上に及べば、終に以上の如うな病氣を發して死に至るもいだといつて居る

――これを以て見ても、人體の水分の必要なことが分るであらう。

六、鹽類　吾々の體内には加里や、曹達や、石灰や苦土や、鐵やが、格魯兒、又は燐酸、硫酸、炭酸などゝ化合いて存在して居る、之れを鹽類といふ。即ち骨の中には燐酸石灰となつて存在し、細胞の中や消化液の中には、燐酸加里、格魯兒曹達となつて存じ、其他血液の中には鐵の化合體を存し、夫々重要な作用を營んで居る。

是等の鹽類は水と同樣に、常に大小便の中に混じ或は汗に交つて、體外に謝出てゆく。だから絶えずこれを補ふ必要がある。

然るに鹽類の供給が不足したり、欠乏したりすると、營養の不良くなるのは勿論、其れが進むと色んな病氣が起る。即ち

一、石灰分が少ないと、佝僂病といつて、骨の軟化する病氣が起り、

二、鐵鹽か不足すると、萎黄病といふ、恐るべき貧血症を發し、

三、加里鹽類が欠乏すると、「スクルブート」といつて、血液が變化し八方から止め度なく出血する病氣を發するのである。

第三の場合はよく、遠洋航海をする際に、船中で發する病氣で、これは新鮮な野菜を取らないために起るのだ。前にも一寸記しておいたが、日露の戰役に旅順を死守して居た露軍の中に、本病患者を多數發生したのも全く、糧道を絶たれた結果、止むなく古い鑵詰肉ばかりを食つて居たからであらう。

鹽類は一に灰分ともいふ。灰分などゝいへば全く不用の成分でゝもあるかの如くに聞えるが、缺くべからざる貴要の食素であることは、以上の説明によつて明かであらう。

嗜好素

以上說き來つた六種の食素は、吾人の營養に、直接効力のあるものであるから、是等のものを適宜に

配合して食べたら、好さゝうなものであるが、惜しい事には純粋の食素は、含水炭素に屬する糖分と鹽類中の格魯兒曹達（即ち食鹽）とを除く外は皆、乾燥無味で、蠟を嚙むやうな者ばかりである。そこで之れに味をつける必要が起る、即ち嗜好素といふものゝ助けを乞はなければならないのである。

嗜好素とは甚麽ものかといふに、酒類の主成分たる「アルコール」や、茶珈琲の主成分たる「コフエイン」や、芥子、胡椒、果實中に含有せらるゝ芳香性の物質や、其他彼の糖分や食鹽の如きものをいひ凡て食品に香味を附與する所のものである。

其の作用としては、神經を刺戟して食慾を催進め胃液の分泌を高め、胃の運動を助け、消化を補ふのである。後章嗜好品の話をする時に、更らに詳しく說かうと思ふ。

家庭に於ける心理學の應用

高島平三郎

第五　思ひ付き

思ひ付きといふことはすべての仕事に大切のことでありますが、家を治めて行く上に就いては取り分けいろ〱の必要があります、今その次第を說く前に先づ思ひ付きといふのは如何なる心の働きであるかといふことを說明しませう。

すべて人は何か一つのことを見たり聞いたり考へたりするとこれに關係ある事をそれからそれとおもひ出すものであります、此の働を心理學では觀念の聯合又は聯想と申しまして著しい心の法則となつて居ります、今其例を擧げて見ますと他の家に往つて玄關に脫いである下駄を見て誰か來て居るといふことを知るのも遠い他鄉に在つて父母の寫眞を見て故鄉の父母のことを思ひ出すのも、或は滊笛によつて

汽車をおもふのも、鐵砲を見て戰爭をおもふのも、曇天に雨傘をおもひ晴天に日傘をおもふのも皆おもひ出の働きです、その外朝目が覺めると着かへることをおもひその次には顏を洗ひその次には御飯を食べその次には學校にゆくとか仕事をするかと云ふやうに次き〳〵にする事を考へ出すの類もおもひ出です、かやうに人は一の事から他の事をおもひ出す心の働の盛なるものでありまして私どもの日常の心の働を考へて見まするると自ら驚くほど、おもひ出の多きものであります、

是等のおもひ出は決してむちやくちやに行はれて居るわけではなくちやんと定まつた規則に從つて居るのであります、心理學ではその法則を類似法と接近法との二つにわけます、類似法といふ方は何か似よつた點があると一つの事から忽ち他の事に考へうつるのです、例へば知らぬ人ばかりの中に唯一人交つて居る時でも多くの人の中に誰か一人故郷の母とか妹とかすべて自分のよく知つてなつかしく思つて居る人に似て居るといふやうな場合にはその人の心には、電光のやうに、母とか妹とかのことがおもひ浮ぶものです、類似はたゞ形に限らず聲が似て居ても樣子が似て居ても關係が似て居ても性質が似て居ても其外何が似て居ても同じことであります、此の働ほど不思議なものは少いほどでありまして場所にも年代にもかゝはらず苟且にも似かよつた所さへあればすぐに心に浮んで來るのです、皆さんが靜かな落着いた時に自分の心を省みて御覽なさい、面白いやうに異つた時異つた處のことが類似法に從つて續〳〵と心に現はれて來ることを經驗なさるでせう、

又接近法といふのは前に擧げたいろ〳〵の例のやうに自分が曾て同じ時に經驗したか同じ處で經驗したかすべて二つのことが心中に接近して、收まつて居る時一方によつて一方をおもひ出すのです、下駄によつて其持主をおもふのは下駄とその人とが一緒に經驗されたからです、顏を洗つた故に食事をおもふのは此二つの働が心の中に接近して收められて居

るからです、前に注意の話の時に説いた『鑿といはゞ槌』などいふのは取りも直さず接近聯合の例であります、

それで是等のおもひ付きの働が平常の生活に如何に役立つて居るかといふに先づ第一には記憶の良否は此の働の如何によることが多いのです、皆さんが何か追懐なさる時にその事に關係する他の事から助を得られることの多いのは度々經驗なさる所でありませう、例へばあまり親しくなかつた友達などに久しぶりで出會ふと何といふ人であつたかどう云ふ人であつたかどうもおもひ出せない、併し顔はたしかに見覺えあるやうであるといふやうな場合にその友達は何處の學校に一所に居た人であるといふやうなことが分るとそれからその學校に就いてのことがいろ〳〵と接近聯合によつて心に浮びその中にはその友達のことも、おもひ付くやうになるものです、すべて物を覺えなさると云ふことはたゞ其事一つを離してポツリと心に留めておくと云ふことは出來惡いので必ず其時の心の働きに結び付けておぼえるのであります、今説いたのは接近の例でありますが、類似作用に依つて記憶を助けることは一層著しくあります

すべて皆さんが、物の道理を理解なさつて、これとこれとは同じ道理であるといふやうに解釋して、お出なさるのは全く類似聯合の働です、例へば乾いた紙をこすつて壁につけると電氣のために紙が壁に吸ひ付くが電車が走るのもこれと同じ道理であるといふ事がわかり從つて電氣の車を引くわけをよく覺えて居ることが出來るの類であります、

此等記憶を助けるといふことは家庭ばかりではない何事に就いても大切でありますが家庭では前にも述べた氣轉を利かすといふことが特に大事です、氣轉が利くのは注意が一つ事から他の事に移るのであるがその働の出來る本は心におもひ付きの働即ち觀念聯合といふ一般の法則があるからです。此法則は何人の心にも行はれて居るのですから教育のある人でも無い人でも聯合が現はれるのは同じことであり

ますけれども、その現はれ方の早いと遲いと多いと少いとは驚くほど違ひがあります、都會の良い家庭で多くの人に接して適當に敎育せられた婦人などのよく氣が付き氣轉の利くことは到底田舍で自然のまゝに生育つた人と比べものにはなりません、修養の足りない人は例へば客が來て外套を着るに一人で困つて居ても平氣で傍に立つて面白さうに見て居るものがあります、これは惡意ではないが思ひ付きが確かり心に浮んで來ず從つて之を手傳ふ行動を現はすに至らぬのです、それゆゑ年頃の女子などは經驗に富んだ良家の主婦の監督を賴み萬事に實際に思ひ付きを現はさしめるやうにする必要があるのです、そうすると自分が一家を整理する時に聯想がいろ〳〵の方面に盛に行はれて萬事によく心をくばり何事にもよく氣の付く良妻とも賢母ともなることが出來るのです、ぼんやりして居るといふのはつまり心の思ひ付きの働きが鈍いのです、併しいくらぼんやりして居る人でも普通の能力のある人ならば全おもひ付きの缺けて居るといふことはありません、卽ちどんな人でもドンが鳴ると晝の御飯だといふことは思ひ付くでせう、雨が降れば傘をさすといふこともおもひ付くでせう、愚者と賢者とはたゞそのおもひ付きの多少と遲速との差であります、

又思ひ付きは之を文字に應用する場合が多いので文學上の面白味は此思ひ付きによることが少くないのであります、凡て文學では比喩といふことに重きをおく場合が多いのです、たとへば一輪の花を詠じても之をたゞ一つの草花として美しいといつたばかりでは何の面白味もないのでありますが之を人にたとへるからその運命などに關して限りない感をおこすのです、例へば一茶の句に『庵の苔花さくすべも知らざりき』といふのがありますが之をたゞ庵の苔のことゝして見たばかりでは一向何等の感が起らぬのですが、之を田舍の哀れな男女の學生などが才を抱き志を有しながら運命の弄ぶ所となつて一生世に出ることも出來ぬものゝことゝして考へれば實に

いひ知れぬ感がおこるのであります、その外有名な加賀の千代の『澁かろか知らねど柿の初ちぎり』といふ句でもそのまゝに解しては別に面白味もないけれども初婚の感を述べたと見れば大に味を生ずるの類です、先年或新聞に『旅衣碓氷の嶺の風を寒み紅葉の錦われにかさなん』と云歌がありましたが、此歌の面白味も紅葉の色を織物の錦に比したところ即ち類似聯合の應用にあるのです、すべて詩歌は自分の心の奥に湧いて居る感情をいひ現はすにたゞ苦しいとか樂しいとかいふても十分他人にその有樣を傳へることが出來ぬから花なり鳥なり天文なり地理なり何でもいくらか我が心の狀態に似かよつた所のあるものを借りてその趣を述べるのであります、それゆへ詩歌の文句をその通りに解しては殺風景に陷るものが多いのであります、例へば李白の詩などに酒のことが多くたゞ酒ばかり飲んで亂暴して居るやうに思はれるものでも心の面白い自由自在な有樣を心地よく酒に醉つた狀態にたとへたと解すれば面白く感ぜられるのです、勿論李白は實際にも大酒を飲んだでせうが必ずしも事實を歌つたものではありますまい、これは李白に限らず詩歌を詠むにはすべて比喩といふことをよく心得て見ねばなりません



類似の思ひ付といふことは又事物の發明創造と密接な關係があります、偉い人は常人の思ひ及ばぬ間に類似の關係を見出して一大原理を考へ付いたり又前人の考へ及ばぬ發明をするのであります、ニユートンの前に幾億の人が林檎の落ちるのを見たのでありませう、併し誰も之から地球と太陽との關係に思ひ付く者がなかつたのです、水道を鐵管で造る發明は伊勢蝦の殼から思ひ付き、トンネルは船の板を食する蟲から思ひ付き釣橋は蜘蛛の巣から思ひ付いたのであります、此やうに何人でも大發明をなすべき心の働がちやんと具はつてあることをおもへば人はどんな人でも決して自から輕んじてはならず、又どんな人をも輕んじてはなりませぬ、併しこんな大きな發明は容易に誰にでも出來るものではありませんが少さいことは毎日家庭で應用してゆくことが出來ませう、裁縫をするにも料理をするにも一つのことを覺えたら之を應用して他の事を自ら考へてやつて見ることなどは全く類似聯合の働です、應用の事柄は小事であつても其の働は偉人が大發明をするのと何等の異る所はないのでありますから皆さんが平常よく心を用ひて心の此の法則を應用してゆかれるやうになさらねばなりませぬ、子供に對しても何物かを示したら『これは何に似て居るか』『これは何と同じか』『これは何と同じ道理で説明が出來るか』といふやうに成る可く類似法の應用を努めさせるやうにするがよいのであります、

聯想法の一種に暗示といふことがあります、これは其字の示す如くに明かに全體の事柄を示さずに唯或る一部分を一寸示してあとは自然の聯合法に任せるのです、日常家庭でお互ひに心を理解するのは暗示法によることが多いのであります、親子の間でも夫婦の際でも何か言ふに一々串細かに皆語らずとも一寸何か合圖をすればそれで意味が了解されるのは全く暗示法作用のためです、例へば夫が机に向ひ文字を認めながら妻に向ひ『水入』を示して『おい之を』といへば細君は『水入に水が無いから入れて持

つて來て呉れ』といふのであるといふことを理解して直ちに立つて水を入れにゆくのでせう萬事が此通りで暗示は實に人の心の働きを簡單にするものであります、父母に仕へるのに色養といふことがむつかしいといふのも、父母の顔色を見てその暗示を理解することがむづかしいからです孝子は聲なきに聞き形なきに見るといふのも暗示か敏捷に働くのに外ならぬのです、常識に富んで經驗の多い人は他人の目付き顔色樣子等でその人の心を讀んでそれに對する處置を取るのであります、催眠術に感じた人は暗示に感ずることが特に深く術を施した人のおもふ通りに心が變るのです、例へば私しが或人に催眠術を施せばその人は私がおもふ通りの心になるのです、私が化物を見せやうとおもつて一寸合圖をするとその人の心にはすぐに化物が見えるのです、是等は一寸不思議のやうですが別に變つた心の働ではないので『つまり通常皆さんの持つてお出なさる心の働が强くあらはれたのに外ならぬのであります、

以上に述べましたやうに思ひ付即ち聯想作用といふことは至つて大切な働でありますが之が爲に害を受ける塲合もありますからよく氣を附けねばなりませぬ、夫は接近聯合の塲合にも類似聯合の塲合にもありますが乃ち左に接近の塲合の話を揭げませう、昔信州の人と房州の人とが江戸の宿屋で落ち合つたことがあつたさうです、ところが何かの話から信州の人が月は山から出るものであるといひましたら房州の人はそれは間違ひである月は海から出るものであるといひました、お互ひに負け嫌ひの人々で言ひのゝしり合ひました末そんなら宿の主人を呼んで聞いて見やうといふことになつて主人を呼んで其わけを話してお前はどちらと思ふかと尋ねて見ましたら主人は笑ひながらそれは兩人とも失禮ながらお間違でございませう、月は瓦屋根の上から出るものでございます、と申したといふことがあります、これは固より作り話でありますが人は接近聯合の習慣から間違つたことを頑固に信用して誤を知らぬ塲合が

少くありません、前の人々は月と山、月と海、月と瓦といふやうにめい〳〵心の中で結び付きが出來て居て信州の人は月と云へば山を考へ、房州の人は月と云へば海、江戸の人は月と云へば瓦屋根を考へるやうになつて居るからおこる間違です、それゆゑ人はなるべく見聞を廣くして多くの塲合に出逢つて見ねばなりません、家庭の内にばかり居て狹い經驗で世の中を理解したつもりで居ると此の話の人々のやうに狹く誤つた考を持つやうになります、類似の思ひ付きも誤ることが多い、それは大切な點の類似しないでたゞ形色などの類似から二つの物を一つにする塲合におこるのです、昔の支那人は此の誤から『くじら』を魚の類に入れて魚扁に『おほぎい』と云ふ意味の京の字を書いて鯨としました、併しくじらが獸であつて魚でないことは今日は小學校の子供でも知つて居ます、それ故類似からの思付きにも深く心を用ひて誤りに陷らぬ樣にせねばなりませぬ、

所謂善良なる家庭の缺點

文學士　吉田熊次

古來歴史を見ましても英雄豪傑といふやうな人は多くは完全なる家庭教育を受けずに成長した、今日に於ても政治界なり商業界なり、或は其他の事業界に於て、勢力もあり名望のあるといふやうな人の中には、極く不完全なる家庭の間に成長して、自分も亦非常に苦しんで、漸く身を立つるに至つた人が多いのである、之に反して、家庭の上に注意を加へ、又敎育上抔に於て種々なる意見を有て居る人の子弟は、却てさういふ人物を出して居らぬといふやうな傾向があるのである、近頃大變に流行して居る所の亞米利加の實業社會の人達・殊にカーネギーや何かの書いてある物などを見ますといふと、『貧困といふものは成功の根本であつて、貧困に生るゝこそ此世に於ける最も大なる幸ひである』といふやうなことを云つて居る、併し貧困な事情の下に在る者は、決

して完全なる家庭教育を受けらるべき性質のものではないのであります。其等の人に限つて憐むべき悲しむべき亂雜なる家庭に成長して居るのでありますが單に是等の事情から考へて見ると、家庭の敎育といふものは、其人の一身の發達進步の爲めに、甚だ力のないものである、隨つて一般世の中で、非常に重んじて八釜敷いふ所の家庭敎育といふやうなものは實際に於て何等の効果もないもの丶やうに考へられるのであるが、是は果して何ういふ理由に基いて居るものであらう、是非一つ研究して置く必要があらうと思ふのであります。

夫れに付て、私が一寸思ひついたことでありまするが、是は斯ういふ事情に原因するものではなからうかと思ふ、無論善良なる家庭といふものは、兒童の成長發達の爲に害を爲すべき氣遣のない筈のものである、惡い家庭と善い家庭とを比較して見たならば、其善い家庭の中に成長したる兒童は、無論首尾よく成功すべき性質のものであるのであります、然るに實際往々是れと反對なる事實の擧つて來るといふものは、世に所謂善良なる家庭といふ中に、善良ならざる點があるのであると思ふ、夫れは世人の動もするといふと見逃して居る點でありはしないかと思ふ。

其點は何であるかと云へば、元來人の最も多く注意を惹く所のものは、形の上に現はる丶事柄、即ち或る事柄に付ての形式の點に於てゞある、一寸仕事をするにしても、其事を器用にする、或は一寸人に物を言ふにも器用に話すとか云ふ樣な風に、仕事をする上の形式の點に於ては隨分注意をするものであるから、隨つて種々なる作法であるとか、或は又種々な心得であるとかいふやうなることは、能く見落しなく授くることが出來る、所謂善良なる家庭といふものは、主として此點にある、即ち不作法の事をせぬとか、或は新しき心得を授けるとかいふやうな風に、主に心得に關することゝ、形式に關する事に付て八釜敷あるのであります、であるから所謂善良な

る家庭といふことは、言ひ換れば不作法なことをせぬやうに間違つたことをせぬやうに戒めて置くといふ風に止つて居るのである、然るに本來人間の本統の働きといふものは、何れの點から發生するかと云へば、其働きの形式の善惡といふことよりも、働き其もの丶大小といふものに依ることが多い、幾ら善良なる間違つて居らぬ所の行ひであつても、其行ひが價値の少い、即ち効果のない世に効果を及ぼさない、隨つて社會に左程有用なものでないといふことならば、行ひ其もの丶價値が甚だ少いのである、間違つた事をしない人が決して豪い人といふことではない、又必ずしも價値のある人といふことでもないのである、であるからして人間の本統の仕事を爲すに至る原因といふものは、缺點なしに働くといふ事よりも、寔に角力が強い、其人のエナーヂーが強いといふことに依存することが多い、此エナーヂーの強いと弱いといふことは、人の成功、其人の事業の大小に最も關係を有つのであつて、其働きに現はる丶作法が正しいとか正しくないとかいふ事は、其人の働きから云へば、甚だ價値の少いものになつて來るのである、所が所謂善良なる家庭といふものは、此エナーヂー其ものを養ふといふことよりも、其エナーヂーの現はる丶形式について八釜敷規定を設けて居るのであるからして、其人は縱令間違つたことをせぬといふことになつても豪いことをするといふことにはならぬのである、是が抑々世の豪い人といふものは、必らずしも所謂善良なる家庭といふもの以外に發生する所以ではあるまいかと思ふ。

自分の考へる所では、之を心理學の上から論じましても、エナーヂー其のもの丶養成は決して單純なる形式的の修養を以て養成さる丶ものでなく其人自身の努力を練磨するにあるのであると思ふ、夫れだからして、其人自ら身を困窮の地に置いて、さうして其困難に打勝つといふやうな、自分自身の努力を練習するといふとでなければ、其人のエーナーヂーは増す譯には往かぬのである、即ち其人が力強き人に

なる働きのある人になるといふ爲には、不足なき家庭に居るよりも、寧ろ不足のある家庭に在つて、自分自身夫に付て工風を凝すといふことが宜いのである、即ち心の働き、或は精神の形式の陶冶の爲めには、何不自由なく整頓した家庭を必要とするのである、けれども自分の精神を練磨する點から云へば、不足のある不完全なる隨つて貧窮な過境に身を置いて、自分自身夫に打勝つといふ所の艱難辛苦を自ら嘗めることが最も必要なる條件であるかと思ふのであります、然るに人は何人も愛情を有たぬ者はない其子弟を愛さぬものはないのでありますからして、不足のない家庭にあつては其子弟を苦しめることをするに忍びない、其子弟になるだけ困難をさせたくないといふので、自然と其人のエナーヂーを養ふといふことが減少して、其人の本統の氣力は衰へるものであると考へます、此弊害は最も社會の上流社會に多いのであつて、富裕なる家の子弟が動もするといふと、一生涯貧家の子弟以下に落て仕舞ふといふやうなことも、此點にあるであらうかと思ふのである、即ち其家庭といふものが能く整頓して居るといふことは却つて其子弟の努力を練習すること、子弟自身の精神の練磨といふことを怠る機會を與へ易きものであるからして、是がため、却て其子弟をして充分の發展を爲さしむることが出來ないやうになるであらうと思ふのである、然るに古來の英雄の如き、又實際其身を苦しき境遇に置きまするといふとイヤ應なしに之を凌ぐといふことの爲に、努力を用ゐる、即ち常に其事の練習をするのであるから夫が爲に、遂に我知らず其人のエナーヂーを增して、さうして立派なる仕事を成し遂げるといふ事になるのである、であるからして若しも眞に善良なる家庭といふ事にしまするならば單に其形の上に間違のない所の心得を兒童に授けるといふことでなしに其兒童の精神をして出來るだけ大なる働きを爲させるといふ事にも充分注意を用ゐて貰ひたいものと思ふ、即ち其子弟をして餘りに安樂をさせずに、其子弟の健

康を破らざる限りは充分に之を窮地に陷いらしめ、自分自身に働かしむるといふことを主としてさうして行つたならば、其間に知らず識らず精神上の努力といふものも養はれて行く譯であらうと思ふのであります、若し此點にして改良されたならば、善良なる家庭に於て傑出したる人物が輩出せぬといふことがあるべき筈はない、却て種々なる便宜を有つて居るだけ、夫等の子弟の幸福となつて、更に其子弟い努力を充分に養つて行くといふことになつたならば、必ずや眞の英雄は善良な



る家庭から輩出するといふことになるであらうと考へるのであります、從來傑出したる人物の善良ならざる家庭の中に輩出したこと、或は善良なる家庭の以外に輩出した者の多いといふとの理由は此點にあるのではなからうか、俗に可愛い子には旅をさせよといふことがあるが、恰も此理に適つて居るものである。

吾々の精神の力といふものは、決して休まして置いて發達することの出來ぬものである、鍛治屋の手を御覧なさい其手は如何にもよく發達してゐる、何故發達して居るか

と云へば、之を日夜使ふからである、其他或は土方の肩を見ると、其肩が發達して居る、何故さうであるかと云へば、是は毎日棒を肩に擔いで重い物を運ぶからであります、精神と雖も丁度是と同じやうなもので、能く夫れを適當なる度に於て働かしむるといふことでなければ、充分に發達さすことが出來ない、適當に勉强をしなければ智力が增さぬと同じやうな工合に、精神固有の力も亦時々夫れを苦しめて、困難に打勝つやうな經驗を積まずんば、決して充分に發達させることは出來ぬものである、であるからして、先づ其人をして幸福ならしめんと欲すれば、先づ其人を苦しめるといふことが必要なとであります、無論其人に到底堪へられぬ所の重荷を負はすといふことは、是は宜しくない、即ち身體を過分に働かせれば、其結果から病氣を來たすといふことがあるから、精神と雖も夫れと同じで、過分に之を勞すれば却つて健康を破り、又全然精神の働きを滅亡するとになるであらう、けれども適當なる度に於て苦しめ、之を練習させるといふことは、最も必要なることで、是れなくては精神の發達は出來ぬものである、して見れば善良なる家庭に於ける心得も單に間違つた考を有ち、或は間違つた事をせぬといふことの外に、其もの自身大なる考を有つて、大なる事をするといふことに付て、充分に注意をして貰ひたいものである、斯うなつたならば、私は確かに善良なる家庭の力よりして、傑出したる人物を輩出せしむるに足るであらうかと考へるのであります。

婦人の衞生

楠田病院長　楠田謙藏

産褥の異常

分娩の後、産褥の中に在る時に、身體の一部或は精神に異常を來すことが、少くないものであるが、是等の異常よりも尙ほ一層重要にして且つ恐るべきものは何であるかと云ふに、即ち産褥に侵入する所

の傳染病、所謂産褥熱なるものである、
たとひ如何に輕き分娩にても、必ず身體の一部には多少の傷を蒙るもので、其傷は縱ひ目に觸れぬほどの微細のものでも、若しも有害の黴菌が來つて附着するやうの事のある時は、忽ち其部分に於て繁殖して炎症即ち熱を起し、その炎症は漸次に其近傍は云ふに及ばず、遂には隔たりたる場所にまで蔓延して、實に恐るべき熱のある病、即ち産褥熱を起すものである、故に縱へ多くの傷を生じたる場合にても、有害の黴菌さへ之に附着することなくば、その傷は久しからずして癒るものであるから、別に心配するにも及ばないのである、

さて其黴菌は、如何にして其所に侵入するかと云ふに、醫士又は産婆等の手、若くは其用うる器械、布切、綿等に附着するに由るものであれば、万一是等のものを一切疵のある所に觸れなければ、一番可いのであるが、止むを得ずして觸れべき場合には、少したりとも黴菌の附着しないやうにさへすれば、

決して此の症に罹るものでは無い、有害なる黴菌は何れの場處にも存在するものであつて、手にも器械にも或は布切にも、必ず無數に附着して居るものであれば、之を除きたる後でなくては傷所に觸れしめてはならぬ、けれども此の微細なる眼にも觸れない黴菌は、中々除き盡すと云ふことは出來ないのである、依つて止むを得ず、藥物か又は熱を以て其生活を奪つて、全く之を殺して無害のものと爲ねばならぬ、

此の際に用うる藥物を消毒藥と云ひ、其黴菌を殺す法を消毒法と云ふのである、その消毒藥には種々あるが、最も廣く用ゐらるゝものは石炭酸、昇汞リゾオル等である、是等の藥品は原物そのまゝでは強過ぎるのみならず、甚しきは毒性を有して居るから、或は消毒すべき物を傷害するの患がある、依つて何れも水を加へて稀薄となし、尙は十分に黴菌を殺すに足るほどの液溶として使用するので、即ち石炭酸とリゾオルとは凡そ五十倍の水を加へ昇汞

は千倍の水を加ふるのである、故に五十倍の石炭酸水とか千倍の昇汞水などゝ唱ふるのは此の事である、尤も手の消毒の爲には、まづ第一が其垢、脂肪等を洗ひ落して後、消毒液で洗はねばならぬ、その最初の清潔法には石鹼又はアルコール等を用うべきものであるが、此の清潔法を行はないで、單に最初から消毒藥で洗つても其の効は無い、

一體消毒藥と云ふものは、之を温めて用うるときは一層その効力は强いものである、斯くの如くにして消毒したる手又は器械は、如何に疵所に觸れたからとて氣遣ひは無い筈であるにも拘はらず、時としては産褥熱を惹起すの原因が是等にある事を發見するものであるから、最も注意に注意を加へねばならぬのである、

それ故に極めて止むを得ない場合を除くの外は、たとひ消毒した手や器械にても、決して疵所は勿論その邊へ觸れしめぬが良い、而して總て外部に當る布切等は熱にて殺菌するも宜いが、或は消毒液に十分浸して行ふのも宜い、此の消毒を云ふことは必ず産褥熱に限るのでは無くして、總ての傳染病の場合にも必要の事であるから、讀者は能く此の事を記臆して居て貰ひたい、

此の黴菌の傳染によりて發する所の産褥熱は、之が爲に發する炎症の區域が異なるに從つて、その症狀にも種々差別がある、けれども既に分娩した時の疵所からして黴菌が入込んで、之が爲に熱を引起したものは、凡て産褥熱と云ふのである、

最早産褥熱に罹つた以上は、一時も早く醫師を招きて治療を加へ、成るべく廣く蔓延せぬやうに手當をするのが肝要である、治療は固より醫士に任すべきものであるが、その命ぜられたる看護上の注意例へば、藥品の使用、氷嚢の使用、身體の清潔法、便通等に就ては十分手落ちの無いやうにせねばならぬ、

元來産褥熱の徵候は、熱の發するので分るものであれば、若しも産褥中に在りて、平常より熱があ

る心地のした時は、大抵三十八度以上位に昇つて居るのであるから、その時は早速醫士の診察を乞ふべきものである、

往々蓐褥中に、乳房の炎症を起すことがある、さうすると惡寒を覺え、熱が出て、乳房には硬い塊が出來て、チョット手を觸れても痛むものであるが、經過の佳いものは下劑を服するか、氷囊をつけなどすれば二三日位で治るものであるけれども、重いものになると、遂には膿を持つに至ることがある、最早此の時に至りては、決して嬰兒に乳を哺ませてはならぬ、

家庭と化學

梅森裕太郎

學理と實際とは常に並行して行かねばならぬものであるが、まづそれも理論と云ふもので、すべて既往に溯つて見ると、例へば、火は燃るもの、水は濕はすものと云ふやうな眞理は天地未開の以前より備つて居ても、その理論は人智の漸く進むに從つて發見せられたと同じである、けれども其學理が發見せられないからとても、以前より實際に利用し應用せられてある事實は澤山なるのみならず、孰れも實際の適應が先で、後より理論が發見せらるゝのである、

而して理論と實際とが並行せらるゝといふ事に就ても、前段の水と火との如きは、最も直接に人生の生活に缺ぐべからざるものであるから、遠き〳〵古へより何れの人々も用ゐ慣れて來て居れば、ソレ火事だと云へば水を注いで之を消し、ヤレ物が濕れたと云へは火に燥すと云ふ樣に造作もなく使ひ分けて居る、是は甚だ簡單なる一例であるが、即ち學理と實際とが並行して居るのである、否、並行せしめて居るのである、併し水や火も中々その應用の範圍は廣いのであるから是を以て足れりとすることは固より出來ない、けれども凡て物の應用といふ事は此の如き按排のものである、

ソコデ前段の如き簡單なものであれば、誰も彼も造作も無く出來るので、別に工夫を凝す必要もないのであるが、少しく込入つた事になると、聊か思慮を廻らさなければならぬ事になるから、大抵のものは面倒だと一口に跳除けてしまふが、それも科に因るので、例へば、衣服一枚でも、衛生にも合ひ、起居にも便利なやうに、學理と實際とが並び行はるゝやうに改良を加へて仕立てるには容易な事では無い必らず多少の時日を費して工夫せなければならぬのであるが、之に反して、日常洗濯をするに方りて石鹼の無い時には、灰汁なり又は洗濯ソーダばかりでも間に合せると云ふやうに機轉を働かさなければならぬと同樣で、何事に附けても餘り手間暇の掛らぬことで得が行くならば、それに從はないのは損である、誰も見す〳〵承知して損をする者もあるまいが、所が、廣き世間には兎角有勝であるから、聊かお話しをして見やうと思ふ、

最早今日では、文學も技藝も其他萬般の事が進歩

したから、彼にも之を應用し、此にも彼を利用すると云ふ、例へば、同じ一つの電氣でも、之を電信電話電車などに應用せらるゝばかりで無くして、彼の軍艦に据えつけられたる大砲の彈丸を射擊にも電氣を應用すると云ふやうに、漸次その區域が廣まつて來て、實に進歩の度は驚くばかりである、それにも關はらず、吾人お互に手近な家庭の事には割合に此の德澤に沾ふことが尠ないやうに考へる、

殊に臺所などへ立入つて見ると尤も甚しいやうに感ずると、云ふものは、戸棚は始終締切りにしてツイゾ風も透さないから、其所を開けると一種異樣な臭がしたり、或は蔬菜の類などは棚や器物の中に放つて置て鼠の蹂躙するに任せ、諸種の流動物の入つた罎類の口頭には白い黴菌が附いて居たり、又は濡れたる什器を乾かさないから其小口が腐つたものを並べて置いたり、此の他尚ほ一々に擧たならば數頁を要することで、是は中流以下とのみ思ふのは見違ひで、隨分それ以上にも澤山見受けるのであ

る、
一體臺所と云ふものは、一家の生命を預つて居る所とも云ふべきもので、一家の健康と不健康とは此所に基くと云つて差支へ無いのである、乃ち普通此所の主權者は誰であるかと云ふに、家婦すなはち妻君であることは勿論である、されば其主婦たる者の遣り方一つで、全家のものを健康にすることも出來れば又不健康に陷らしむることも生ずるので、實に大切な役目と云はねばならぬ、

今現にこの任に居らるゝ方と、將來その責を負ふべき方とに、聊か本題の如きことを承知して願ひたいのであるが、それは疊水練で役には立つまい、世間の學問熱に浮かされた話であらうと冷評さるゝか知らんが、それは讀んで後の事として、兎に角主婦たる者又將來たるべき者は、化學の智識を有たねばならぬものであると云ふことを念頭に置て貰ひたい如何も我國人は、人眞似は上手であるが、實際に學理を應用すると云ふことは不得手で、學問を活用すると云ふよりも、昔風の生字引を貴ぶといふ風が勝つて居るやうであるが、それでは折角學問した効が無いのであるから、如何か之を活用したいものと考へる、苟も此の化學の智識を活用することが出來たならば、是のみにても主婦の資格は十分と云ふことが出來ると考へる、ソコデ少し世間と有樣をかへて二三點を說明しやう、

滋養物と稱へて魚肉、鳥肉、獸肉等を食することが年一年と流行して來たが、これは無論肉類と云ふものは、何れも人體に必要なる蛋白質といふものを含んで居るからである、而して此の蛋白質は妙な性質で、水には溶け易いが熱に逢ふと凝まつてしまふ、それ故に、若しも美い汁を作る目的で肉類を用うるならば、決して熱い煮えたつた中へ入れてはならぬ、誤つて左樣すると、蛋白質は肉の外面で凝つてしまつて、全で肉に衣を被せたやうになつて、肉の美さを汁の方へ移すことが出來ぬのである、依つて左樣いふ時には、冷水の中へ肉を入れて、漸次に

火熱を加へて行くのが適當な方法であるのみならず、水は能く肉の內部に滲み込んで、蛋白質は勿論その他鹽類のやうな溶解性成分までも溶解するから美い汁と柔らかい肉とが出來上るのである。

もしまた之に反して肉を美く喰ふのを目的とする場合には、煮え立た汁の中へ肉を入れるのが最も適當な方法で、さすれば蛋白質は肉の表面に凝つて、水分を肉の中へ滲みこませぬから、肉の味は脱げずに全く肉の中に保存される、けれども多少の蛋白質は汁の表面に浮び出て、脂肪と共に捨てられてしまふから、美い肉を作るには如何しても煮るのは完全な方法とは言はれない。



然らば肉は何處までも肉として、美く喰る方法は何う爲るのかと云ふに、まづ炙つた肉に限る、この場合には、火上に於ける肉の蛋白質は、肉の表面で凝つて外皮のやうなものが出來るばかりで無く、肉

の含んで居た水分は無くなつて、肉の中にある締結組織といふものが膠質に變じて消化し易くなり、且つ肉の內外ともに一種の香味を有する物を生ずるものである、同じ肉でも斯樣に料理の仕方で異うのであるが、餘り世上には注意を拂はれて居らぬ、

次に臺所で最も多く手に觸るゝは火を焚く事であるが、この火といふは竈で焚かうが、又は焜爐で炭を起さうが、概して此の火に依つて食物に變化を來すのである事は云ふまでも無い、その中焜爐はさておき、竈で火を焚くにしても、主婦たる者の注意と否らざるとに由りて、五本の薪で濟む所を十本も費すといふ不經濟を來すのであるから、注意を要するは無論であるが、その焚方を述ぶるに先だちて火の性質を説かう、

火すなはち火焰といふものは、焰心、內焰、外焰といふ三つの部分から成立つもので、之は各自が夜分蠟燭を點火して見ると、一番早く分るので、最も蠟燭の心に近いて淡靑色を帶びて居る部分が焰心でその周圍の光りの强い部分が內焰である、外焰は一番外部の光りの薄い部分を指すので、この外焰は可燃性の瓦斯と遊離して居た炭素が、十分に空氣の供給を受けて、殘す所もなく燃燒するのであるが、內焰は可燃性の瓦斯が、多少の空氣と混合して燃燒はするものゝ瓦斯の幾分は分解し炭素を遊離して居る、焰心は可燃性の瓦斯が集つて、之から燃え始めやうとして居る所で、光りも强くなければ溫度も低い、けれども內焰になると、彼の炭素が灼熱さるゝので、光りは最も强いが、燃燒が不十分だけに溫度は左程高くない、その溫度の最も高いのは外焰であるが、別に灼熱さるゝものが無いから、光りは極めて低いのである、

右の如くであるから、竈の中の燃料は十分に空氣の供給を受けて、全く竈の中で燃え盡させてしまわねばならぬのである、然るに釜や鍋の底に、餘り焰心が接近し過ぎると、焰心若くは內焰が釜や鍋の底を撫でゝ外に逃げ出すから、肝腎な溫度の高い外焰

の部分は、多くは何にも無い所で燃えてしまう事になる譯である、去ながら如何に外焰が大切だからとても、火焰のすべてが鍋釜の底の部分に餘り遠いのは効を爲さぬ、何故かといふに、熱を與へるものは僅に外焰の少温度たるに過ぎぬからである、

之に依つて空氣が如何に燃燒に必要であるかを認めたであらう、空氣の中には酸素があつて、其が或燃料と化合して火と熱とを生ずるのであるから、空氣を與へねば火は消えてしまうのである、火消壺の中で火を消すのも、又は焜爐の口の蓋をするのも、皆空氣に關する化學的の知識を活用したもので、盛んに燃すには亦盛んに空氣と燃料とを供給しなければならぬのである、

この他化學の家庭に應用せられ、又は活用すべき點は尠なくないが、折を見て説く事とする、

新嫁の心得

島崎登久子

およそ女子といふものは、間々自家に婿を迎ふることもあるけれども、先づ十中の八九分までは、成人の後は出で丶他家に嫁入るのが世間の普通であります、

私などは舊幕時代に育つたもので、所謂女大學または庭訓往來流に躾けられて、女子には三從と云ふ先天的の規約があるなど丶やかましく言ひ喃められたものであります、尤も昔は世間一般にそれで育てられ又教へられて來たものでありますから、誰も彼も別に不自由とも窮屈とも感じなかつたのであります、即ちそれが女子の當然であると心得て居りましたから、何處へまゐりましても別に不平の聲も洩れなかつたのであります、のみならず何れの家庭も皆比較的圓く治まつて居たから、左程醜いことも見

聞しないやうでありました、

併し世の中といふものは、畫に描いた地震のやうに動かないものではありません、時々刻々に遷り變つてまゐりますもので、况して明治の御代となりまして、何彼と樣子が改まつて、それに連れて女子の敎、女子の取扱、起居動作から心得等に至るまでも變つて來ましたのでありますから、迚も昔の鑄型を以て女子を育てるなどゝ云ふことの出來るものではありません、私とても前に申した通り昔育ちでありますが、その樣に矢張り一から十まで昔風が佳いと云ふやうな窮屈な考は持つて居りません、明治の御代には明治の御代に相當するやうな女子がほしいと思つて居るのであります、

されば學校へも行かなければならず、また手藝も學ばなければなりますまい、いや此の學問や技藝などの點に於ては、或は昔育の女子に比ぶれば、多少今日の人達の方が勝れて居るかも知れませんが、どうも私の今日までに見うける所に因りますれば、今日それ〴〵の學校を卒業したと云ふ方々が、既に一家の主婦となつて爲さるゝ事が、家庭といふものと結付かない事が少くないかと、思はれるのであります、

今私が見聞いたしました一二の例を擧げますれば、某家の花嫁さんは、和洋料理科の卒業生だと言はるゝにも關はらず、日用の總菜を調理することも御存じないか、或時小魚の料理を爲さるゝのを見れば、初めから魚を鍋に入れて、次に醤油を注で煮て居られました、又ある御一人は、單衣を一枚仕立上るに一週間以上も費されたのであります、之は嘘のやうですが決して僞りではありません、然らば他の家事が忙しかつた爲であらうと云はるゝかも知らんが、さうでも無い、炊事と云うても夫婦二人の小人數で、夫が出勤した後は別に大した用事のある身分でも無いのであります、それにも拘はらず單衣一枚を縫ひ上げるに一週間以上もかゝる、之は未だしもその出來上つた單衣を拜見すると、脊筋にツリがあ

るからよく／＼見ますると、手が熟れないのにマチも打たずに縫つて行きましたから、左右の寸方が跛足になつたので、それを解いて縫ひ直さうともせず、その喰違ひの分だけを途中へ縫ひ込んだものであります、是でも裁縫科の卒業生だと承はりましたが、何と酷い卒業生もあれば有つた者ではありませんか、是等の卒業生の方々の名前も、また卒業證書を與へた學校も判つて居りますが、それだけはお預りにして出しませんが、まだ／＼此の外に澤山實例がありますけれども省くと致しまして、兎に角これで家庭の主婦とは心細い事で、之に卒業證書を與へた學校敎育の程も察せらるゝのではありますまいか、

昔の女子とても悉く裁縫が出來ると云ふ者ばかりでは無くして、多くの中の事でありますから襦袢一つ雜巾一枚縫らない者が無いではありませんが、今時のやうに學校があるでは無し、僅に家庭が裁縫の師匠位に就て習ふので、習つた以上は前のやうに不都合は仕出來さないばかりでは無く、料理などゝ云ふものは、料理人の外は殊更に之を學ぶと云ふ所は無いのであります、けれども是また前に述べましたやうな轉倒はない、それは何處から得たかと云ふに吾家庭で見やう見まねに覺えたのであります、何と雲泥の相違ではありますまいか、

女子たる者は固より身の嗜みと云ふことは大切でありますから、髮も亂さぬやう又お化粧もするが良いまた、衣服も小瀟洒としたものを着なければならないのであります、それに附けては頭より足の爪先まで、物には相應といふことがありますから、それそれ釣合といふものが大事であります、この釣合と云ふことに就ては身代、容貌、年齡、肥瘠、地位、職業等の多方面に眼を配らなければならないのでありますが、さういふ六ケ敷ことは且らく措きまして單に被服のことに就て一例を擧げますれば、僅かに綿銘仙の袷を著ながら繻珍の丸帯を締めたとても、決して釣合が佳いとは云はれません、それと同じく

黒の紋附で式場等へ出る時は勿論のこと、たとひ平常とても白襟の鼠色がゝつたのは見好いものではありません、況して後れ毛は蓬のやうに紊れて、鼠色がゝつた白足袋のしかも、甲馳の廣がつたものを穿いて、人様の中へ出るなどゝ云ふことは、最も女子の愼しまねばならぬことであります、是等は聊かの事のやうでありますが、他面から之を見ますと、自分の懶惰と云ふことを表して居ることになるのです、まだ學校時代の者は兎も角として、最早家庭の主婦たる若い方々に殊に斯樣な風が多いのは慨はしき次第であります、

　私の申しますことは少し痛酷であるかは知りませんが、右述べましたやうな方々の日常は、忙しい爲に左樣いふのかと云ふに、多くはさうで無いどちらかと申せば暇閑に苦しむと云ふ有樣で、或は却つて御本人は忙しいのかも知れん、私どもの見て閑と思ふ間には新聞や雜誌などに耽つて居らるゝから、斯樣な家庭の主人が外出するのを見ますると、毎時も衣服や羽織に疊み目の附て居たことは無いのみか、襦袢の半衿は垢染て光つて居ると云ふ有樣であります、是を以ても家婦たるものゝ性行が推せらるゝではありませんか、元來男子と云ふものは、社會へ出て働くもので、衣服などの事には一向無頓着なものであります、無頓着だからと申して抛つて置くと云ふことは抑も家婦たるものゝ不注意と云はなければなるまいかと思ふのであります、

　聞く所に依りますれば、西洋では悴に嫁を娶りますれば大抵親子が別居するとか申しますが、私も克くは存じませんが、彼方と此方とでは家族とか家庭とか云ふものゝ成立が大部違つて居るやうに承はつて居ります、我國の習慣では、申すも嗚呼ではありますが、一體に先祖を大切にする事になつて居りますけれども、西洋では左樣でないとか申すことで、從つて親は親で稼ぎ、子は子で働いて暮すと云ふ風習ださうでありますから別居するか知れませんが、我國では止むを得ざる或事情の無い限りは必

ず親子の共に棲むのを樂しむのであります、
親子が共に棲むとすれば、無論嫁たる者も一つ家に住はなければならぬは必然のことで、既に嫁入りて同じ家に住ひ若し連れ添ふ良人の兩親即ち舅姑があるとすれば、等しく良人と共に戴くべく敬ふべく事ふべき所の長者であります、間々世間には姑の嫁苛りと云ふことを聞きますけれども、是は双方に缺點があるのではあるまいかと考へらるゝ、それは舅姑の方では、娶る前に餘り望みを繋け過ぎたのと、新婦の方では、嫁入り後の家庭を餘り樂に見て居た此の二つのものが衝突するのであらうと思はれます、若しも双方にその慾望と空想が無かつたならば、恐らくは忌むべき衝突などはありますまい、
一體姑といひ嫁といふも、前にも云へるが如く、既に緣ありて親となり子となつたものであれば、互ひに心の底を打明けて、事へもし、使ひもしたならば其間の折合はぬといふやうな事はない筈のものであります、しかも尚ほ折合が惡いと云ふは、互ひにまだ其の間に所謂我儘があるか、身勝手があるか、但しは氣儘が過ぎるか、横着が募るか、何か故障があるに相違ないのであります、
その多くは何であるかと云ふに、何うも新婦たる者の舅姑に事へる道に於て物足らぬやうに思はれます、何故かといふに、近頃若い方が嫁入りの相談に出遇ひまするとまづ、何は差しおいても舅姑の有りや無しやを問はるゝのを見ても知れます、成程舅姑などの年老が居ない方が煩さく無くて宜からうけれども、たとひ自己の生家に居たとても、兩親といふ年長者が居るのでありますから、緣あつて他に嫁しづくに方つて之が有り無しを問ふの必要はあるまいかと思ふのであります、然るに之を問ふのは、自己の生家なれば我儘も出來るが、一度他へ嫁したとなれば左樣は行かないと云ふ考へがあるからして、何うも舅姑の云ふことや爲ることが、耳にたち目に障つてならないのであります、
去ながら此時にこそは、自己が嘗て學校に於て授

けられたる倫理や修身の事を胸の裏に繰返したならば、少しも辛いとも又は堪へ難いなど丶云ふ考は起らぬのみならず、年長者と云ふものは、我より先に世の爲に働らかれた者なれば、宜しく之を劬り之を慰め之を悦ばしむべきものであると心に締括つてさへ居れば、決して家庭の圓滿を缺ぐといふことはあるまいと思ひます、

　年寄など丶云ふ者は、比較的待遇の樂なもので、まづ其第一は心を慰むると云ふことにあるのであります、此の年長者の心を慰むると云ふことは、何も金錢などに拘はつたものではありません、古人が仰せられた如く、養ふことは犬馬も尚ほ之を克くす、心を養ふことは最も難しとかで、如何に日々山海の珍味を供へ、朝夕絲竹管弦などで耳や眼を悦ばしめられても、唯一つの心を慰むることが出來ないときは、嫁たるもの丶務めを竭くしたとは云はれぬのであります、

料理及菓子製造の實驗

富田豐春

さつまいり

さつまいりと云ふ原因は詳ならず、製法は小豆凡三合位を柔く煮、別に白米一合、焙烙にて、狐色位に熬り、燒米となし、前の煮たる小豆と交合せ水一合入れ、尚よく煮て白砂糖を入れ、加減をなし暫くむらし置くべし、之にて出來上り。

附言　此燒米と云ふ事を、少し述べて見やう、予が幼少頃〔安政の末〕舊釆地より、初冬に燒米と云ふものを、新藁もて作りたる俵（長さ一尺位丸みが一尺五寸位、現時二斤入の茶筒位）へ入れて、地頭夫婦を始めとし、家族の人數丈納める、是は關東の例であつた△其製法は、新米を採取して、玄米の儘ざつとふかし、莚に伸し、一日程乾かして、焙烙にて熬りたるものである、香氣もあり、シナ〳〵として幼稚の頃は年々時期を樂み

に待つたるものであつた、此米を以て、如上のさつまいりを製すれば、最上であり、地方により、苗代の頃蒔殘りたる古米を以て燒米を製し　祝儀に用ゆるよしにも聞知せり、是は香氣なく非なり

大根卷

大根を三寸位に切り、極薄く剝き、四五時間も經過すると大根がしなやかに成りたる加減を見て、別に沙魚、或は鱚杯の類、極淡泊な魚肉、又は鷄肉なれば叩き、何れも少し直に入れて、前の薄く剝ぎたる大根にて二卷位まき、干瓢にて帶をなし、味淋酒、白砂糖、食鹽にて適宜に加減をなして煮汁を用ひ、漫火にて氣長く煮るべし、

注意　形は昆布卷の如くす、

大根卷漬物

大根を一寸位に切り、如上の通り極薄く剝ぎ、五六日も乾して、少し萎びたれば、熟したる柚の皮を一分角位、長さ七分位に細く切り、前の乾大根にて、一卷半位にまき、赤唐芥子を小口より五厘位に切り帶となし、それを酢付とす。

注意　干した唐芥子なれば暫く水に漬け、柔くなりたるを用ゆべし。

初夢漬

秋の末あがり茄子と稱へる、極實の熟した小茄子が尤もよし▽小茄子凡一百▽赤唐芥子（鷹の爪と稱へる小さきものがよし▽鹽一合五勺▽米麹を揉みて一升▽日本芥子四合五勺△酢一合五勺と云ふ分量で、先づ小茄子を蔕の際より切り、唐芥子と共に、如上の鹽にて三日程押石を強くして漬置き、其鹽水を以て、外の品々を交ぜ合せ、瓶に漬込み、蓋をして空氣の入らぬ樣、目張をなし置くべし。

注意　一月一日に瓶の口を開き、年甫の珍客に出し饗應に用ゆるゆゑ初夢漬の名あり、

如上の通り茄子の木を拔去らんとする頃、名殘に小茄子の頭が少し割れかゝりたるを、採取するがよし▽小茄子凡一百△紫蘇の實△小唐芥子少し△鹽八合▽米麹一升▽玄米一升と云ふ割合で、先づ茄子の蔕

の際より軸を切り、前の鹽にて唐芥子も共に三日程押石を強くなして漬置き、別に玄米を普通の飯に炊きて冷まし、前の鹽水にて他の品々と共に交ぜ合せ瓶に漬込み、空氣の入らぬ様葢をなし、目張をなす凡五十日間經過して出すべし。

數の子鹽漬

新乾數の子（瓦品を撰むべし）

▽乾數の子一升
△上酒八合△米麹を揉みて一升
△醤油八合と云ふ割合で、先づ乾數の子を白水（米の洗汁）に一日程漬け置き、清水にて洗ひ、適宜に割り、笊に入れて水氣を去り、他の品と交ぜ合せて瓶に漬込み、葢をして目張りをし、凡四週間過ぎて出すべし、十二月初旬に漬ければ、年始の珍客の饗應、又は年玉の進物にも妙である。



やみ汁

夜味汁と云ふ事は、予が幼稚の頃（安政の末文久の頃）擊劍の寒稽古と云ふと午後六時から十二時まで、竹刀の試合をするので、空腹になるから折々此夜味汁と云ふ事を催す、夫は先大鍋に味噌汁を製し、暗闇に置き、銘々が何品にても持參して投入する、それに葢をして煮上げて食するのである。

睦み料理

むつみ料理と云ふのは、先づ假りに十人として、銘々が料理の材料を持ち寄る、尤も品物を包みて出す、假令ば◎甲は鷄肉◎乙は玉子◎丙は松茸◎丁は蓮根◎戊は玉葱◎己はキャベツ◎庚は鯛◎辛は慈姑◎壬は牛肉◎癸はジャガ芋と云ふやうに、各々思ひ〳〵に考へて出すのである、夫を集め置き、鬮を以て十人の内、三人調理方に撰定し、殘り七人は客と成るのである、三人の者は前記の品々を以て献立をなし、料理して出來上りたれば、十人にて賑み樂みて食す、但料理する品物を豫め撰定して鬮を以て負擔なして出品するもよし。

めしのいろ〳〵（續き）

胡麻めし

黒胡麻を一合焙烙にて熬り、摺鉢にて極能くすり水一升程入れて猶すり、水嚢にてこし、其水を以て米一升程を普通の飯の加減して炊くべし。

玉子めし

玉子十個割りて能くかき廻し、食鹽小匙半分入れて交せ、牛乳五勺を加へ、尚交合せ普通炊立の暖飯一升位に交せ合せ、飯櫃に入れ蓋をして暫くむし置くべし。

紫蘇めし

青紫蘇の葉を採取し、細かに切りて水嚢に入れて水氣を去り、普通飯の暖き處へ交せて食すべし。

献立きのふけふ

日本女子大學教授　福田美知子

皿　せいごの卷繊蒸

せいごの鱗と鰓とを取り、脊の方より開き、脊骨と腹とを取り、洗ひ、鹽を振かけ置く。

豆腐を細かに煎りて、水分を去り、火よりおろし（出來るだけ細かにすべし）味淋とにて、味をつけこれのさめし所へ、玉子を入れ（これはつなぎに入れる）別に胡蘿蔔、莢隱元豆、木茸、などを細く切りて湯がき、だしと砂糖と醬油にて薄く味をつけて

煮て汁を切り、前の豆腐の中に混ぜ、茗荷の子を少々にほひに細く切りて入るればよし、皆よく混ぜ、あまりぼろ〳〵せし時は、少しだしを入れ、前に鹽につけありしせいでを一寸洗ひて水分を取り、中に豆腐をつゝむ（丁度柏餅のやうに）これを蒸籠に布巾を一寸ぬらして敷き、其上に乘せて蒸す（之を見るには、竹の串か、さい箸をさして見て、何もつかざるやうになればよし、あまり長く蒸すと、すの入る時あり）よき時おろして皿に盛るべし。

豆腐の一挺あれば、四人前位出來る、魚小なれば形よく二つ位盛るべし。

附合　干杏のてり煮。

干杏を水に暫時浸し置き、之を洗ひ（塵ある故によく洗ふべし）水より入れて煮る、柔かになりし時、湯をしたみ、味淋と砂糖を入れてよく煮る（燒つけ易き故よくまはすべし、されどかきまはす時は、形くづれる故（鍋にて動かすべし、成るべくぬる火をよしとす）出來上りしならば、前の魚を盛りたる手前に附合すべし。

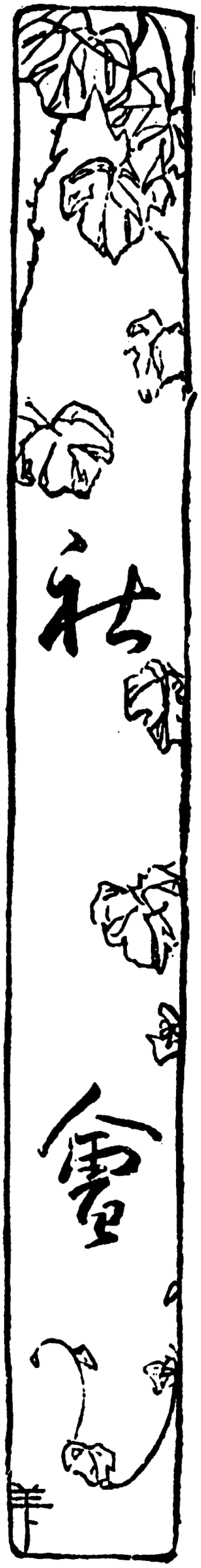
吸物　菊豆腐の清汁

鰹節の煮汁を取り、鹽（七分）醬油（三分）にて味をつける（醬油はおろす時に入れるべし、長く煮る時は苦味のつく恐れあり）

豆腐一挺を八つに切り、隅を少しおとし、これを下迄庖丁の通らざる樣細かに縱橫に入れ、鍋に湯を煮立て置き、其中に葛を少しとかして入れ、其中にて湯かき、穴金杓子にてすくひ、吸物椀に盛り、中央におろし、生姜をのせ、菊の葉をよく洗ひ、一寸湯に通し、豆腐の側に置き、前の清汁をそッとくづれざるやう入れる、すると豆腐は開きて、菊の花のやうになる、一寸品よくてよし、

深皿　蛤の時雨煮

蛤のむき身をよく洗ひ、鍋に入れ、火にかけ、一寸水分を取り、根生姜をおろし、混ぜて、生醬油にて煮る、なか〳〵風味あり。



男女交際の注意

文學士　井上哲次郎　談

男女交際上に於て、女子の注意すべきことは、談話上である、話をする上にちよつと注意しなければならぬことがある、ちよつと避けなければならぬ言葉があつても、日本では平氣で云つて居る、例へば子宮なんと云ふことを平氣で日本の女子がいふ、夫は昔から何とも思はないで言つて來て居るのであるが、然し今後は交際上避けて云はないやうにしなければならぬ、西洋では女子はそんな事を知らぬと云ふことになつて居る、さういふことをば、ちよつと云ふ者があれば全く聞えない風をするか、或は赤くなるかして知らぬと云ふことになつて居る、其實は知て居るか分らぬけれど、知らぬと云ふことに極りが付いて居る、夫から又お產があるなど丶云ふことを男女入雜つた宴會の席で云ふことはいかぬ、云ふ必要があれば別席に避けて云ふべきである、さういふ詞は皆集會の所では避けることになつて居る、夫からして便所のことなども云はぬ、日本では平氣である、ちよつと便所へ行つて來る、小用に行つて來る抔と紳士貴婦人の差別なく平氣で云ふ、夫が昔からの習慣である、けれどもそれは西洋では無禮無作法としてあるので、便所に行く抔と云ふことは云はぬ西洋では『ちよつと行て來ます』ちよつと外へ出ます』と云ふ、外へ出ると云ふ人があると其摸樣を見て覺る、獨逸の料理屋などではウオー、チート、コンアウス、何處から外へ出るかと云ふ、彼は彼處に行

くと云ふことをボーイなどは知つてゐる、マア通例表面に云はぬことである、又女子は其便所に行く際に見られるのを大變嫌ふ、決して見せぬことになつて居る殊に若い女や貴婦人が便所に行く所を紳士から見られることを嫌ふのである、ちよつと貴婦人や若い女が便所に行くことは分らぬやうになつて居る一つの秘密になつて居る　固より西洋でも下等の女は別である、さう云ふ女は此處に這入らぬ夫から握手の禮、西洋の握手の禮にはナカ〳〵種々ある、男子と男子との握手禮



女子教育講演會所見（其の一）

は別に變つたこともないけれども、貴婦人や若い女が紳士と握手するには決して普通にやつてはいかぬ、ナカ〳〵工合がある、極輕くやつて居る大に締めてやるのはナカ〳〵意味のあることである、夫から又貴婦人などが紳士の顔をジロ〳〵見たり、後を振り返つて見たりするのは、大變宜しくないことになつて居る乍併町でも通る時に前から來るのは見て差支へない、殊更に後を振り返つて見るのはいかぬ、男子であつても夫はいかぬ

でせうが、男子の方に於ては、夫程風俗上制裁が付いて居らぬが、女子に於てはどうも夫はいかぬといふことになつて居る、固より顧眄して見るのも何の氣もなく自然に見るのは差支ないでせうが、さういふ習慣の付くのは宜くないと云ふことになつて居る兎に角女子は紳士に接するに當り、殊に男女混合の宴會に於ては愉快な顔色をして、愉快に談話をすると云ふことが、社會の風俗になつて居る、男子も同樣であるけれども、殊に女子は宴會の席の飾り物であつて、西洋では貴婦人が這入らぬと、宴會の席が兎角禮儀正しくない、殊に佛蘭西邊では男子のみ集つた宴會は禮儀正しくない、乍併貴婦人が一人這入るとスッカリ禮法が定まる、社會の風俗が夫で成立つ、夫で未婚の女子であると、先刻云つたやうに自由結婚の風俗があるから無愛相なことのないやうに努めて居らねばならぬのである、又西洋では一生涯嫁入をしないで居る者が隨分多いのである、獨逸抔に殊に多い、其遂に結婚することの出來ない捨られた者が大分ある、夫等は不幸にして良い夫を見付け出さなかつた、又其夫たることを欲する者がなかつた、夫が爲めにさう云ふ女は兎角意地が惡い、意地が惡いのはどう云ふ所から來るかと考へて見ると一つは斯う云ふことであらうと思ふ、誰も娶つて呉れなかつたから不愉快で、人の結婚して居る者を見ると、羨ましくつて堪らぬ、どうも猜疑の念が起つて堪らぬ、夫からして意地が惡いのもありませう意地が惡いから貰ふ者がなかつたと云ふこともありませう、兎に角夫は事實である、其他種々女子の注意すべきことがある、日本では何とも思はずして平氣で云つて居るやうな又爲して居るやうなことも、今後次第に西洋人と交際するに當つて避けなければならぬことがある、男子の側は一言にして云へば貴婦人に對して無禮をせぬやうに注意さへして居れば宜いのである、無禮と云へば總ての無禮を云ふので烟草を吸ふの抔も其一つである、殊に滊車の中で貴婦人の居るのに烟を吹掛て平氣で居る人があるあれ

は宜くない、日本ではお婆さんなどには烟草を吸ふ者もあるけれども、若い婦人は嫌ふ、強い卷烟草杯の煙を吹掛けられては甚だ迷惑であらうと思ふ、夫からして無作法なる擧動をやる人が日本では隨分多い、滊車の中などで隨分見る、貴婦人の乘つて居る場合殊に私の見たのは西洋の貴婦人の乘つて居る場合に平氣で尻を捲つて後を向けて居るものがあつた、あゝいふことをされては日本の蠻風を歐羅巴に廣告するやうなもので、實に驚くより外はないがさういふ事は幾らもある、甚だ宜くない、兎に角一方では此女子の教育といふものがズッと進み、一方では宴會の組織と云ふものが變更され、夫から娯樂の具が備はり、其結果として男子が女子に對する態度が變つて來ますれば決して、西洋に劣ることはない合せて從來の日本の美風をも存して行きますれば餘程良い風俗が起るに相違ない、夫から貴婦人の道と紳士の道と云ふものが次第に風俗として出來て來なければならぬ、何分維新の大變動の爲に昔の士風と云ふものが餘程破壞されて、社會の風俗に激變を生じた爲にチャンとした貴婦人の道や紳士の道と云ふものが出來て居らぬ、今後は次第に是れが出來て來なければならぬ、一方に於ては夫を教育に依て作り出し一方に於ては社會制裁から作り出して行かなければならぬ、夫から今迄論じた男女の交際と云ふものは貴婦人紳士に對する交際で未婚既婚を問はず、總て男女の交際であるが、又青年少女殊に結婚時に達した男と云ふものは餘程デリケートのものであるから交際をするにしても、或嚴肅なる制限の下に於てのみ許すべきものである、西洋では決して無闇に交際する譯ではない、矢張良家の娘と世の紳士と交際する上に於ては夫々種々制限が設けてある、夫は風俗上の制限で漫りにさう自由の交際をするといふやうな譯ではない、夫で日本でも男女交際の道を改良するといつて矢鱈に昔からの制限を取除いて、何でも蚊でも氣儘に交際するのが善いといふのではない、さう誤解しては大變な間違である、矢張嚴密な

る制限の下に交際を爲し遂げなければならぬ、女子は男子よりは比較的に宗教又は倫理の考へを持つて居ることが必要である、別段宗教學とか倫理學とか云ふことでなくても善い、唯々自分の信念を定めるだけのものを持つて居るのが必要である、其必要であるといふ理由は女子はどうしても寄り縋ると云ふやうな心が大變に多い、自分の夫に寄り縋ると云ふやうなことが出來れば夫で萬事夫に依賴して行ける譯である、けれども社會の狀態と云ふものが未だ完全と云ふ譯に往かず、西洋のやうに段々自由な交際を引入れたにしても種々女子の身に取つては危いこともないとは云へませぬから、女子は自分の心に人間以外に、一つ賴む所がなければならぬ、夫は宗教に依るか即ち今迄の佛教とか基督教とか云ふ如きものに依て自分のチャンとしたスワリを付けて居るか又夫等の宗教に限つた譯ではなく倫理の考へでも善い、自分の心にスワル所があつて、緩急の時に人に便らずして自分の心の中にチャンと平和のスワリがなければならぬ、昔は女子に於ても武士道が行はれてナカ〳〵強い處があつた、德川時代にはそれが盛に行はれて居つた、德川時代の武士道といふものは確に女子教育にも這入つて居る、自分の節操に關しては生命を以て爭ふ、即ち自分の節を立る以上は此生命を失つても構はぬと云ふことであつた、夫故に女子と雖も武士の精神を以て自殺した歷史が幾らも殘つて居る、夫は其時代の一種の信仰即ち武士教育に依つて得られた信念、其信念があつたから女子も自ら女子の立場があつて、人間以外に一つ賴む所があつた、處が維新以後の教育はそれと違ひ種々な國亂があつた爲に矢張信念も崩れてチャンとしたスワリが出來て居ない、固より其中には宗教に依て極めて居る人もあらう、又教育に依て極めて居る者もあらう、けれどもブラついて居る人が隨分多からうと思ふ、さう云ふ人は矢張チャンとした一つ嚴重なる信念、即ち人間以外の信念と云ふものを持て緩急の時に自分の寄り縋つて行くやうなものを持て居なけ

ればならぬ、然らざれば男女の交際の道が十分立たぬ、何故ならば女子が男子に對して制裁力を加へるのは全く其處から來るのである、女子が男子に制裁力を加へなければ交際は高尚になつて來ぬ、さう云ふ信念は昔の宗教には限らない教育に依つて倫理の上の信仰を吹込んでも十分道は立つであらう。

女子の社會教育

文學士　三輪田元道

婦人が社會と遠ざかると云ふことは、凡て野蠻國の特徴である、例へば、隣國の朝鮮や支那の婦人は毫も社會に關係しないが、一家の内では兎に角勢力もあれば、多少家庭に對する智識は有つて居る、けれども殆んど社會と遠ざかつて居るのは事實で、斯う云ふことは社會の爲にも、將また女子に取つても共に弊害こそあれ、決して利益のあるものでは無い元來支那では、女子と小人は養ひ難しなど丶云つて居るが、要するに、女子は非理を解せぬものである其分らぬ者の意見を通さうとすれば、必ず不都合を生ずるものである、と斯う考へて居るから、牝鷄の晨するは、これ家の索るなりと云ふやうな語を產み出すのであるが、之は畢竟するに儒教の勢力としてよりも、寧ろ女子の缺點を曝露したものである、

婦人が社會的の智識を吸收し、社會の實相を解釋して行くときは、啻に己が偏見を覺るのみでなくして、自然に正當な公平の意見を懷いて來るやうになるのである、けれども朝鮮や支那のやうに、婦人をして社會に近づかしめぬと云ふよりは、却つて之を斥けると云ふやうでは、決して婦人に社會の實相を知悉せしむるなど丶云ふことは夢にだも見る事は出來ないのである、

それらに比較すれば、我日本の婦人は遙かに進んで居ることは事實である、けれども未だ幼稚の域を脫せないのであるから、尚ほ一層社會的の教育を施さねばならぬ必要を認むるのである、其所へ行くと

歐羅巴の婦人は、僅かに男子に匹敵するに足るだけの社會的の智識を有つて居る、その爲には缺點もあるが、又利益もある、故に婦人の敎育を作成するには、彼の長を採つて我が短を補ふを以て目的とせねばならぬ、即ち婦人に社會的敎育を施すには、文明的の長所を採り來つて、智識を與ふると同時に實相を知悉せしめねばならぬのである、

社會的の敎育を施すには、新たな空氣を吸收して敏活なる行動をせしめねばならぬのであるが、それは如何にせば可なるかと云ふに、吾人の考ふる所に因れば、

第一婦人たる者が、社會全般との交際機關を得ることが必要である、我國に於ける現今婦人の地位は彼の朝鮮や支那に比すれば、數等高まつては居る、けれども宴會又は集會等の席へ顏を出すと云ふことは稀れなるのみならず、縱ひ出席するにしても遠慮勝と云ふ風がある、言ひ換ふれば、夫等に對して婦人が安全なる地位を有つて居らぬと、云ふものは、

若しも良家の婦人が集會等に出席すると、暗に之を愚弄し且つ輕蔑すると云ふやうな傾きがある、之は男子側の弊であるから改めねばならぬが、尙は一つには、宴會の席上等へ良家の婦人が出席して居ると餘り生眞面目で興味が薄い、面白くないと云ふ中に一種の惰性に驅られて、却つて醜業的の婦人が侍して居なければ座興が無いやうに考へて、之を歡迎する、斯くの如くして婦人が故意に遠ざけられるのであるが、之は何が爲かと云ふに、彼等醜業的のものは、金錢問題の關係も與つて力があるが、兎に角客あしらひが上手で、詞のかけひきから起居擧動に至るまで、所謂客をそらさない、之に反して、我國現時の婦人は、概して夫等が下手である、

是の故に今よりして男女間の交際が、正しく道德的に發達したならば、自然に或一部の男子をして醜業的のものを斥けしむると同時に、それらの席上には自ら進んで智識の交換をなし、又は四方山の話しなどをして興を添へる等の事を努めねばならぬ、さ

うなれば男子の側からも、それらの婦人が出席する事を望むやうになるのであるけれども未だ現今の婦人には其技倆が無い、之が婦人たる者の社會的地位を得られぬ一の原因である、故に之が修養を怠つてはならぬ
第二に社會的の事業、即ち慈善又は公共等の爲に盡す道徳的事業に力を致して貰ひたい、尤も是迄とても盡力しないでは無い、隨分程度から云へば、男子より以上に盡して居る事もあるが、大抵は男子が婦人の名を假りて之を利用するに過ぎないやうに思はれる、如



女子教育講演會所見（其の二）

何も婦人自らが活動して竭すと云ふことは稀のやうで、從つて婦人が獨力で行るなど丶云ふことは全く無く、概して男子の驥尾に附して、その指揮監督および保護を受けて單に其範圍内に於て行動すると云ふに過ぎないので、眞に獨立獨行で活動すると云ふものは無い、古語にも自ら卑うして、人之を侮るとか云ふ如く婦人が常に男子に攀縁すると云ふやうでは、迚も社會に於ける婦人の地位を高めることは出來ないのであるから、婦人は婦

人自らの地位を認識して、益々進んで新らしき、智識を求めて、公平なる判斷の下に前述の事業に盡粹せられたいものである。

第三に、我國の舊習として、何うも婦人が社交的行動をするのを忌むの風が存して居る。けれども婦人と云ふものは用意周到であるものなれば、出來得る限り社交的の行動を取つて貰ひたい、が、如何に吾人が社交的の行動を婦人に望んだからと云つても各自の家庭と云ふことを忘れてはならぬ、即ち婦人と云ふものが社交的の行動を取るにも、先づ各自の家庭を整理したる後、餘力があつたならば之に及ぼして貰ひたいので、吾人は常に之を原則として居るのである、未だ自己の家庭すらも齊はぬ者が、濫りに社交は大切だと云つて行動することは、決して望ましい事では無い、のみならず其は絕對的に非認するが、

今日の如く、一切家庭の外、尙ほ極端に云へば閨門の外に出ないで、始終深窓に閉ぢ籠つて居て、毫

も社會と觸れないと云ふやうでは、徒らに性癖を增長せしむるに過ぎない、即ち性癖とは、嫉妬、猜忌狹量、偏見等である、是等は畢竟ずるに世界眼の狹い所より起るのである、且つ婦人は頗る感情的、神經的のものであつて、平常社會の構造に當つて居らぬ、それ故に何か初めて見聞した事に就ては、非常に刺戟を感ずるのである、

依つて如何しても或點までは新らしき智識を吸收して、理解を公平にし、判斷を明確に下すやうにせねばならぬのみではなく、また爲せるやうにしなければならぬ、さうなれば自然にヒステリー的の數を減ずることが出來るのである、實際多くの婦人がヒステリーを有して居るのは、社會の實相に當らず、從つて世界眼が狹いのに歸因して、遂には前述の如き性癖を成すのである、

以上揭げ來りしが如き缺炊があるとすれば、如何にして之を救濟するのが目下の急務であるかと云ふに、中々指を僂ふるに遑がないのであるが、まづ

第一に新らしき智識を與へると云ふことが必要である、その手段としては、一種慈善的に種々の講演を開催して新らしき智識を與へるのが捷徑である、即ち貴社の催しにかゝる女子教育講演會の如き、又は婦人教育會或は婦人衛生會と云ふやうな講演を屢〻開いて、そこに於て講師が新智識を與へるのである、隨分是までも左樣いふ會が開かるゝやうだが、何時も聽衆が少ないやうに見受けらるゝ、それは何が爲かと云ふに、我國の婦人は尚だ新智識を受け入れる程に素養が出來て居らぬ、即ち智識の田園が開拓されて居ない、故に折角講師方が有益なる道德、倫理その他學術技藝は勿論、凡そ社會萬般の事に關して講演せられても此方に其を咀嚼消化だけの力が無いから、從つて興味を感じない、樂しくない、ツイ面白くないから出席を見合せると云ふのが、聽衆の少ない一つの原因と思ふ、

尚ほ一つの原因は、現時我國の家庭には、未だその間に分業が行はれて居ないのと、時間の思想が薄い爲に、タヾ朝から晩まで齷齪として忙しくばかりあるので、所謂一定の時間を得ると云ふ事が婦人は難いのである、如何か是等は整頓して規定の時間を得るやうにして、說く者も又聽く者も、特に會合して心身上の慰藉を得るやうにしたい、

歐州では、彼の基督教なる者の會堂があつて、必ず日曜日には男女老幼が集つて、教を聞くと共に相互に智識の交換をしたり、又は談笑して身心上の怡樂を得ると云ふことは、最早一つの習慣となつて居る、何うか我國でも左樣いふ風にしたいものだが、宗教には佛教もある、けれども現今は衰へ氣味で、之に其望を屬することも出來ない、

固より吾人は宗教にのみ重きを置くのでは無い、學術でも技藝でも、その何れを問はない、唯屢次斯の如き會合を開催して、婦人を開發して行つたならば、必ず善良なる且つ新鮮なる智識を獲せしむることが出來ると、自分は深く信じて疑はないばかりで無く、頻繁に之が開催を希望するのである、

第二我國には娯樂機關が發達して居ない、僅に大都會に一二箇所あるのみで、その他には殆んど無いその僅に在る所の模樣は如何と云ふに、概して誰も行つたから吾も往かうと云ふ、一種の虛榮心に驅られて、徒らに貴重な金錢を抛つて切符を買ひ、サテ入場してからは如何かと云ふに、まんざら馬耳東風でも無いが、眞に其趣味や妙所を感得するものは至つて稀で、比較上幼稚であつて、之を味はふだけの智識が缺けて居る、加ふるに現時我國に於ける娯樂の機關たる場所へ出入する者を見るに、多くは無遠慮に飲食したり、又は傍若無人に談笑し喧噪して、專ら奢侈を衒ふと謂ふ風が勢力を占て居るのを見ても、早已に娯樂の趣味の何たるかを解する智識の零であると云ふことを表白して居るのであるが、如何か一日も早く是等の風儀は根絶したい、

演劇も或意味に於て吾人に一種の智識を與ふるもので、敢て斥くべきものでは無い、彼の德川時代の婦人は、現今の婦人のやうに、別に學校と云ふもの、設備が無いので、偶々訓誨と云ふても庭訓往來とか、又は女大學位であるにも拘はらず、その節操の高きこと、人情の濃かなること、義理の正しき事等は、實に驚くばかりである、斯樣な美質は果して何處より得來りたるかと云ふに、その或部分は確かに演劇なる娯樂機關より獲たのである、之に依つて見る時は、演劇も亦社會敎育に與つて力あるものと云はねばならぬのである、故に演劇も時々觀るが可いけれども維新後に於ける我國の劇場は、その出入する者に如何はしいものが澤山あるから、却つて風俗壞亂の基とこそなれ、決して風敎上に利する所は無い、併し演劇その物には多少敎育上に資する價値が無いでも無いが、兎に角日本現時の演劇は、決して歐洲の如くフロックコートを着て見に行く程の品位は無い、何れも見渡す限り著流で見物して居るのみか、毎に卑猥な詞を弄び、甚しきは見るも忌はしき陋態を演じて居る、斯の如きは毫も敎育上に利する所では無い、寧ろ害を與ふるものである、

殊に智識もなく又品位も無き藝妓風情を取り圍んで得々として居る者がある、演劇者そのものも亦是等の總見物を歡迎すると云ふ傾き所では無い、實際雀躍歡迎する所より、自然是等の者が場中に瀰漫して居るから、迚も良家の子女たる者は、是等と伍して觀劇するに忍びないものである斯の弊風を一洗するには、第一は脚本の改良、第二は俳優の改善、此の二者は社會教育上に於ける一大急務である　聞く所に依れば此頃之が新設せらるゝと云ふ説があるが、一日も早く之が新



女子教育講演會所見（其の三）

設の速かならんことを、社會教育上のために望むのである、

序でだからチョット歐洲の例を話さう、彼の國では場外にて番號の附せられたる切符を購ひ、それを持つて中に入れば、椅子にも亦同番號を附せられてある、故に決して他人の席を塞ぐやうなこともなければ、また自分の席を奪はれるやうな事もなく、而して觀客が何れも靜粛で、如何にも見物の心地が佳いが、我日本では如何かと云ふに、茶屋なるものを通して行

かなければ見物にならない、否、見物として他人が見て佳れないと云ふやうな誤想を抱き、茶屋も亦某々は自家の常客として居る、即ち一種の株と心得て居る、

斯くの如く觀客も茶屋も共に誤想を抱いて居るから、觀客は奢侈を衒ふて茶屋を通して行き、茶屋は之を劇場に送りて顧客の多きを誇ると云ふ風になつて居る、故に前にも述べた藝妓の總見物など稱するのは隱然一種の勢力をなして歡迎を受けるのである以上の如くであるから、自然に無駄な入費も嵩む所より、まづ大抵の者は經濟上の都合もあるから行くのを見合せるやうになる、偶々行つて見れば、四面淫卑の聲を以て充たさるゝと云ふ景狀であるから、一層足が遠くなる、足が遠くなるから社會の實相が分らぬと云ふやうに陷つて來るのであるから、如何か之も社會的に改善發達させたいものである、

第三は婦人の習慣上、即ち家庭に於て交際する範圍に於て、料理、交際の伎倆、裝飾等に關する智識を高尙に發達させたいものであるが、之れ等は實際その事に當らせるのが必要である、我國で宴會と云へば、多くは會席等で行ひ、若し又少數の人の時には、所謂仕出屋なるものから料理を取り寄て振舞ふと云ふのが、現時の常態であるやうに見受けるが全然とは言はぬが、之は餘り思はしく無い、假りに其は恕するとしても、晩餐會等を相互の間にする時は、必ず婦人自ら庖丁を下して調理をなし、而して互に玩味すると云ふやうにすれば、從つて調理にも熟して來るのである、之と同時に交際の伎倆等にも長て來るのであるから、如何しても是は婦人自身に其衝に當らせねば、否、當つて貰はねばならぬ、さうすれば前に聯ねたる諸種の利益を、知らず〱の間に收得するのであるから、斯の點も社會改良を要するのである、

併し現時の婦人とても、我國固有の美點は澤山有つて居る、實に彼の戰捷の半以上の名譽は婦人に分たねばならぬのであるが、尙だ今日は形式の上に於

て毫も婦人は名譽を受けて居ない、けれども彼の大勝利を得るに與つて力のあることは、吾人深く肝に銘じて居るのみならず、今尙ほ當時を回想すれば、婦人の活動が躍如として眼前に覩ゆるのである、

斯くも我國の婦人は固有の美質を具へて居るので今その美質を擧げたからとて、自負的に之を慫慂するのでは無い、何處までも其固有の美質を發揮すると同時に、尙ほ如上の如き缺隙があるとしたならば彼れの長を採つて我が短を補うて行けば、更に卞和の玉、夜光の珠は一層光輝を增すことであらうと思ふのである、けれども若しも自分には最早是だけの光りがあると安心して腰を落ちつけるときは、即ちそれが玉の翳り初めとなるのであれば、磨くが上にも琢かねばならぬ、

以上述べたる所を概括して見れば、我國現時の婦人は、凡て社會の實相即ち世事に疎く、人情に通曉して居らぬのみか、性癖に偏倚して自重心に乏しいのであるから、之を補ふて行くには社會敎育を以てせねばならぬ、その社會敎育を以てせねばならぬのであるが、之に就ては其機關の改善を第一に計ると同時に、之が發達を講ずることが今日の最大急務であるから、如何か一日も速く之が實行あらんことを希望するのである、

伯林の女學校

文學士　丸山信次

伯林と云へば、我國で東京と云ふが如く、獨乙國の首都である、その首都たる伯林に於ける女學校の模樣を報道するに就ては、まづ彼の國の敎育制度を話して置かないと、或點に於て我國のものと對照して、頗る奇異の感を起さるゝであらうと思ふからである、

伯林で國民敎育を施すには、その根底からして之を中流以上と以下との二つに區別してある、例へば我國の學校では、普通の小學校が一般の國民を敎育

し、學習院が中流以上の子弟を教育するやうなものである、けれども我國は其間に自由が存して居るが獨乙では全く確然と二つに區別してあつて混同することを許さないと云ふ制度になつて居る、

それ故に學校の組織も教育の方針も違つて來るので、女學校と云うても、中流以下の子女を教育するには國民學校と稱するものに入學せしめ、中流以上の者は高等女學校と名くる學校に收容さるゝのである、而して此に奇妙のことは、中流以下の女子は、女子國民學校を卒業して後、更に女子補習學校なるものに於て教育を受くることが出來るのであるにも拘はらず、中流以上の者は始より終まで、單に高等女學校に止まるべく規定されてある、約めて云へば中流以上の女子の爲には、高等女學校以外には、他に學校が無いのである、

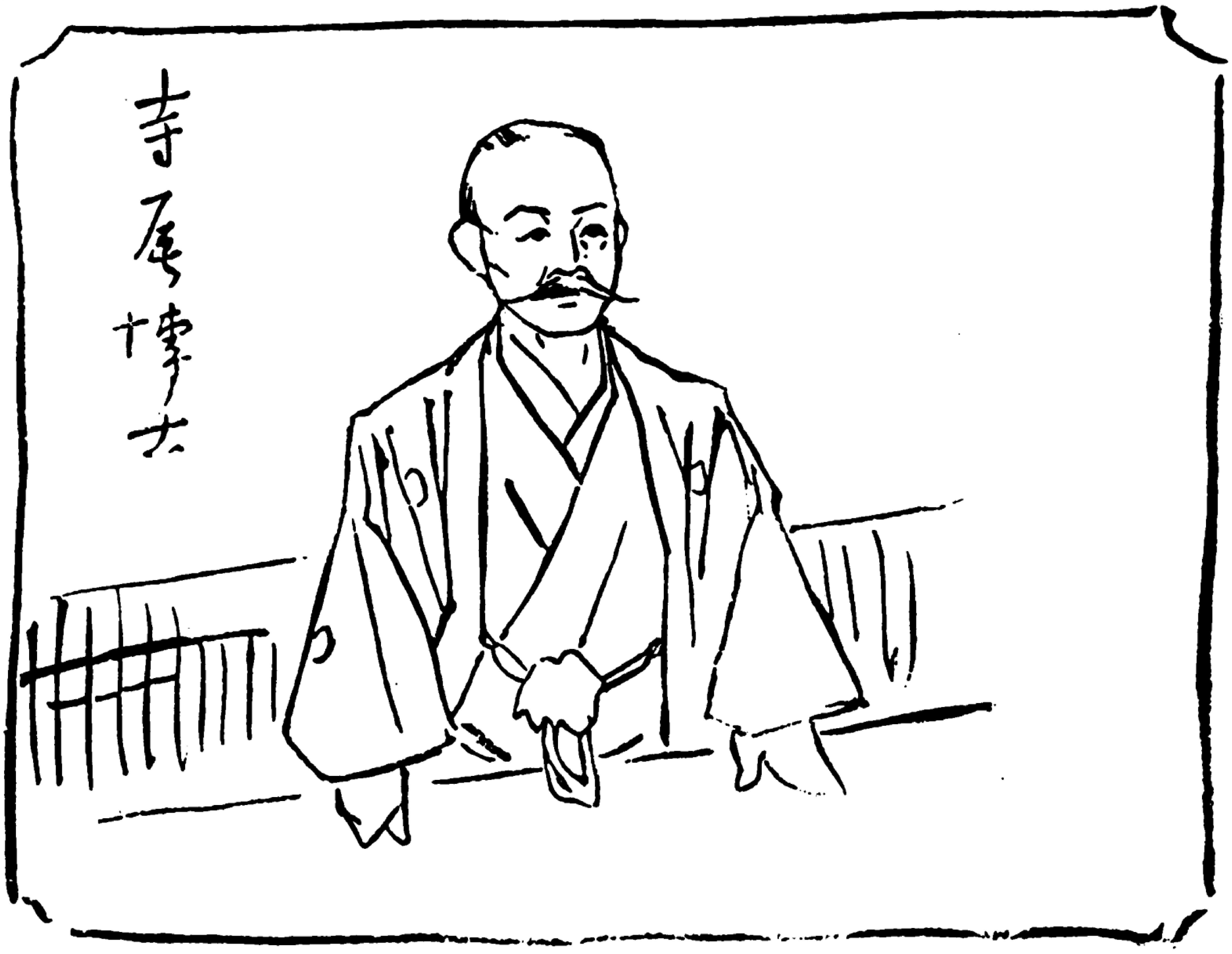
右の三つの中で、女子國民學校なるものは、前陳の如く、中流以下の子女を教育する所であるから、その方針は義務教育で、純然たる無月謝主義であれば、學校用の器具や教科用のものまでも、出來得る限りは貸與するのみならず、縱ひ筆墨紙のやうなものでも、全で生徒の自辨させる所は稀なのであるから、まづ生徒が一切負擔して通學すると云ふ者は皆無と云ふべきである、丁度我國で最近僅に新設せられ、尚は進んで增設せられんとする特種學校のやうなもので、而して生徒は六ヶ年だけの課程を修了すれば、それにて卒業の資格は得らるゝのである、よしんば偶々遲鈍な者があつても、此の女子國民學校に滿八ヶ年の間在學すれば、若しその滿六ヶ年の學課を修了しなくとも、即ちそれで學校の義務教育を受けたことになるのである、

一體彼の國の教育精神は、我國の如く規則的また注入的では無い、その特色は、互に伸縮自在であつて、成るべく其地方や子女の境遇に適應するやうに教育を施すのであるから、生徒各自の成績を驗べるにも、敢て試驗に於ける點數を標準として定めるのでは無く、單に、極めて良い、なか〳〵良い、良い

や、惡い、極めて惡いなど云ふ評語で及落を決するのである、

次に女子補習學校は、既に女子國民學校を修了した者が進んで入るべき學校であるが、云はゞ一種の女子實業夜學校なるもので、則ち中流以下の女子が、女子國民學校の外には、別に高等の教育を受ける事は出來ないので、止むを得ず、之を補ふために此の夜學校に就て實用の學科を研究するのである、

然らば此の學校に於ては如何なる學科を授くるかと云ふに、割烹、裁縫、刺繍



女子教育講演會所見（其の四）

佛語、英語、商業算術、圖畫、簿記等の種類で、主として實用に適すべき目的で養成するのである而して此の學校は、前の女子國民學校と最も近く接續して、言はゞ姉妹のやうであるから、從つて其主趣が前者に準じて組織せられてある、例へば授業科の如きも、敢て無月謝と云ふ程では無いけれども、殆んど無月謝と云ふべき程の低廉なのである、

之に要する學校は、別に校舎の設備があるのでは無い、即ち女子國民學

校を使用して、僅に夜間と日曜日のみを以て授業するのであるから、毫も晝間の國民教育に差支の無いのみならず、經費も澤山に要しないのである、而して授業時間は、大抵毎夜午後六時半より九時半までい、日曜日のみは、午前九時半から十二時半までの間と定められてある、

次に高等女學校は、中流以上の子女が、他に何等學校の設備が無いのであるから、滿六歳より十六歳に至る十ケ年を繼續して此所に學ぶので、之を卒業すれば、通常所謂教育ある婦人たるもの丶學校生活は終るのである、

以上は其外形に就て一斑を述べたのであるが、尚ほ少しく内容を掲げて見やう、

彼の地の學校では、中流以上と以下と區別して教育を施すことは前陳の如くであるが、之と同時に凡て男女を區別して教育するのであるから、從つて校舍の如きも劃然と區別されて居る、而して校舍の建築は、男女を問はず大抵四階に造られて居るが、その外觀は甚だ質素である、けれども其堅牢なること丶實用に適する點に於ては、毫も間然する所は無いのである、

右の如くであるから、校具その他の如きも、亦これに準じて居る、運動場は大都會の事とて、坪數は比較的廣くは無いが、之に應ずる廊下および體操場等は、その設備が巧みであるから、生徒の運動を試むるには、毫も差支へない、

生徒の品性は一般に優秀であるが、之は彼の國の教育精神および家庭教育等が與つて力あるのであらうが、他面に於ては、學校に於ける教育の精神が、凡て國民を以て義務教育とし、出來得る限りの自由と便利とを與へて居るのと、一は微細の點にまで能く注意して居るのとが、非常に生徒の品性に感化を與へて居るのである、例へば、教科書の如きもゲーテ、シルレル、若くはレッシングのやうな、何れもその國の粹を代表する文豪の手に成つて居るものを使用するのでも判るのである、

更に品性の教育に於ける一つの偉大なる感化力、即ち家庭教育は如何と云ふに、之を説くには聊か彼の國の風習を知らねばならぬ、と云ふものは、その風習が家庭教育の一要素となつて、之が彼等に少なからぬ感化を與へるのである、

その風習の第一は元服である、それは小兒が滿十四歳に達した時には、春秋の二期、必ず寺院に於て之が禮を行はるゝのであるが、この元服の式を行へばこれを以て初て小兒と成人との區別が立つので、この禮を行はざる間は、何時までも小兒としての待遇を受けねばならぬのである、只にその待遇が、小兒としてばかりでは無くして、下婢や從僕に至るまでが、矢張り成人前の如く、お前とか又は汝などゝ云ふ語を以て呼ぶので、自分は彼等に對しては主人でありながら主人たるの資格の無いのみか、何等の尊敬をも拂はれないのである、けれども一たび此の例を行へば、此に初めて成人の資格が具はるので、從つて世に立つて一人前の人間として凡ての權利をも有するやうになるのである、

故に未だ元服の例を行はざる間は、自己の位置は此くの如きものであると確認して居るから、縱ひ學校に在りて、長上のものに壓せられやうとも、又は自家に在りて、下婢や從僕にまで、恰も親が子に對するやうな待遇を受けやうとも、決して不滿のやうな顔色は無い、且つ元服前に於ける女子は、晩餐後八時半より、決して一人にて外出を許されない事になつて居る、此く嚴格なる家庭監督の下に在ることは、上下を通じてみな一般の風習となつて居るのであるから、是を以てその子女の品性は、極めて温良で且つ從順である、是等の美點は、假令その制度が無くとも、一般の國民たる者が少しく注意を拂へば出來ることであるから、或程度までは此の美點を我國に移植したいものである、

社會的の女子

柴原豊子

問題は大層大業でありますが、私は元來時勢遅れでございますから、迚も人様のお耳に、イヤ、お眼に止るやうな事は申し上げられないのでございますが、實は突然のことゝは云ひながら、お馴染がひに、大海の水を蜆貝で掬ふと云ふ諺もありますから、それに足らぬ思ひ浮ぶがまゝに一つ二つ申しあげませう、

元來私どもが斯樣な事を申しあげるのは嗚呼の業でございますが、兎に角我國も開港以來僅か四十年ばかりとは申しますものゝ、その間には種々な變遷もあり、改革もあり、又一方には何に呉れとなく文明に進みまするに共に、我等風情の女子に至るまでも自由に普通は申すに及ばず、望みに任せ種々高等の教育までも受くることが出來るやうになりましたと云ふものは、是れ全く　明治天皇陛下の厚き御賜物であると、常に深く心に欣びて、晝夜その萬分の一にも酬まつらんものと、心掛て居りますものゝ、扨前にも申せし如く、女子風情の事でございますから、月に梯とやら申して及びもない事ではございますが、固より男子の方には比べもならずとも、女子は女子だけに竭さんものとの思ひは抱いて居りますが、中々思つたり叶つたりと申すことは六ケ敷いもので、實に吾ながら氣耻かしい次第で御座いますけれども心だけは始終それに向つて焦つて居るので御座います諺にも下手な考へ休むに似たりとか申しますが、その下手な考へを休めることが出來ないとは、私もよく〳〵愚痴であるとは思ひ返さぬでも無いので御座いますが、持つたが疾で是も致し方がないので御座います、

何故かと申しまするに、遠き昔は存じませんが、自分等が稍物心づきましてから、兩親その他の方々より伺ひましたり、その後成人いたして世の中の事を見聞いたしました時分は、餘程當時とは萬事異つ

た所がございまして、例へば、女子に學問を爲せますにもまづ、家庭の主婦となつてから、内々の事に用を缺かねば差支へ無い、故にそれ位の程度に教育して置けば宜いと云ふのでありましたが、それから段々年一年と進むに從ひまして、その教育を施さる丶方の目的は、差したる相違もございますまいが、受くる方の側が大層趣きを異にして來たやうに考へるのでございます、殊に近年に至りまして、頻りに人口の殖えますのや、又は日清および日露の戰爭がありましてからは、餘程我國の同性間に於意嚮の變遷は申すまでも無く、處世の方針も異つて來たやうに想はれるのでございます、或は私共の觀違ひかは存じませんが、大した誤りは無からうと存じます、尤も或お方々は、女子が獨立自營と云ふことを自覺したのであると仰せられましたが、それは左樣かも存じませんが、私は此の女子の獨立自營と云ふことに二つの區別があらうかと竊に考へて居るので御座ます、



女子教育講演會所見（其の五）

大抵世間で是まで女子が自覺した獨立自營といふ意味は、女子たる者は結婚が終生の目的では無いから、獨立自營の途を講じなければならぬと云ふやうに説かれますが、それが左樣かも存じません、けれども私などには左樣いふ六ケ敷い理論は分りませんで、唯々廣き世の中には、不幸にして初めより寡婦暮しをなさらなければ爲らぬお方もありませうし、又は彼の戰爭の爲に、或は病氣の爲に、若くは不慮の天災地變その他種々の事情の爲に夙く良人に訣れたとか、但しは言ふも忌はしき事ながら、某事情のために離婚の結果、孀暮しをせねばならぬと云ふやうな種々な場合があらうと思ひますが、まづ大きく之を別けましたならば、語に弊があるかも知れませんが天然的と人爲的との二つに分るゝものであらうかと考へるのであります、

それらの方々は何れにしても、自ら獨立して行く所の途を立てねばならぬのは尤もの次第で、縱ひ多少世間より同情を拂はるゝとも、均しく社會的に働いて欲しいのであります、私は或御説の樣に、結婚は女子の終生の目的で無いと云ふ御議論に賛成の方々にも、同樣に社會的に働いて願ひたいのであります、固より國家と申しますものは、衆くの人々が集つて出來て居るので、例へば、英國に生れた者は英國が可愛と思ふでありませうし、米國に產れたものは、米國が大切であると考へて居るやうに、誰しも我日本に生れて、日本の國を憎いと思ふ筈は無いのでありますから、日々各自が丹誠を凝らして其職務に勉强するのは、取りも直さず國家の爲にして居るのであります、若しもお互が稼がなかつたならば此の小さな日本が如何に產物に富んで居たからとても、遂には多くの國々に貿易負けがしてしまうのであります、貿易負けがして輸入が超過しますれば外國へ借金になるのです、その借金が返せなければ迚も店は張りきれないから破產をしなければならぬ事に立至るのであります、

併し我國の人々は、よく勉めよく勵みますから、

國は小さくとも、よく肩を並べて歐米各國と貿易して行くので御座います、尤も夫等の事に直接當るのは男子方であります、けれども女子とても必ず間接に力を致して居ることは疑ひないので御座います、然らば誰一人として手を拱で遊んで居るお方は無い譯で御座いますが、中には間々さうで無い方もお見受け申すやうで御座います、

前にも申した通り、國といふものは大勢の人が集つて出來て居りますので、その中には男もあれば女も御座いますので、男子方は何れも外に向つて働かれ、女子の方は内に在つて稼ぐのが通常で御座いますが、その内に居つて稼ぎますにも種々ありまして迚も一樣には申されません、けれども大抵女子の内に在つて爲る事といふものは極つて居て、奉公人を澤山に召使ふとか、又は家族が大勢であるとか云ふはの別といたしまして、通常は炊事、接客、育兒、裁縫等の數事に過ぎないので、夫等を爲して了へば後は閑な時間があらうと云ふもので御座います、

されば其時間を如何活して使ふかと云ふに、多くは無駄に過す傾きがありはすまいかと氣遣ふので御座います、若しも左樣ありましては、一家の不經濟は申すまでも無く、それを積つたならば如何ばかりか國家の上に損が行くことであらうかと、實は及ばずながら毎々胸を痛めて居りますが、何に致せ女子風情の事でありますから、蟷螂の斧とやら、迚も齒の立つ次第では御座いません、

併し我國でも、三十七八年の戰爭には、莫大な入費が掛つたに就ては、その後仕末を附けなければと申されて、男子方の側では彼の此のと心配をして居らるゝ事を承はりますれば、女子とても亦國民の半面で御座いますから、何とか之に力を添へなければならぬと考へるので御座いますが、サテ何が可いと早速に妙案も浮びません それに女子といふ者は男子方に比べますれば、性情および躰質等が異つて居りまして、一體が纎弱のが持前で御座いますれば、迚も男子方のやうに手剛い事は出來るものでは御座

いません、隨分女子の中にも、飽まで力の强く、智惠の立ち勝れた方もありますが、それは異例でありまして一般の女子に當嵌ることは出來ないので御座います、

まづ通常の女子は前段に述べました如くで御座います、さう價値が極つたならば、如何なる仕事が適當であらうかと申しまするに、餘り腦力も費さず、又腕の力を要しません所の手藝が一番宜しかろうと存じます、尤も手藝と申しても數々御座いますが、その多くの中で造花や摘ゝ細工などは最も適當であらうと存じます、私も先年より聊か其心持で實行いたして居りますが、我田に水を引くではありませんが、大部成績が良いので御座います、

造花の手藝は、之を學ぶのに容易ばかりで無く、之を製作しまするると同時に、大いに其人の品性までも高めてまゐるもので、斯樣なことは國民の德性上に頗る大影響があらうと信じて居るので御座いますが、それは兎も角として、この手藝は一定の時間を無理に裂かなくとも、閒がな隙がな餘りの時間を活用してさへ行けば、少しも家庭の他の事に妨げを來たすと云ふやうな憂は無いので御座います、且つ平素からして斯樣に心掛てまゐりますれば、縱ひ萬一の塲合に接しましても、毫も狼狽るやうなことは無いばかりでなく、前に申した如何なる事情に由りましても決して驚き騷ぐ事は無いので御座います、

之に加ふるに、斯樣な手藝を身に附けて置きますれば、獨身のものは之を以て獨立自營が出來るであらうし、然らざるものは敢て良人の鼻息を窺ふやうな心遣ひをしなくとも、自身に興味を覺るのみならず、子女のある者は以て悅ばしむることを得るが上に家庭の經濟に利することが幾何だか分らんので御座います、左樣なれば自然國家の上にも補益するので御座いますから、如何か餘暇のある方は勿論、たとひ無ひ方でも、成るべく時間を利用せられて、單に家庭の上のみで無く、社會的の爲に御盡力なされんことを只管に希ふので御座います、

文藝

女子と文學

文學士　尾上柴舟

一たび女子の教育を奬勵せられてより以來、その勃興と波及とは實に驚くべき勢で、最早今日では如何なる寒村僻地の末に至るも、眼に一丁字を解せないなど、いふ女子に接すると云ふ事は、まづ以て稀であると云つても宜い時運になつたと云ふものは、これ全く文明の賜物であると云はなければならぬのである。

かく女子が文學に接觸して智竇を開拓すると云ふことは誠に喜ぶべき現象であると同時に、予は之に對して少しく注文があるのである、併し別に六ケ敷出來ない相談をするのでは無い、その注文を一口に云へば、女子達に新らしき文學に觸れて貰ひたいと謂ふことである、これはチヨット異樣に聞えるかも知れん、何せなれば、已に今日までにそれ〲順序を經て學校教育を受けたれば、所謂文明の新空氣を呼吸し新智識を收得したものである、されば已に已に夫等に接して居るので、今更めて之を言ふの必要は無いやうであるが。

退いて考ふるときは決してさうでない、なるほど已に學校教育を受けた所の諸孃は、文學上の智識を得て居らるゝには相違ない、けれども其所謂文學なるものは總て古文學のみであつて新らしき文學では無い、故に古文學を解するの力、また之に對する趣味は多少有して居るのであるけれども、哀しいかな

新らしき文學を解するの能力が缺乏して居る、依つて予は成べく新文學に觸れんとを奬るものである、一體現代に生存して居ながら、この現代に縁遠き古文學を解するの力は有つて居るけれども、現代に行はるゝ所の新しき生命を有せる文學に趣味を有たぬといふ事は頗る矛盾した話ではあるまいか、

予の考ふる所に依れば、どうも女子といふものは始終一世紀位づゝ後れて居るやうに思はれる、是には種々の原因もあることであらうが、まづ其は差し措きて、後れて居ることは爭ふべからざる事實である、それでは國家の進歩を補くるなどゝ云ふ事は思ひもよらぬのである、まづ今日の女子が比較的進んで居るとも云ふべきは衣服、髪飾等の數種に過ぎない、たゞ衣服や髪飾りなどの外形ばかりが文明式でも内容が之に伴はなければ可笑なものではあるまいか、故に予は諸孃に向つて、從來素養ある古文學の智識を應用して、小説を除くの外、他の新らしき文學に眼を曝して之を解するの能力を養ふと同時に、之に對して深き趣味を有せられん事を望のである、

女子の脳力は緻密であると云ふことは一般に是認せられてある、予も之には異議は無いのみか頗る感服して居るのであるが、なぜか女子達がこの緻密なる脳力を文學の方面に應用することをしないで、日夜徒らに些細なる事にのみ遣つて居る、これは實に惜むべき事と云はねばならぬので、若しも之を文學の研究に用ゐたならば實に其効果は驚くべきものがあらうと思はれる、と云ふものは、女子にしてこの才能を發展したならば、例へば、計算とか又は統計的の方面に之を利用せば、文學の度が何れ位進むか知れないのである、然るに是までのやうに漠然たる事にのみ用ゐて居るのは、これまた國家經濟上の大不利益であるから、宜しく女子たるものは此天禀の機能を發揮して、萬般の研究の土臺を此に有つて貰ひたいのである。

全體これまでは、女子が文學の趣味を解すると云つても極程度が低いので、より以上を解する者は勿

論少いのである、故に斯文學より幾何の慰藉を得るかと云ふに、その趣味を解する程度に比例して推知せらるゝのである、固より文學と云ふものは、趣味を解すると同時に己れに慰安を與ふるものである、けれども多くは其所に氣が付かないで、生花または茶の湯などの類を玩弄んで慰藉を得やうと、勉めて居る、けれども文學は夫等より慰藉を得易いのである而して之を得るのは新文學でも又は古文學でも何れにも拘はらないのである、若し一たび此新たなる趣味を感じたならば、生活の困難とか其他感情より起る萬般の障碍も、之が爲に一掃せられて慰安を得るのである。

然らば如何にして之を解することが出來るかと云ふに、まづ第一は讀むことが大切である、古語にも讀書百遍すれば意おのづから通ずとか云ふこともあれば、暇を利用して讀みさへすれば自然に理解せらるゝやうになるのである、之はさほど六ケしい事でもない、而して此功を積んだ後には徐々に製作を試みるが宜い、之が文學に入るの捷徑である、その製作も初めより大いなるものは出來ないから、最初は極簡單な文章なり又は和歌なりを少しづゝ試みるが宜い、さうすれば遂には大作を試みらるゝやうになる、例へば千里の遠きに行くには一歩に初まるが如く、又高きに登るは卑きよりすると同樣であれば、初めより大いなる望みを懷かずして、極最初は讀みさへすれば宜い、それより漸々に進んで製作を試みるのであるが、それも敢て製作を試みなくても宜い兎に角一たび文學の趣味を解し、且つ己れに慰安を與ふるものであると云ふことが分つて來ると、迚も彼の琴や挿花などの類の及ぶ所のもので無い、それのみならず、若し能く世の諸孃達が、この福音を、より多く齎らし來つたならば、社會および家庭は如何に圓滿に、如何に愉快に、如何に和氣靄々たることであらうと豫想せらるゝのである。

黄ぎく白ぎく

侯爵　鍋島直太

菊

植つけしかはらよもぎゝ昨日今日
　はなのさかりになりにける哉

菊をかざして

何方のかへりなるらんきくの花
　くる人ごとにをりてかざすは

籬菊

天津日のみはたかゝげて大ぎみの
　みよをいはゝぬ民なかりけり

雲間月

村さめの晴てもゝのこるうきくもの
　たえまにみゆる月のさやけさ

殘月

朝日かげにほへる空を出てみれば
　しらみてのこるわりけの月

觀楓

たに川の水のみどりもかはりけり
　きしのもみぢの色をうつして

遠樹紅

わが庭はまだかはらねど遠やまは
　霜やおくらんもみぢしにけり

秋雨

吹かせにさくらの紅葉かつちりて
　ゆふぐれ寒き雨の音かな

里時雨

降りかゝる時雨の雨にぬれ〳〵て
　この葉音せぬさとのなかみち

松上秋風

紅葉のふく秋風にちるなべに
　松のみどりぞ色まさりける

蔦もみぢ

伯爵　東久世通禧

岡紅葉

もずのねに驚かされてうちみれば
向ひの岡はもみぢしにけり

秋晴

みやこには茸とる山はなけれども
わた日和をいざ出てみん

栽菊

靜かなる秋のものとも見えぬまで
うゑかざりたるむらさきくの花

水邊薄

大くらの入江のはちすうちかれて
尾花のなみにあきかぜぞふく

秋旅行

うちまねく尾花の袖にたちまじり
秋のすゑ野のわくるたびかな

寢覺に虫を聞く

老が身はねざめがちなる秋の夜の
うきをかたらふ虫のこゑかな

落葉入簾

かぜあらみ母屋の簾はおろしもて
落葉のちりのつもるいたしき

夜落葉

靜かなる小夜の寢覺をとふものは
いた屋の軒のおち葉なりけり

同

しづかなるよるしも分て庭の面に
落る木の葉のたえずきこゆる

清紫の面影

中邨秋香

余は本題に依りて、聊か諸令嬢に聞え參らせんとする事あり、思ふに我國一般の文學は、これを昔の

世に考ふるに、徳川氏中頃以後の盛なるに及ぶものはあるべからずといへども、女流文學といふ名稱につきて之を見る時は、何人も猶平安朝を推さゞるを得ざるべしとぞ思はるゝ、さるは徳川氏の世にありて、名媛才女と稱すべき人々、藤原町子をはじめ、蚊田蒼生子、三枝斐子、荒木田麗子、井上通子、さては縣門三才女のうちなる鵜殿よの子、土岐茂子、および鈴木武子、太田垣蓮月の類もとより少からず、藤原町子は正親町公通卿の養女にして柳澤吉保に仕ふ松蔭日記の著者なり、蚊田蒼生子は春滿の女在滿の妹にて紀伊家に仕へ、後致仕して專ら國文の教授に從ふ、三枝斐子は茅淵と號す、土屋紀伊守の室にて和漢學に通じ、曹大家女論語解、枝氏家訓、烈女傳拾遺、和泉日記、旅命毛等の著者なり、荒木田麗子は荒木田武遇の養女にして、月の行方、池の藻屑の著者、井上通子は讃岐、丸龜の藩士井上儀右衛門の女、東海紀行の著あり、鵜殿よの子は鵜殿猛一が妹にて、紀伊家に仕へ、後致仕して尼となり、涼月院と稱す、月次消息、岐蘇路の記などの著あり土岐茂子は筑波子と稱す、土岐賴房の室にて歌に巧なり、よの子しげ子しづ子三人を稱して縣門の三才女と稱す、されど倭布子は二十歳にて身まかりたれば才の程あらはれず、鈴木武子は尾張大納言宗春卿に仕へて阿春の方と稱す、庚子道の記の筆者、太田垣蓮月は太田垣傳右衛門光古の女にて初名は誠、若くして夫におくれ尼となりて、蓮月と稱す。

されども今もしこれら名媛才女と稱すべきすべての人々を假に除去り、全く男子のみに就て之をみるものとせんも、徳川氏の文學てふ價値にありては、何等の増減もあるべからず、さるに平安朝文學中より、もし其女流をこと〴〵く除去りたりとせんか、否こと〴〵くと迄はいはじ、其内主なる若干名を除去りたりとせんか、徳川氏文學と同じく何等の變狀なしといふを得べきか、否、否、必ず甚しき影響をあらはし　平安朝文學は頓に大に其品位を減ずべし。

そも〳〵古昔文學の如何を見るべく、證すべき方面と材料とはもとより多しといへども其内の最も主要なるものは當時の詩歌文章にして、文章中假字文の如きは最も重要なるものなり、而して平安朝の假字文は女流の手に成るもの多し、蜻蛉日記は藤原道綱母の書けるなり、枕草紙は清少納言が著せるなり源氏物語は紫式部が作れるなり、和泉式部日記、紫式部日記は名の示す如く、其人々の記せるなり、此他狭衣物語、濱松中納言物語、夜寐覺物語、更科日記、讃岐典侍日記など、皆女流の手に成るものなれど今は姑く言はず、又かの榮花物語は赤染衛門が筆といひ、又出羽の辨之れを書繼けりなどいふはひが事にて、其頃の日記を集めて書列ねたるものならんとの由は先輩已にいひおかれたるが、其日記は多くは女房の手に成し物ならんとの事は、文體にておのづから知られて（當時男子の日記はすべて記錄文體に書なしなり）既に紫式部日記をさながら取りたるなども見ゆめれば、よしや全部女流の手に成りしにあらざるも、過半は女子の筆に係るものなること疑ふべからず。

これらの物語、草紙、日記等の假字文は、平安朝文學の品位をあらはす正確なる材料にして、殊に枕草紙、榮花物語の如きは、當時現在の事をその儘書綴りたるものなれば、特りその文章のみならず、其記事の上に於ても、當時文學發達の程度那邊にありといふ事まで、まのあたり、見るが如く思ひ知らるるものなり、源氏物語は作り物語なれば、事實の參考には供しがたきに似たれど、されど其記事は全く當時の現狀を、さながら細かに寫したるものなれば又之に依りて、當時の文學上をも、おのづから察するを得べし。

されば今日稱して平安朝文學といひ、平安朝文學はかゝる品等に位するものと定められたるも、其由て來る所は詩歌文章をはじめ樣々なるは勿論なれども、これら物語等の假字文は慥に主なる一原料なること論を竢つべからず。

而してこれら物語といひ、草紙といふもの、誰が手になれりや、已にいへる如く枕草紙は清少納言なり、源氏物語は紫式部なり、榮花物語は作者不明といへども、其大部分女流の手に成るものにて、これまたさまで多人數の手にかゝらんやは、されど榮花の大半女流の手に成れりとの説は、僅に紫式部日記の文の入たるなどを證としていふもの畢竟想像説を免がれざれば、姑く之を省き單に枕草紙と源氏物語との二書に就て言はんにも、此二書亦慥に平安朝文學の品位に關係を有するものなる事は何人も異論あらざるべし、嗚呼盛なる哉、纖手僅に筆を捲ぐるを得、細腰はと〳〵衣裳に堪へざるかよわき婦人の身にして、平安朝四百年の文學を左右する力を有すること。

さればこれらの才女は、神の再生、佛の化身ともいふべく、縱や四目二口をこそは備ふまじけれど、到底なみ〳〵の人とは大に異なるところあるべしといはんか、然らず、是また通常一般の人にして唯天性文才ありて能く勵み能く勉めしのみ、今清紫二女の大略を左に記すべし。

清少納言

系圖

清原通雄（天武天皇々子舍人親王より四代の孫にて清原氏を賜ふ）——海雄（筑前守）
房則（豐前守）——深養父（内匠允　藏人所雜色）——顯忠（下野守）
元輔（肥後守）——女　清少納言

右の如くなれど、實は顯忠の女にて、元輔養ひて其子となせるなり、名は諾子といひし由女房名寄に見えたりと伊勢貞丈はいへり、幼年よりして文事にさとく、七歳にして書を能くし、十三歳にして令義解を講讀し、二十歳の頃すでに歌人の師となれりといふ、中關白道隆公の長女、一條天皇后宮定子に仕へ奉り深く其才をめでさせられ、召しまつはせ玉

ひしが、後定子の御妹、三條天皇女御濟景舍に奉仕す天性敏捷にして才氣するどく、ほと／＼男子も及ばぬほどなりけりといへり、道隆公と道長公と兄弟におはしけれど、御中殊の外にあしかりしかば、道隆薨ぜられ、道長權を執るに當り、道隆の子伊周隆家罪を得て流され、彰子中宮は日々に時めかせ玉ひければ、定子后宮は憂愁の間に崩御まし／＼、道隆がたの人々はます／＼勢を失ひぬ。

されば清女も後いかなりしか詳らかならざれども老後零落して朽ちあばれたる家に住みければ、若き殿上人たち、これかれ一つ車に相乘りて、其家の前を渡る時、少納言むげにこそなり果てにけれと語らひけるを、少納言折しも物見にいで居し時にて、之を聞き、やをら簾をかきあげて顏を出し、駿馬の骨をば買はずやありしと問ひける由古事談にみゆ。

駿馬の骨といふ事は戰國策にみえたる故事にて、郭隗燕の昭王に謂つて曰く、昔ある國君某の國に千里の馬あることを聞き、使者をやりて之を買はしめんとす、使者至れば馬すでに死しぬ、使者乃ち其死せる馬の骨を五百金に買ひて歸る、是に於て天下の人其君の馬を好むを知り、一年の內千里の名馬三匹まで其國に至るといふ、故に今王眞に名士を得んと欲せば先づ隗を任用し玉へ、然らば隗より賢なる者求めずしておのづから至らんといへりしに本づくものにて、衰へたりといへども猶價値あるよしを示せる詞なり。

又續千載集の詞書に、老の後こもり居る由みえたれば、老後も京にありしやうなれども、無名草紙に京にははか／＼しきよすがもなかりけるにや、乳母なりける者の子に伴はれて、遙なる田舍に往きて住める由を記し、又讃岐國象頭山の側に淸女が墓ある由は閑田耕筆にみえ、今も琴平宮の側に其跡を存すといへれば、年京にも住み佗びて遠國に移り、終に讃岐にて身まかりしにもやあらん。

或は陸奧にさすらへたる由傳へて、松島の記といふものあれど、こはあらぬものなるよしは、先輩す

でにいひおかれ、又近江の國脊塚の古墳を其塚なりといふ由、一話一言にいへるなどは、ともに取りがたき說といふべし。

紫式部

系圖

藤原良門（閑院左大臣冬嗣第六子　内舍人贈太政大臣）
- 利基（右中將）
- 兼輔（堤中納言）
  - 雅正（刑部少輔）
    - 爲時（越後守或は越前守）
      - 惟規（式部丞）
      - 惟通（安藝守）
      - 定暹（阿闍梨）
      - 女（紫式部）

父爲時は藤原時鄕の門人にて當時有名なる學者なりき、紫女幼年なる時より慧敏なり、或る時兄の惟規父の前にて史記を讀むを傍にありて聞き居たりけるが、やがて能く覺えて、兄よりも明かに諳讀しければ、爲時歎じて此兒男子ならましかば、生長の後は必ず和漢の舊記に涉り、朝廷の故實にも通ずる人となるべきものを、口惜しき事なりといへりとぞ。

はじめ右衞門權佐藤原宣孝に嫁ぎて、二女を設けたりしが、(長女名は賢子、即ち後一條天皇の御乳母、大貳三位にして、狹衣物語の著者。二女は辨の局、後冷泉天皇の御乳母なり)長保三年宣孝卒去の後は再び嫁がず、堅く操を守りて能く二女を敎養しけるが後中宮彰子に仕へ奉る(彰子は御堂關白道長長女、即ち後に上東門院と申し奉る)此宮に奉仕する女房達は、當時の才女を採り集められければ、いづれも歷々の名媛なりし中にも、紫女は殊に勝れて才學ゆたかに、女德もまた高かりしかど、平常の容儀はとめやすく、すべてありふれたる女房達の如く、何事も知らざるさまにもてなし、いかにも奥ゆかしく慕はしき人柄なりしとぞ、其和漢の學に邃かりしは、中宮に白氏文集の樂府を傳へ奉り、又一條帝は曾て

式部を評せられて、日本紀を能く暗じたる者なりと仰せられしより、終に日本紀局の名を得たる事などにても知るべし、當時宮中のさまいと〳〵みだりがはしく、女房達の行など、すべて言ふにも堪へず、語るにも忍びざる程の事なりし中に、紫女は才學のみならず、容色さへ遙に人に超えたるに、介然として能く女德を守り、御堂關白道長のさばかり威權ありて、深く式部に思をかけたび〳〵之を挑みしをも只よく〳〵もてなして巧に之を避け、遂に紫女が渡殿にいねたりし時、自ら來りて逼らんとせし時も、眠りたる樣を裝ひて戸を開かず、能く其操を全くせしなどまことに、女子の龜鑑とすべき人物といふべし、

かの源氏物語を作りたることにつきては古來說あれど、夫の宣孝に別れてより中宮に奉仕する迄三四年間家居せし程に書きしものならんとの說然るべしといへれど、禁中のさまなどさばかりくはしく書きつゞること、家居の程にてなし得べき事ならねば、猶奉仕の後に書きたるものなるべし、但し石山寺に參籠して須磨明石の卷より書きはじめたりとの說は名高き傳なれどおぼつかなしといへり、此物語は好色の事を借りて、世間一般の人情時態を書盡し、これをよめばおのづから心得とも戒ともなり、しかも古來存する美風禮樂をも知るべからしむべく、一口にいへば道義を骨とし、好色を膚とせしものなりと先輩いひおけり、傳記によりては知りがたけれど、此物語によりて見るに、紫女は曾て細かに民間の疾苦を嘗めて、深く下情に通じたる人なる事は疑ふべからず、宣孝に嫁せざりし前いかなる經驗ありけん必ず一種異りたる事ありしなるべし。

紫女の實名は傳はらず、中宮に奉仕の初は、藤原爲時の女なるをもて藤式部と稱せられしを、源氏物語中紫の上の事をすぐれし人にかきたりしよりやがて紫式部と稱せらるゝに至るといへり。

以上述ぶるところに依り清紫二女の大略はこれを知るを得べし、而して淸女が奉仕せし定子后宮と紫女が奉仕せし彰子中宮とは從姉妹にまし〳〵けれ

と、御父なる道隆道長二公御兄弟の間柄甚だあしかりしかば、隨て御中よからず、殊には共に一條帝の後宮におはしまし丶事故、かた〳〵奉仕せる女房達まで、おの〳〵相凌ぎ相轢るべきは勢の自然なり、さればさばかり愼深き紫女なれども、其日記中に淸女をそしりて書けるを見ても、其一班を知りぬべし。

上東門院（即ち彰子中宮）の女房達のこと〳〵く才女なりしは古來名高き事なるが、定子后宮の女房にも亦才女多かりし事は、枕草紙よみたらん人はおのづから知らるべく、さるは彰子中宮の御方にさばかり才女を集められしも、畢竟は定子后宮の御方にまざらんとする競爭に起りし事なるべく、而して淸女と紫女とは、此兩宮奉仕の才女中おの〳〵最も優れし者にて、しか優るに至りしものは、天性の鋭才が内外の競爭と軋轢とによりて、ます〳〵切瑳琢磨せられしに依る。

そも〳〵德川氏の文學は女流に關係する事なく、

平安朝に在ては重大の關係を有するもの、豈故なからじやは、是德川氏の世にありては女流の文學者なきにあらずといへども、いまだ平安朝の時の如き大才大文學者を出すに至らざりしを以てのみ、およそ事は勵むに進み、業は勉むるに達す、而して勵むと勉むるとは同類相競ひ相凌ぐに生ず、これ學校若くは會社團體の事業の上に必要なる所以なり、而して德川氏の世の女流は個々別々に成立ち、競爭と凌轢とは夢にも見しことなく、唯其性來文學を嗜むといふ點より外間の誘導を俟たずして成りし者なり。

之に反して平安朝の女流、一條帝の時の人々の如きは、當時名媛才女の輩出のみならず、前に云へる如き兩宮の黨派さへありて、互ひに相競ひ、おのおの相凌ぐに至り、自然相勵み相勉めて天禀の器を琢磨せしものなれば、さてこそさばかりなる大才大文學をも出すに至りしなりけれ。

同類相集りて競爭生じ、凌轢起り、以て相勉勵す故に眞の勉勵は競爭凌轢に因らざるべからず、

今諸令嬢よ多くは學校に通はるゝなるべし、學校は同類相集るの所なり、競爭生じ、凌轢起る所なり、眞の勉勵を爲し得べき所なり。

果して然らば徳川氏女流文學者とは全くその地位を異にし、平安朝女流と稍其趣を同じくす、されど平安朝なるは主として後宮に奉仕するもの、餘業に修むるものにて、其業とする所にはあらず、今諸令嬢は親しく身を學籍に置き、其專業として之を修むるものなれば、平安女流より一層切實の地に立てるものならずや、清女となり紫女となることいかで難からん。

そもそも清紫は僅に一二人の力をもて能く平安朝の文學を左右し、其餘勢延いて、我日本全體の文學をさへ價値するにさへ至れり、諸令嬢もし苟もこれを勵み、之を勉めて、おのおの清紫の地位に至らばたゞに明治とのみいはず、我日本全體に係る文學の命脉を取らんこと、たなうらを指すが如くならんかし、勉め給へや、勵み給へや。

菊の花

中山幸子

にしきとも綾とも見ゆる菊の花
　大内山にかをりたかくも

み園生に根ざしをしめて白菊の
　千代も八千代も香に匂ふらん

美しく咲きにけるかなしら菊の
　花のさかりもいと長くして

おふしたてゝ待ちし甲斐あり我宿に
　かをりみちたる庭のしらぎく

しづが家のおれし籬としら菊の
　花のさかりはうるはしきかな

山住の身はいとやすくおきな草
　めでつゝ年をおくりける哉

いくとせかこの山ずみに年をへて
　秋はおきなの花をめでつゝ

谷川の流れにそひて咲く菊の
　花をみやこの人に見せばや

磯やかた

佐々木信綱

月清みまさごかゞやく磯道の
　草むらしろし月よみの花
うづもれて村に老たる木工が
　家ゐめぐれる日まはりの花
雲にひゞく鳥の一聲山寺の
　石のきざはし苔深くして
村のため吾世つくしゝ村長が
　おくつき清し白萩の花
古里の母のかたへに眠れるや
　幸なき友がせめてもの幸
夕月夜潮の香かをる磯に立ちて
　遠くゆきたる友をしぞ思ふ
島山の夕日さながらきらめきて
　まさごぢ走る白金の雨
磯やかた琴のねしめる雨の日を

　うつむきがちの日まはりの花
人も世も何は思はずふみわくる
　朝露清きそゞろありきや
水ひきし海添小川川くまに
　四つ手かゝれり雨打けぶ
何事をおもふともあらず窓あけて
　磯松原の朝の雨見る
岩の上にわれたゞひとり大空に
　月たゞ一つ靜なる夜や
都にとゆく友おくる村はづれ
　我身のすくせ更に悲しき
大空に月はありながら光もらぬ
　木下やみをたどる我世は
日をへつゝ雨ふる川のくづれ岸
　くゆる思ひを再はせじ
あるじうせて廢き家居の秋の夜を
　胸にしみ入るこほろぎの聲
雨の夜を一人舟まつ舟宿の

ともしびくらし雨ふりやまず
道のへに法を説きけむ聖まさず
秋の雨さむし小町大町

女子と自然美

柴崎恒信

女子は男子と異うて情的で頗ぶる物事に感じ易い性質であるけれども、概して孰れの家庭に於ても比較的美の觀念が薄いやうに考へらるゝのである、尤も音樂や生花等を研究するのも一種の美觀心を養成するのであるから結構である、されば夫等も研究するが佳い、けれども夫等を研究するには師匠を要するのである、家に坐つて居て研究すると云ふことは出來ない、けれども繪畫と云ふものは左樣でない、即ち家に坐つて居て獨習が出來るのである、

例へば、庭の花一輪を手折つて來ても直ちにその天然自然の美に接すると同時に之を解する事が出來る、また臨摸的に人の畫いた手本によりても自然美の研究は爲さるゝのである、此くも造作なく自然美すなはち繪畫の研究は出來るのである、

併し此所でチョット斷つて置きますが、予が今本題に就て述べますのは、何も諸孃に專門家になれ畫を描けと云ふことを强るのでは無い、即ち天は四時折々の花卉を吾人の前に提供して、決して誰だから見せぬ彼だから見せるのと云ふやうな依估贔屓は少しも無いので、幾らでも吾人が看飽するに任せてあるのである、

然るに之に對して或少數の人を除くの外は、折角造花が妙巧を竭して吾人の前に提供せられつゝある斯の美觀に接しても、更に其趣味を解せられぬやうに考へるのである、例へば、蒲田や金澤の梅花を觀ても或は上野や小金井の櫻花を觀ても、僅に馥郁の香を賞し又は爛熳たる錦を愛するに過ぎない、尤も年々歲々花相似たりで、今年の花も去年の花も別に格好が異つたと云ふ譯では無くして、矢張五瓣のも

のは五瓣、紅梅が白梅に變じ、櫻花の淡紅色か青色に轉じたと云ふのでは無い、別に異りが無いとすれば今更取立て八ヶ間敷云ふでも無いやうだが、決して左樣で無い、縱ひ同じ格好の梅や櫻の花でも、之を觀れば自づと人の心持が違ふでは無いか、即ち梅花の香に接すれば坐ろに吟情を催し、又櫻花を觀れば轉た心が浮立つであらう、誰も怒る者は無い筈である、それと云ふは各々一種の自然美に感ずるからである、たとひ口に出さないまでも、心の琴線に觸れて自然美の幾分を解して居るからであらうと考へる斯くの如く既にその一部分を解して居るのであるが、更に一歩を進めて深く自然美の趣味を解して貰ひたいと云ふのは別儀では無い、如何なる荒くれ男も、櫻花の爛漫たるを觀れば心の靡くが如く、この自然美が吾人の精神上の修養に多大なる感化を與ふる事は實に莫大なるものであれば、殊に女子達には一層深く之を望むのである、何せ斯くも深く女子に望みを屬するかと云ふに、諸孃は將來賢妻良母として一家を成すものであれば、今よりして深く斯の自然美の趣味を解して居られたならば、如何に樂しく麗しき圓滿なる家庭が形造らるゝであらうかと豫想せらるゝからの注文である、

話が少し横道へ入りましたが、前に立戻つて自然美の研究が大切であるが、何うも今日の女子教育なるものを瞥見しますに、言葉の使ひやうとか、作法の可否とか云ふやうな事にのみ走つて形式が勝つて居るやうに思はれる、その如く形式にのみ泥んで居るから爲ること作すことが頓と美想に關係が無いのである、一體形式に人を當箝るといふ事は、人を器械視した話で愚の極と云はねばならぬのである、某校などでは大いに之が行はるゝが、甚だ賞すべき事とは云れない、尤も物によりては抽象的に或程度までは　形式も必要であるが、それ以上は不必要である、殊に自然美の研究などには凡て不必要である、兎に角最も初歩ものは四季折々に咲き亂るゝ、千紫萬紅の花卉に接して眼から自然美を味はうが宜いさ

うさへすれば漸々に趣味も深くなつて來ると共に精神上の修養に益するのである、

けれども更に一歩を進めて多少なりとも描いて見たいと思ふものは、前述の如く形式に泥まないで、即ち形式を避けて油畫なり又は日本畫なり隨意に試みるが宜い而して之を試むるに方りて心得べき第一の條件とも云ふべきものは輪廓の忽がせにすべからざる事である、この輪廓さへ確然でさへあれば凡て繪畫上の趣味を以て見らるゝのであるが、何うも初歩の人たちが描いた人物や花鳥などは、下手で畫になつて居らぬ、素より初歩であるから無理も無いのである、けれども其と云ふは、一は其物に對する觀念が十分に心に印象せられて居らぬからで、その印象が十分でないと云ふことは、他面より之を云へば其物に對する趣味の薄弱であると云ふことを證據立て居るのである。



例へば、梅花を一輪描いても不味いと云ふものは其花瓣の個々に對する抽象的の知識に缺けた所があるから、從つて輪廓が確かに行かないのであるそれにも拘はらず無暗に描きたてる者があるが、それは發達上はなはだ不利益であるから止めた方が宜いのである、如何に自然美は獨り稽古が出來ると云つたから

とても、物には自から順序のあるもので、例へば、小學から中學、中學から高等學校、高等學校から大學と云ふ順に進むやうなもので、梯子なしに家根へ昇らうとするのは無理な話で出來ない相談と云はねばならぬのである、

ソコデ自然美を研究するにも、初めから込入つたものを纒めやうとするのは不可能の事であるから、例へば、マッチの箱の如き曲線の少ない最も幼稚な物から始めて、次に茶碗の類を稽古すると云ふやうに、すべて簡單なる物より複雜に進むといふ風にして、まづ第一番には形を調べると云ふ事が大切であるから、前の梅花で云つて見やうならば、最初は花瓣を一つ〳〵に剝がして之を研究し、次に蕚片または蘂の類に及ぼすと云ふ工合にその部分々々を研究して、腦裏に確と是等を印象せしめてから纒めに掛らねば不可である

已に形が纒つて來たならば、次には墨なりセピヤなり隨意の單色を以て　その物の立體的の遠近等を現はすことを研究するが宜い、稍これに熟したならば其物の單色、例へば、櫻花の淡紅色とか、山吹の黃色とか云ふものを現はすことの研究に移るべきもので、旣にして漸く之を施すことが出來るやうになつたならば單色の輪廓に轉じて研究を重ぬると云ふやうに稽古してさへ行けば、決して師匠の許に通はなくとも又高い月謝を拂はなくとも　自由に家庭に於て研究することが出來るのであるが、但し專門家となるべきものは此の外と心得なければならぬ、

右の如く自然美を愛して之が研究を怠らなければ早晩趣味も解せられて來る、その趣味が段々に深く且つ高くなつて來ると共に己れが品性も之に化せられて向上して來るから、最早人に笑はるゝやうな物を描く氣遣も無いのである、

依つて頭腦を頑固にするやうな形式を打捨て、若し試みるなら前の順序に依るとしても、それに先ちて天與の自然美に接する每に、優に麗はしき大和撫子の心ばへを助長せられん事を希ふのである、


小説
柳川春葉作
英仙

染小袖

柳川春葉

今しがた廊下の方に、女中共が何やら重さうな荷を運んで行く音が爲たが、其から奥座敷で叔母の若やいだ笑聲が聽えた。

此二三日は何時も斯うした有樣、野村の家は上も下も唯そは〳〵と落着かぬ、姉娘の絹子の緣組は、去年から極つてゐたので此十一月の十日には、愈よ式を擧げるといふ。

六疊の居間の緣側く、光線取の障子を一枚開けて、鈴子は一心に仕立物の手を動してゐたが、其賑な聲を聽く度、秘と顏を揚げて庭越しに座敷の方を見詰るのであつた。

鈴子は野村の姪に當るので、三年前までは世に知られた紳商吉田の一人娘であつたのだけれど、其三年前、父は相場に失敗して、

其が原因か、腦溢血といふ急病で歿り、續いて母も身代の滅却を苦にして、半年と經たず死んで了つた。財產も地面家庫も一切他人の所有に成つて、殘るは着のみ着のまゝの鈴子一人、年は十九の花盛といふ春から、

此野村の家に引取られる事に立いたつた。叔父も、叔母も、從妹の絹子も皆親切にして吳れる。未だ十一の新作や、奉公人までが、何れも此人に、同情して、事々に庇護立を爲て吳れる。其も一つは鈴子が思切の好い、和しい性質と、纖弱く艶麗な處が、誰にも愛される理由なのであらう。

從姪の絹子は今年十八、何方かと言へば華美な氣性で、時に依つては隨分我儘な、人を人とも思はぬ振舞を爲るが、之れでも鈴子にだけは、氣の毒なと思ふ心がついて廻るか、何時も隔意無く交際つてゐる。其絹

子の慶度い結婚式も最う十日の後に迫つたので、鈴子は叔母に頼まれ、此二三日は精々と仕立物に身を入れるのである。

餘りに根を使ひ過ぎたのか、鈴子の顔色は青かつた。而して熟と母屋の方を見詰めて、我にもあらず重い嘆息を吐いたが、旋て氣が着いて膝から辷落ちた縫かけの布を取あげた時、トン〳〵と廊下を小走に、隔の襖を開けて顔を出したのは絹子である。

「鈴子さん。」と呼懸けて「入つても可くつて？」

鈴子は靜に其方を振向き「えゝ、お入りなさいとも、何故又今日に限つて那樣遠慮をなさるのです？」

「だつて……。」

と此方は有耶無耶のうちに其傍へ坐込み、

「あゝ可厭だ。考へると妾、腹が立つて、腹が立つて爲やうが無いわ。」

「何うして？」と鈴子は美しい目を瞬り「少とも解らないわねえ。」

絹子は伊達な庇髮に結つて、派出な矢絣の袷を着てゐる。其姿も氣立も未だ子供々々した上に、何か落着かぬ事も有つてか、今日は顔色も冴々と、

「眞實に妾腹が立つの！」

法ばかり眉を顰めて、難しい顔を爲して見せる。鈴子は淋しく微笑んで、

「だから其理由を有仰いな。唯腹が立つばかりぢや何の事だか解らない。」

「でもね。」と前に在る布の端を弄りながら「下館の伯父さんたら餘りなんですもの、妾に種々な事を言つて。」

「可いぢやありませんか」と。此方は少時してから「那樣事で怒るのは却つて可笑しいわ。誰でも斯ういふ時には其は散々調戯はれます。」

「然うですかしら……………妾は可厭ですわ。」

「否、其方がいつそお樂みでせう。」

「まあ鈴子さんまでが、妾眞實に怒りますよ。」

鈴子は何にも言はず笑つてゐる。此方は取つて付けたやうに嘆息を吐いて、

「貴方は斯樣思を爲た事が有つて？」

「未だ知りませんね。ですから羨しいと思つてゐます。」

つい心から言つて了つたが、我ながら淺猿しいと思つたか、其限口を噤んで、又忙しさうに針持つ手を動した。

絹子は昵とそれを見詰めてゐたが「鈴子さん、此度は貴方にも飛んだ御迷惑を懸けましたのね。」

「改まつて、可笑しいのね。」

「でも、何枚も〳〵衣服を縫つて戴いて、お氣の毒だと思つてゐます。」

「何かと思へば那樣事？何うせ妾は此通り御厄介に成つて遊んでゐる體ですもの、斯樣お手傳なんぞ當然ですわ。」と靜に糸を繰ながら「姉妹よりも可懷しい貴方がお嫁入をなさるのですから、せめて心だけでもお祝物を爲たいのですけれど、今の妾は其も出來ないのですから、考へると、妾其が情無く成りますの。」

何時か聲も濕んで、涙組む目に針の孔さへ見えずなつた。絹子は驚いて、

「まあ、勿體無い事を有仰るわ。祝物など其は他の人の爲る事です。貴方と妾は姉妹の意ですから、其お祝は心で爲て下さい。」

「然う……心と心ですねえ」。鈴子は何を思つたか泌々相手を打目戍り「それだけは妾誰にも負けませんよ。」

「有難う？」と此方は見上げるやうにして「然し姉妹と言へば貴方は姉様なのに、年下の妾の方が先へ嫁くのは順が間違つてゐますね。貴方と妾と入違へば可かつたのに。

鈴子は忽ち蒼く成つた。而して慌しく俯いて、

「那樣……那樣事が有るものですか、人の緣といふものは順も義理も無いのですから、決して然ういふ事は考へるものではございませんよ。」

言葉の端々に意味が有るやうで、何やら胸に泌入るのを、絹子は不思議に感じたのであるが、斯うした年寄染みた事を言ふのも、此年頃の苦勞が爲せるのであらうと思遣つて、いとゞ氣の毒に成るばかり、

「貴方だつて昔のやうな御身分で、伯父さんや伯母さんが生きて在つたら、疾うにお慶度い事も濟んでゐたのでせうけれどね。」

「絹子さん。」と鈴子は苦しげに「最う那樣事は言つて下さいますな。妾お願ですから。」

「あゝ、餘計な事を言つて妾が惡うございましたね。」

「妾は氣丈夫ですよ。貴方といふ妹が有るのですもの。」

「眞實に然う思つて下さいまし。ですけれどねえ、妾が西川へ行つたら、貴方チョイ〳〵來ては下さいますまいね。」

鈴子は頓に返事も爲なかつたが「眞逆一緒に行きゝりには出來ませんけれど、時々遊びに參りますよ。」

「屹度然うして下さいまし、其代り彼の……………基雄さんと一緒に歡迎しますわ。」

つい今迄の癖が出て、自分の良人を友達のやうに言つたのを、定めし鈴子が笑ふだらうと、絹子は颯と赤く成つたが、思ひの外相手は沈みきつて、

「何うぞ。」

と低聲に言ふのみであつたから、絹子の方は何うやら物足らぬげに、

「でも可い事には彼の人と貴方とも猶且親類なんですもの、皆遠慮の無い同士ですわね。其だけは妾心強いの！」

鈴子の顏色は段々惡く成つて來た。而して其も抑へやう〳〵と爲るらしかつたが、突然口を開いて、

「絹子さん、此衣服の柄は眞實に好うございますね。妾は一番氣に入つて了ひましたわ。」

「是が？と又手に取つて「然うですかしら、妾は餘り可いと思つてゐないの。お母樣の見立ですもの、何時でも地味な物ばかりよ。」

鬢の後毛を煩さうに捲上げて、少し上眼に人を見る風情が言はん方なく愛くるしい。其は春の朝の櫻花今を晴と咲誇る色に引更へ、自分は最う花の頃も過ぎて了つて、今年は二十一の秋も淋しく、旋ては枯るゝ萩薄の、斯樣事して老ゆる命かと、鈴子は腹も斷れる程辛かつた。

嫉妬でも無い、怨恨でも無いが、鈴子の家が未だ盛な頃、親類續きの西川から緣談が有て、父も母も大方は承諾したのを、鈴子は渺々聞いてゐた、其は猶且十八の春の頃で、直にも纏る筈であつたが、未だ一二年は然して急ぐにも當らずと、つい其まゝに爲て置いたうち、不慮の大難にバタ〳〵と家は潰れ、人は死

生徒募集

私立
女藝專修學校

專修部
實踐部
各若干名

◎從來教室の外に三層大校舍の増築落成せり◎本校生徒の定員は五百名とす
◎專修部の『文學科』は和文學、漢文學、英語、『修禮科』は作法(作結び物)、茶道、生花『美術科』は毛筆畫、圖案、燒畫、書翰習字法、琴曲(附八雲琴)オルガン、『技藝科』は和洋裁縫、刺繡、編物、袋物(細工物共)、造花、レース、和洋料理、タイプライター簿記等とす
◎實踐部は躬行實踐の教育を奬勵せんが爲に裁縫及び技藝を教授するものとす
◎本校は就學篤志者にして學資不足の女生には情狀を査察して補給の便を與ふ
◎教師は知名の女學校に教鞭を執られ最熟練なる技藝及精神教育家を招聘せり
◎寄宿寮は寮母監督の下に家族的生活を爲さしむ◎規則入用者は郵券二錢送れ

顧問員

尾崎行雄　福原秀猪
江原素六　木村正辭
ミセス、ミラー、　樋脇盛苗
下田歌子　(以下略之)

校長　子爵 松平直敬
副校長　星野愼之輔
主幹　八木兼夫

東京牛込區横寺町九、十番地電話番町一七一七

く、其話も立消に成つて了つたのだ。

廻り廻つて三年目に、今度の絹子の嫁入沙汰を聞くにつけ、彼女は偶とその事を思出したのである。元來何事も諦めてゐるから、何の怨みも有らう筈は無いけれど、斯くまで運命の裏と表を見せつけられては、誰も平氣でゐられまい。

絹子は訝しさうに「鈴子さん、貴方氣分でもお惡いのですか。」

「否。」と此方は素知らぬ顔を爲る。

「でも、大變お顔色が惡くつてよ。」

「それはね………斯樣お慶度い時に言ふのも異なものですけれど、貴方が彼方へ嫁つてお了ひなすつたら、最う今迄のやうに二六時中一緒に居られまいと思つて………何だか妾急に悲しく成りましたの。」

「然うねえ。」と絹子も自ら萎れたが「だけれども別に外國へ行くのでは無いし、何時だつて逢へますわ而して今迄通りに出來ない事も有りますまい。」假にも別れと言へば悲しいが、絹子は今それ處では無いのである。彼女の目の前には何物も歡喜の光に溶けて了ふ。

思に處は別々に二人は默然と相對してゐたが、絹子は俄に心着いて、

「あゝ然う〳〵。妾は大事の用を忘れてゐた。鈴子さん又後に來ますからね。」

「最早お歸りですか。」と此方はいとゞ淋しさうに言つた。

「又來るのよ。那樣事を有仰ると妾も悲しく成つて了ひます。」

輕く嘆息を吐いたと思へば、直に又怡々して、絹子は此室を出て行つた。

鈴子は何時迄も其後を見送つてゐたが、旋て我前の仕事を取あげて、針の運も二度三度、其嫁入仕度を見詰めるうち、彼女はハラ〳〵と淚を零した。誰が爲に縫ふ染小袖の、袖も袂も思は長い。

（完）



歸省雜記

中川愛氷

父君の病床

憎くなきものは故郷の山川、人情は變れど、風俗は移れど、依然として舊態を改めず、昔予に疎からざれば、今予を迎えて殊更に媚びず、たゞ思出多き往日を語り顔なる、得も云はれぬ懐かしさを感ずるのである、

程なく車は郷里なる我家に着いた、家の誰彼には言葉もそこ／＼に、父君の御病室に通つた、父君は早くも之を知りたまひて、重き枕をもたげ、予等二人を迎へたまふのであつた、疲細りたるおん顔に、長き日を病の爲に苦しみたまひつる御けしき、あまりの御傷はしさに、予は疾には聲さへ出でかねるを、父君は、よく來てくれた、と幾度か繰返され、靜枝を同伴したるを、殊の外なる御喜びであつた、

さるが中にも、母君の御健かに、父君を看護し玉ふことの嬉しさ、兄君は弟妹を督して、痒きに手の届く介抱、たゞ／＼涙のこぼるゝのみである、予は旅裝を解き、父君のおん脊をさすりなどして、しめやかなる中に四方山の話が沸くのであつた、實に二十餘日間、父君は食物らしきものを口にせられぬとのことなれば、咳一つもなか／＼骨身にこたゆることゝ思ふに、續いて起る咳の響き、これでは一刻もたまるまじと、予も他も介抱するものに眉の顰まぬのはなかつた、かくてその夜も二時となつた、されど父君はさも元氣よげに、却つて予等に、早く寢よ、

草臥れたであらう、などゝいたはりたまふのであつた、

予は父君を介抱する人の多きに心許して、寢床に入つた、東京出立の前三日、女鑑の編輯をし終て、心安く歸省したしと思ひたれば、夜を徹して筆を走らせ、道中亦幼兒を連れ、一睡をさへ催し得なんだので、今は眠さも忘れたる所へ、俄に夢に入らんとしたので、眼は却つて冴え、百感之に映じ、殆んど夢より夢に入る如き思ひして、其夜を明した、

按摩と點灸

その翌日は、別に變る事もなかつた、こゝに看護者の最も心を痛むるのは、父君がスープや牛乳等を忌みて一切口にせられぬこと、按摩の習慣つきて、たゞ撫でつ擦りつ位では役に立たぬこと、などである、昔は嫁の資格のうちに按摩の一科を加ふべしなどゝ唱ふる學者もあつて、按摩を受くることは病人の權利中に計算さるゝことになつた、併しこの當時の父君の御病狀に對しては、按摩を廢して、スープ牛乳等に滋養をとらるゝ方が策の得たるものと思ひ、切に勸めたのであつたが、更におん用ひがなかつたのである、その翌日に至つて、父君の御病狀危篤に陷り、醫師も、昨日までの經過によれば、脉搏も確であつたが、所謂變を來したもので、と暗に家族の覺悟をも促されたのであつた、父君先づ不起を覺悟せられ、それぞれの御遺言さへあつた並居る人々は、父君の御顏を凝視り、たゞ血の涙を絞るのみであつた、四面暗澹、天裂け地崩るゝ中に坐する思ひをしたのである、かくて三時間ばかりを經て、一縷の光明は輝き初め、父君は昏睡狀態より次第に生氣を帶びられたのである、醫師も投げたる匙を拾ひて、これは煎豆に花の咲きたる例の如くである、脉搏舊に復したれば、もはや憂ふる所はない、と打つて變つた診斷に、家族の愁眉は漸く開け、婦人の連中には、或は茶を絶ち、梅干を絶ちなどして、神に父君の全快を祈るものもあつた、兄君は叱して、絶つ物を缺いで、茶とか梅干の如きさし當りなくて濟むも

のを撰んで、何の御利益があらう、もし物を絶つて御利益のある程なれば、せめて米穀に肉類位を絶つがよい、亦父君の御命に代るものあらば、我は一命さへ辭せぬのである、茶の梅干のと神を侮辱するものではない、と云ふ心のうちには、これも同じく神を賴むの外には策はないのである、流石に神はある世なり、父君の御身體を九死のうちに救うて、快方に趣かしめたのである、されど一つには滋養飲料を忌み、疲細りたる御身體にも、按摩の力の强きを喜びたまふ、その御元氣にもよりしことゝ思ふ、

父君は更に醫藥を忌み、灸によつて、病根を斷たんとせられた、予等はこの灸といふものには不贊成なり、されど父君の御身體には灸も効を奏して、予等の說は無價値に終つた、後に此事を重野安繹博士に語つた、博士は曰く、その灸をすゑることは拙者大贊成である、人間の身體には不斷灸をすゑねばならぬ、點灸は最も進步したる皮下注射法である、拙者が物心を知つて以來、八十餘歲の今日まで、半日も橫にならずして、健康を保つことを得たのは、その灸の恩澤である、それは拙者ばかりではない、宇和島の伊達宗紀公が百一歲の高齡を重ねたのも、小野湖山、田能村直入などの、八九十歲まで無事に來つたのも、皆點灸を怠らなんだからの事である、されば灸をすゑることは、大に奬勵せねばならぬ、といふ意外なる答であつたが、證據まで擧げられたことであるから、勢ひ頷かざるを得ない、

醫師と病人

グランドストン氏は、面白き人である、或日病んで、某國手に診察を乞うた、醫師は頻りに其病狀經過等を問ふ、氏は唯身體を診察して、之を治療する術はなきかと問ひ、さもなければ小兒及それに等しき、自個の病狀を語り得ぬものは、診察し得ざる道理である、といふことをも圓滑に言加へた、その醫師は答へて、病狀を語らずして診察する醫師を望まば、よき人あり紹介すべしとて、紹介名刺を出した、その紹介せられたる醫師は、氏も知れる獸醫で

あつた、現時に於ても、その病狀を語らずして、診察治療することを得ぬか、など云ふ患者に對して、醫師はこの話を借用して答辯の材料として居る、併しこれは醫術の進歩しないことを自白するもので、予はグランドストン氏の如き注文を醫師に向つて提出したいのである、父君は數年前病氣にかゝり、關西にて名醫と稱せらるゝ人々には大底診察を受けた、而してその診察したる結果は、各名醫にて符節を合するどころに非ず、恰も鶍の嘴の如く齟齬して居る、されど甲の診察をよしとすれば乙の藥は利目なく、乙の診察をよしとすれば甲の藥は用を爲さぬ譯



である、のみならず甲乙其撰を誤れば或は害となるべき藥をのみ服ねばならぬかも知れぬ、然らば病人は何を標準に醫師を撰ぶか、實に病人になるもむつかしい仕事である、而して符節を合す如く一樣に出でたのは、孰れの醫師も、父君の病氣は遂に全快せず唯心靜かに天命を待つのみなどいふ、あまり好ましからぬ宣告的診斷である、父君は是等の診察によつて、醫藥を服するの愚なるを悟つて、爾來天の與ふる壽のいづれの時に盡くるか、その期を待つともなく待たれたのである、然るに醫藥を廢して一年、漸次病は輕く、この夏までは、

全く無病の人となられたのである、兎に角醫術は今一歩進ませたく思ふのである、それに就て面白き話がある、純友家の家宰廣瀨滿正氏が、予の鄕里程近き所に、邸宅を搆へたりしが、先頃病氣にかゝり、神戸にて醫師の診察を受け、醫師のよく言ふなる、今一刻遲かりせば、といふを聞きて、急に名醫なき田舍住居の恐ろしくなり、心長閑に田園と親しみし身が、居を神戸に移すに至つたとの事である、またさき頃江木衷博士に會ひたるに、博士は予に、今回の病氣に、もし東京に歸り居らずば、醫師の手當屆かず、或は危うかつたかも知れぬ、と語られた、予も多く醫師を信せぬ一人であるが、父君のおん病と聞く時は、東京に居せば如何ばかり心强からんと思ふのである、

兄君の至孝

父君のおん病は次第に輕く、さし身、蕎麥ねり、なども口にせらるゝやうになつて、父君は牛乳、スープの如きものにあらぬ粥をさへ、死ぬるまで食ひたくなし、といふので、普通粥を食する時代は、蕎麥ねりの如きものを食せられた、一言にして盡せば西洋臭きものと、貧乏臭きものは厭はれたのである、即ち牛乳スープの如きものは前者で、粥の如きものは後者である、而して兎にも角にも蕎麥ねり、さし身の如きものより、漸次通常の食事をし得らるゝやうに成つたは、實に兄君の至孝がそれをさせたので、二旬餘の、絶食間に於ける心遣ひと手當とに至つては、如何なる富豪の人にしても之を求むること難く、父君も兄君の至孝に對しては、今一回全快せねばならぬと云はれた、父君は予等六人の兄弟を育つるには、非常なる苦心をせられ、社會の競爭場裡に幾度か難戰苦鬪をせられ、今や一家は兄君の世となり、父君は所謂樂隱居の身となられたのである、されど利かぬ氣性の父君は、子等の世話にはならず、と種々なる事業に手を出さるゝのである、父君は今の世には、あまりに正直なる故に、常に失敗に終るのである、はじめは兄君も父君に向ひて、たゞ氣樂

に世を過さるゝやうにとて、事業などに手を出さるゝ事を諫めたのであつたが、よく〳〵考ふれば、父君の思ひ立たれたることにて、もし一家破產する時のあらば、それまでなり、なまじ止めだてしておん心を損ひなばこの上の不孝はなし、と爾來は父君の爲らるゝに任せて、何事も異議を稱へぬことにしたのである、これはその一例に過ぎねど、兄君の孝心深きは概ね此の如くである、兄君は名を彌吉といひ、其行狀後世に傳ふべきもの多く、予はよき兄君を持てることを喜び、常に自ら耻づるのである、

高等理髪所

暫く閉籠りたれば、或一日髭を剃らんとて最寄の理髪店に往つた、人數僅に五六人を立たしむるに足るべき場所を、上下の二段に仕切りて、上段の堺に障子を入れ、そこに高等理髪所といふ札がかゝつて居る、予はその高等とか云ふ理髪をして貰はんとて、上段の室に入れば、廿年ばかり前に大阪にて流行したる、屈伸自在の椅子に、寢ながら髭が剃らるゝといふのが、即ち高等なるものである、椅子一個で、高等といふ名の面白さ、虛榮心を上下二段の床にて區別する、都會ならばまだしも、淳朴なるべき田舍にありては、異とすべきことと思ふのである、その主人は床作といふ才物である、

口合と川柳

また鄕里に川柳といふものゝ流行し　按摩の市と稱する人の作に最も出色のがある、その一例を擧ぐれば『羊羹のもとはといへば小豆かな』『婆アさんは年はとつても女なり』『犬の子は矢つぱり犬の親が產む』の如きもので、これ等は無邪氣な部に屬し、風俗上いかゞはしいのを最も誇りとして居る、右の如き傑作を、日に五十でも百でも作る、そこまでは餘り感服もせられぬなれど、この一山半文も覺束なき傑作を　一句も記憶せぬのはなく、所望すれば千萬句口をついて出るのである、これを口から出任せなるが故に口合ともいふが、既に纏つたものにしてそを暗誦する記憶力に至つては驚くべきものである、

しのぶ草

小川直子

其六　恐ろしの夢

さる程に幸三は、京都に赴かむとて、近江海津に至れば、世嗣の君は軍をわけて此地に止り給へりときゝて、不破富太郎にあひ、事の情を知り、頓て随ひ奉りて歸らんとせしに、藩府より世嗣の君の退き給へるをいたう責めて、其歸國を許されず、よりて幸三まづ國に歸りて、在藩の諸同士と共に謀り、よきにせむと、其地をたち、越前に至れば、山森權太郎使して金澤表へ歸らるゝに逢ひけるが、此人の云へるやう、越前國兵を起して世嗣の君を拒まむとすといふ風評まち／＼なり、御邊幸に在り、つばらにさぐりてよとありければ、幸三はうべなひつゝ止まりぬ、これを探り見るに、事ども皆跡なしごとなりよりてこれを書認めて奉らんとする折から、八月四日の朝ぼらけ、窓をこめたる秋霧をわけつゝ入り來

る足輕體の者十人ばかり、幸三主三郎が宿れる館に、何の會釋もなくふみ込みければ、石黒目ざとく見咎めて、汝等いかなる仔細ありて爰に來れるやと問へば、答ふる樣、私共は當地の役人にて、君だちは御うたがひありとて召とらへ、國にかへすべしとの仰を蒙りたる者にさふらふ、おきての繩を受けられよといひければ、石黒はいたくはやりかなる若武者なれば、御うたがひとは如何なる事ぞ、我等國家のために事を謀る者どもなり、むらひなる事ないひそ、といひもはてぬ所へ、金澤の足輕八人二階へのぼり其中なる野村伴左衞門、田利右衞門等がいふやう、何かは知らず、御うたがひの廉ありとて、君命を蒙りて來れる者共なり、さるからに斯くとらへ候也といふ、幸三は只今大切なる御用紙面認め居る折からなれば、暫し次にて待たれよとて、此程探索せし形勢をつばらに記して、海津より來て待てる早飛脚に渡しつゝ、帶たる大小のたち、あるは懐中物など皆役人に渡し、左右の手をのべ繩をぞ受たりける、縮あ

る乗輿なれば、役人ども十八人刺股などいふ兵器を立て、戒めかこみ、越前國府中のちまたを過る程都鄙の老若見物して、あれ四人よ誰ならんなどいひつゝ群れをる中を過る所へ、谷村はかゝる事とは露知らず爰をかよふに石黒はとく見附て呼びかけたりければ、役人ども得たりかしてしとてこれをも召捕り、宿駕籠の淺ましげなるに乘せ、打連れけるが、白鬼城の渡迄來りて、越前藩の役人は皆歸りぬ、其後は金澤の役人のみに



て、警固きびしく同月六日の夜松任といひて、金澤より三里へだゝれる驛に着きて宿りければ、つとめては頓て公事場に引渡さるゝ事ならんと、覺悟をしつゝ三人諸共手かせ足かせ其まゝに、身じろきだにもまゝならず、居ながらに打ねぶりなどする折しも、金澤より飛脚到着して、小川幸三、石黒圭三郎二人共、御咎ありて一類へ御預の旨、一類の者へ仰渡されたりとよみあげけり、爰にて一類の者

幸三を請取、宅へ歸りぬ、此時父の一方は六日の夜夢見あしかりつとて、七日の朝とく庵をいで、、金澤さして歩む所へ、河島良左衛門よりの飛脚汗あびつゝ急ぎ來るに行あひければ、何事ならんと打驚き紙面をひらけば、かゝる事なむとあるに、一きは足をはやめて來りけり、爰に幸三も宅につきければ、頓て締所に入置き、其前にて一方良左衛門二人の父、又は他のやからうからもつどひて、何くれとかたらひあへりき、かくて九日の夕つかた小頭なる小川善太夫來て、幸三の締所を守る、親類の者少なければ明日より公事場奉行多賀源助殿へ御預けとなる旨仰渡されたり、されど多賀殿の庭内手狹なるからに、公事塲に於て御預りになるをもて、一類の者共其意を得、幸三を引連れ公事塲へ出頭あるべしとありけるまゝ、幸三に衣服とゝのへさせて、別れの盃さし出しければ、一方は幸三に向ひ、此程よりの申渡し、前後揃はぬいひ方なれば、多賀殿の御預りといふも甚いぶかし、かゝれば又逢ふ事も覺束なし、もし一命を召さるとも、未練の振舞などゆめ〳〵あるべからずといへりければ、幸三は必々御心にかけ給ひそとて、

武夫の大和こゝろのひとすぢに
　身はなきものとかねて思ひき

と答へければ、父は心易しといひながら、落涙せられけり、斯くておのれの父良左衛門に向ひて、幸三のいへるは、たとひ命を召さるとも、身に犯したる罪あるにあらず、時勢のしからしむる所なれば、御心易くおぼしてよと、心ちよげに盃さして居る所へ、はや小頭兩人入來りて、急げよいそげとのゝしれば、頓て駕籠にと打のせて、ふたりの父は送りゆくおのれはこれを見送りて内に入り、締所のあきたるあとをながめつゝ、世のわびしさを歎きつゝあから目もせで居たる程に、夜もほの〴〵と明わたる頃、やう〳〵心を取直し、そこらちりぼひたる盃ども取納めなどしつゝ思ふ樣、我夫は何の罪かある、今日公事塲にて御糺もあらむに、事の曲れるか直なるか

けじめも見えなば、御許ありて歸らるゝ事もやとあいなき頼をして、終日思ひ暮しけるも、女々しき心なりけむかし、さるに秋の日の事にしあれば、はや黄昏近う成ぬる頃、ふたりの父の歸られたれば、これを待とりて、いかにと問ひける折、一方は雄々しくいひてありけるが、良左衛門は物をもえいはではら〳〵と大きやかなる涙の玉をこぼしたり、さればおのれもおもはずせきかねつゝ袂をしぼりて、さしむかひ、さこそ勞し給ひけめといへるに、一方のいはく、お昌よ今の歸さに良左衛門殿足もすゝまねばとて、奥村殿の御門のしきみに腰打かけて休らひながら、あはれ世の習ひとはいへ、我女の聟を公事場に連ゆき、囚屋に入れて歸るといふ憂事やあると聲をさへあげて泣かれたり、これには一方も胸を痛めたるぞとかたられぬ、斯くて十日には良左衛門は自宅に歸り、母刀自問ひ來て、何くれと世のさわがしさをかたり出、如何に成行く世のさまならんと、三たり寄り居て歎く程に、おのれもいまだ年若くて萬にたど〳〵しう、何をいかにせむともおもほえず、幸三のかゝれしものを其まゝに、只いたづらに過しけるが、十二日の朝まだき、又三たりにてくりかへしかたらふ折しも、何の音なひもせで、つかつかと入り來るは、役人めきたる者ひとり、足輕ともおぼしき者六人にてぞありける、おのれ先づ誰人にて御用は何ぞと問ひければ、頭だつ人、我等公事場より御用の筋ありて來れるなり、幸三殿の妻のみは爰にをられよ、其他の人は皆立退き給へ、幸三殿の所持の品には手だになふれ給ひそ、我等がなしのまに〳〵見て居られよとて、あたりの物どもあさりつゝ、打ちらしてありとあらゆる上書の下物など殘らずもち行くさま、淺ましともいはむ方なけれど、すべのなければ、中々に爭はむよりも、いで〳〵我脊の事をもきかまほしと思ひつゝ、御身は如何なる御役ぞと問ふに、我は公事場の御館笥役なりと答ふまた我脊幸三は今も猶一類御預けの名目なりやと問ふに、さなりとありければ、さらば囚屋にとらはれ

たる罪人とひとし並にはあらざるべし、萬の御取あつかひも、おのづからあるやうあらむといひけるに、答だにせでいらだちたる振舞、見るもいと口をしうおぼえぬ、斯くて日ごと〳〵に世の人言をきけば小川幸三は御國はじまりてよりいまだ聞かざる大罪を犯したりなど、口々にいふ、其うれたさたとへむ方なくて、母に向ひ歎きける折しも、幸三の門弟なる渡瀬平作訪來て、これ見給へ、此頃人のもてはやせるものなりとて、懐より取いで、見せられけるひとひら、誰がせしわざにか、正義番附と題して、角力の番附と同じさまにて、東の大關は福岡惣助、西の大關は小川幸三、これを始めとして、それ〳〵の役割つばらにて、高木有制を小結といふにあてたり、母刀自これをつく〳〵見て、昌子よさのみ心を苦しめそ、正義と云ふ事はあしき事かは、罪なくて配所の月を見給ふとも、心の中だに涼しくば、何をか憂ふべきなどいひ慰めて居らるゝ程に、うからだちかたらひて、年若なる妻をひとり家に置かむもうしろめきたきわざなれば、里なる父のもとにて預かれよといふまゝに、里より迎への人來りければ、それにいざなはれゆきて、父母の傍にて暮しけるが、日頃朝な夕なに問來し人々も、今日は誰、明日はくれと皆とらはれの身となりゆくさまを聞きて、氣も消え、心もうせて、うれひわたるほどに、いつしか長月も過行きて、神無月のふりみふらずみ打しぐるる頃にも成ぬれど、我脊の便りは露の音なひも聞え來らず、さながら世をへだてたるに異ならず、いかにもすべのなければ、河島久和とて我せうとの、其頃江戸にありけるに、いかゞ成行く事ならんと問ひにやりければかへりごとに、おのれの考ふる所にては、遠き界の島もりにもやとおもはゆれど、時の勢ひもすべなき習ひなればといひおこせられたるに、少しの心の晴間はあれど、空の時雨はやまざりければ、

神無月ながむる空も我袖も
　しぐれ〳〵てけふもくれつゝ

など口すさびて、打しをれ日を送るに、召使ふ女ども、爰なる理髮所、かしこの弓場などにての人言を聞きつゝ、歸り來て、此頃の人々のかたらひぐさは、小川幸三の罪惡は大方ならずとよ、いにしへの大槻磐之助は大罪とこそいへ、其害は御家のみに止りたれど、こたびは天の下の大事にかゝる罪なれば寸々に切るとも、八ッ割にさくとも猶あきたらずといひあへりなどいふをきくに、おのれの胸の中さくるばかりに痛みいで、我脊いかなる罪を犯しけむ、もし〳〵道に背きたる行あらば、おのれ何の面ありてか日月の光を拜まむなど思ひ歎きて、またもや江戸なるせうとの方へ問ひやりぬ、返事には、そは女心の迷ひなり、幸三殿には、鵜の毛ばかりの惡心あるにあらず、これのみは心易く思へよなどありけれど、只胸のみ痛みてやる方なければ、しばし忘るゝ事もやと枕をとりてまどろみける、夢の中に召使ふ女はせ來つゝ、今なむ幸三樣には、はり付といふ刑に極まり、大路を引わたされて居給ふよと告れば、おのれはしりいで、門にたち、彼方を見やれば、脊の君は黒駒に打のせられ、腰繩をとられ、頭には六尺ばかりなる白木綿のはちまきをうしろに結び、其はしは駒の腹あたりまで長々と打たれたるに、めぐりの警固いときびしくて、先だちたるはぬき身の鎗を二筋たてゝ、何事にかあらん、呼はるをきけば、出て見よ〳〵と長やかなるふしをつけていふ聲も、折柄いとすさまじく聞え來て、脊の君は後姿のみ見えつゝ、はるかに遠ざかり行くに、いかゞはせましとさけぶと思へば、ふとさめにけり、此時

せめて世に夢てふものゝなかりせば
　ぬる間はうさの忘れむものを

と、よみてなきふしたり、これをもまたせうとの方に告げやりければ、

かくとまで思ひなわひそ世のうさも
　夢のたゞひにさめさらめやは

など慰めつゝ、いとねもごろなる文どもしば〳〵おこせられたりけり、

蕈の話

農學士　佐倉甚作

蕈の種類には松茸、初茸、しめじ茸、なら茸、えのき茸等と云つて、數へ立てるときには殆んど四千五百種もあると植物學の上では檢べが屆いて居る、而して是等は欄科菌類といふ部門に屬するもので何れも食用に供せらるゝものである、けれども何分にも、未だ人工を加へて栽培し得べきものは幾んど稀であつて、僅に椎茸の如きは、獨り其栽培が緒に就いたのであるが、松茸の如きに至りては、是まで栽培を試みたものが無いではない、けれども未だ一人の成功をなしたと云ふことを聞かない、それと云ふも一つは現花植物の、謂ゆる莖と根と葉の三者を兼ねて居る所の菌糸が細小なる爲に、肉眼を以て之が性質を極むることが出來ないのに由ることが多いのである、

是の故に若しも是等の研究が、學者は勿論、世の

實業家も相共に一致して事を爲したならば、松茸の栽培が如何に困難であつても、又菌糸が如何に微細で見難いと云つても、必ず其理を究めて栽培の實を擧げ得ないと云ふことはあるまいと思ふ、

彼の通俗榎茸は一名滑茸とも云ふもので、榎の樹に多く生ずる所より此の名を付けたものであるが、處によりては種々名を異にして居る、此の蕈の外部は滑らかであるから、即ち別名を滑蕈と呼ぶものである、

此の蕈の全躰の大きさは、大小種々ありて一定しては居らぬが、まづ其十分に生育したるもので蓋の大さは二寸二三分より以下三四分位で、莖の長さは六寸より五六分程である、而して何れも蕈の普通であるが、すべて土中に埋れて居る所は黒色である、

この榎茸は、母とも稱すべきものが一個發生すると、其莖より繁殖するものである、けれども其發生すべき位置は、氣候および温度等の關係よりして、たゞ一つの菌のみが發生して、毫も分殖しない事も

ある、蓋し此くの如き場合は、多くは菌が土中を經過し來る時に起る現象であつて、菌の數の少い代りに、己が寄生して居る樹木中の養分を獨りに集むるが故に、その大きさは他の群生のものよりは餘程大きいのである、恐らくは此の場合に於ては、寄生主より養分を吸收するばかりでは無くして、地中より多量に吸收するもの丶やうに思はれる、

　襴は襴科菌類には最も必要なものであつて、之が表面には專ら繁殖を司どる所の子實を附着するもので、即ち菌の裏面の襞のやうなものを云ふのである、而して莖に空洞の有ると無いとは、此の科の分類に關係あるのみならず、又識別にも必要なることで、之には乃ち空洞がある、而して之には褐色の細毛が生じて居て、且つ莖の周圍に近き部分も亦莖と同じく褐色を呈して居る、

　此の菌の細胞は隔膜であつて、此の細胞は内部に至るほど其形が大きく、外部に至るほど小である、而して大細胞は柔軟で弱いけれども、小細胞は堅くて强い、要するに外部は、他の刺戟お



よび障碍物に逆ひて、莖を堅固に維持せんが爲である、

菌類の子實は、高等なる植物の種子と同一なる作用を有して居るのである、若しも之が無かつたならば菌が地球上に發生する譯はない、否、種が絶えてしまふのである、然るに世人は稍もすれば、菌は自然に生ずるもの〻やうに考へて居る、けれども決して原因なくして發生し現出するものでは無い、此の襴科菌類よりも尙ほ下等なる黴菌のやうな者は、子實より發生しないで、多くは各自の躰を小分して、生育すると同時に復分裂して、以て已が同類を繁殖するものである、が、此の菌類は黴菌よりは餘程高等なるもので、子實を具備して居て繁殖の根源として居る、故に此の子實は人工を以て培養することが出來るのである、

併し子實と氣候とは大關係を有するものであるから、此點は大に注意せねばならぬのである、卽ち子實は攝氏の約七八度より三十四五度までは其生育が

盛んであつて、他の黴菌等のために生長を害せらる〻やうな事は無いが、若しも之より温度を進めるときは、是等の害物が多いからして、到底その繁殖を十分にすることは出來ないものである、

榎茸の自然に發育するのは、まづ十一月の上旬より三月までの間で、その初めにありては發生の數も多く、且つ生長も速かであるけれども、十二月より一二月に渉りては、此菌の發生に最も好季節であるそれ故に莖か太くして蓋の大いなるものを生ずるが温度は如何と云ふに七度乃至八度である、去りながら其生長に至りては、十一月頃のものよりは生育の程度が最も遲緩である、

又春二月下旬より三月に渉りては、次第に蓋が小さく莖も細くして、殆んど十一月上旬に發生したものと同一である、之は全く氣候の關係より來るものにして、十月より次第に温度が下降するの度は緩慢であるけれども、其氣候と和等しき春の時節は、實に急激なる變化をなし、直ちに發生期を經過して温

暖となるものである、それ故に之が發生の衰亡を來すものである、

之を栽培するには、榎、櫟、無花果樹、楮等の木材を一尺乃至二尺に伐採し、之に鉈を以て其周圍に二三寸隔に切目をつけ、然る後、之を豫て準備せる栽培床に横臥せしむるのである、この栽培床は用材を入れて蕈を發生せしむる場處なれば、その床の廣狹は栽培者の隨意であるけれども、その深さは該用材を入れて、尙其上面の地平面より二三寸低度にある位に掘り下げなければならぬ、而して床内に用材を入れたる後は其儘になしおき、毎年十月上旬頃より採收期の間は、水若くは米の泔水等を注ぎて、常に濕氣の絶えないやうにして置かねばならぬ、而して此に注意すべきは、この栽培期間は日光を直射せしめてはならぬ事と、尙は一つは冬期になりて氷凍を防ぐために、藁を床の上に覆ふことを忘れてはならぬ、尙は學理の說くべきものがあるけれども、却つて倦厭を招くから之にて止め置く、

昆虫の話

家庭と昆虫

深井龍蛔

昨冬からくだらぬ昆虫の話で、讀者の方々はさぞやおあきでせうと思ひ、のみならず貴婦人方のお讀みになる本誌へ、エコノミカルな昆虫談などを書くのも如何と心得、また此編が前にも申上げた通り、病床雜錄であつて、幾多の矛盾と俗說などを含み加ふるに稿者の不文を以てす、到底物の役に立つべくも思はれないので、遲ればせながら編者の方に掲載中止を願つて置きましたのに、圖らずも拾月號に再び埋草とせられたのは實に汗顏に堪えぬのであります、仍で今回は此話を中止することゝして、最終に家庭と昆虫との關係につき簡單に述べさせて頂きたいのであります、家庭對昆虫の關係如何と云ふ事もいろ／＼でありますが、玆には害益と云ふつまり經濟的方面を申上げたいのであります、詩人ローウ

エルの句にも「一枚の草葉一片の樹葉と雖ども纖巧なる動物の宮殿にあてられざるなし」とありますが誠に左樣なのであります、例へばエカキムシなど云ふ小蛾の幼虫などは密柑類の若葉の表皮の下に生活して、わが天地も亦小なりとせん小的に暮す事も出來る程であります、また引例が少し不潔ではありますが、米國の昆虫局長ホワード博士が曾て調査されたのに、人糞に生活する昆虫類は蠅が七十七種、甲虫類が四十四種、蜂類が十四種、蛾類が一種都合百三十六種であつたと申されます、何と驚くべきではありませんか、就中傳染病の媒介者もあると云ふ事です、何と恐るべきではありませんか、

況んや小なりとも吾等人類の生活する家?? 何で害虫の生息しないことがありませうぞや、先づ我等の身體や犬猫の皮膚に寄生する害虫が幾種ある乎そして如何なる關係がある乎をお考になれば家庭に於ける昆虫問題も殆ど了解さるゝでありませう、昭覧の歌にも「やをら出てころもぬぐひを御匍ありき、我に耻見す虱とも哉」とありまするが、之は虱を單に衛生害虫と云ふのではなく、人格にまでも影響すると云ふのでせう、英語や獨逸語でも虱の形容詞は賤物てふ意味があるのでも察せらるゝではありません乎、虱一名半風子然りとすれは赤馬先生(蚤)豈然らざらんやであります、パラトックスをやる者は時とすれば蚤も亦肥滿せる小兒の刺絡者となつて有益な事もあるなど云ふかも知れませんけれども、お醫者さんは果して然りと云はるゝでせう乎、否必ず然らずとお答へになるでせう

人間の蚤は學問上の名をプレックス、イルリタンスと云ひ、猫蚤はプレックス、フエリスと云つて別種でありますけれども、愛猫家の猫には人間の蚤も寄生する事があります、ですからペストでも流行する時は餘程注意せねば鼠から猫、猫から人蚤それから人間と云ふ順序で、ペスト病になる事は最早想像ではないのであります、(勿論此順序でなくても傳染するのです)

またマラリヤ病とプラズモデウム（病原）との關係は千八百八十年に佛國の外科醫ラヴラン氏が發見したのでありまするが、マラリヤ蚊一名アノフエル蚊は之が媒介をするので、實に恐ろしい蚊であります內地ではアノフエルス、シネンシスと云ふのが多く居るのです、米國では蚊の研究を目的とした會もありますし、中央政府も州廳も蚊の問題には餘程力を入れ、昆虫局と衞生局とで協力で驅除豫防されて居ます、勿論之はパブリック、サニタリーでありまするが、個人衞生から申しても自家の蚊の棲息所を破滅せしめて無蚊家屋とするも愉快ではありません乎、

衞生と昆虫、昆虫と疾病、こんな事もいくらも例はありまするけれども、之はお醫者さんの領分であるのみならず自分等の專門でないから之にて止めませう、次には一歩退いて我等の家屋、道具、衣服、書物、食物を見ればまた害虫があるではありません乎、

曾て伊勢大廟の御柱中に生活してミハシラハヽと云ふ名を得た甲虫があります、之は柱のみではなく何でもすこし朽ちかけた木材へは住むのであります

また白蟻と云ふのがあります、素琉の『やがてこの堂も引くべき羽蟻かな』と云ふのは此の事かも知れません、矢張稍朽ちた木材中に生活するので家屋害虫中の王かも知れません、外國など特に熱帶地方では此害を受ける事が多いと云ふ事です、序に申上げますが白蟻は名こそ蟻と申しますが、また其生活狀態が蟻に似て居りますが、分類の方から申すと膜翅目と云ふのではなく、白蟻目または擬脈翅目と云ふて、トンボやカゲロウに近いのであります、

食物の害虫にも、コキブリのやうに勝手元の有合せ物を食ふのもあるし、鰹節虫のやうに貯藏して置く鰹節や繭を害するのもあるし、タリヤケムシのやうに醬油麴を食ふのもゐる、糠味噌に生活して味を惡くするシヤウジヤウバヘの幼虫、肉類に産卵するクロハイ、ニクハイ、砂糖を害する蟻や、菓子を食ふ蛾の幼虫、何と五月蠅ではありません乎、

村娘野孃が翌年のお雛祭にとて貯へんとする栗にはクリノジギムシが居て實を空虛にして仕まふし、藏に貯へたる米、栗には各種の甲虫類の幼虫や蛾の幼虫が居る、肥料にする各種の干魚にはホシカムシと云ふがあり、好煙家の敵とも云ふべきタバコムシは葉煙草は勿論、戸棚の奥の葉卷まで害すではない乎、衣服や書類を害する各種の蛾の幼虫や衣魚や、ホワード博士の妻君が除虫箱の苦心をしたのも之がためではありません乎、

こんな工合に書けば限がないが、貴重なる誌上を汚すから之にて中止する、また益虫の方面につきましても蠶とか、蜜蜂とか、愛玩昆虫として皇后樣のお好きなさるとやらのカンタンとか、クサヒバリとかスヾムシとか其他のクツワムシ、ギス、所謂家庭昆虫と云ふべきものは頗る多いのであります、是等につき研究するならば、必ず得る所が少くないと思ひまして、いろ〳〵先頃より申上げた次第であります、

希望の三大障碍

松崎雙葉

男女に拘はらず、およそ世の中に在りとあらゆる人々にして各自に志す所の希望のないものは無い筈である、否、あらねばならぬので、若しも希望が人々に無いとしたならば、その國家は活氣のない所謂垂亡國と云はねばならぬのであるが、幸にして我國などは僅か四十年間にして歐米が數百年の長日月の間に贏ち得たる所の文明の長所を收め獲て自己の缺陷を補ふたばかりでなく、最近日清日露の二役を經て以來は、世界各國より東洋の新進國であるの、又は最强國であるのと持囃されて一等國の列に加はるまでに至つたのであるから、吾人ともに少しは肩身の廣いのである、けれども夫等のお世辭に浮かされて油斷をすると當時は優勝劣敗の世の中であるから武器の戰爭に勝つても、平時の戰爭すなはち文學、技藝、商業、殖産等の競爭に打負けるやうな事に立

至るのである、

さればそれら平時の戰爭に打負けまいとするには男女を問はず、國民たる者は確然たる志望を立て、堅忍不拔の精神を以て之を遂るに勉めなければならぬのである、元來國家といふものは男の半面ばかりで立つて行くものでは無い、矢張り家庭に於けるが如く男女相扶けて行かねばならぬので、殊に女子は國民の乳房であると云ふやうに最も重大なる責任を有して居るものであるから、すべての點に於て須らく愼重の態度を取つて行かねばならぬのである、



一體女子と云ふものは緻密な頭腦を有つて居るものであるから、滅太に此くの如き事は無い筈であるにも拘はらず各自の志望が失敗に歸するとが少なくないが、これは畢竟何故であるか、如何なる原因に基くものであらうか、之を醸すの原因に就ては固より一二ではあるまいが、今吾人が觀る所に由れば、その種々ある中にも最も有力なるものは、左の三大魔心であると考へるのである、即ち

第一　嫉妬心　第二　猜疑心　第三　虚榮心

にして、右の三大魔心の爲には、必ず年輩者のみには限らない、髫髦の頃より初めて明日をも知らぬ年

波の數を重ぬる白髮の老嫗に至るまでも、みな多少はその勢力範圍に取籠められて居る、それは小供同士の遊びを見ても分る、又女學生などの上を見ても分かる、一歩進んでは嫁と姑との折合ぬなどを見ても知らるゝのである、

ソコデこの三大魔心は、前述の如く長幼を問はず等しく女子が有して居るのを見れば、何となく天禀の特性のやうにも思はれる、けれども之は全く天性では無い、彼の天性なるものは、茄子が瓜にならず杉が松にならぬが如く、人力を以て變移抑制することは出來ぬものである、然るにこの三大魔心の天性でないと云ふ證據には自分で其行爲の不可であると云ふ事を覺りて、一事一物に、能く注意を拂へば、遂には此三大障碍なる魔心を追退けることが出來るのである、

併しながら其れは中々容易な事ではないが、之もその魔心の强弱に因りて多少の相違がある、一體この魔心は、女子の天性が社會の惡慣惡習のために變

態に發達したるものであるから、自分から此に注意して絶えず抑制することが必要であるが、若し此の魔心が横領して深く良心にまで染み込んで居る人には、自己の行爲が可いのであるか將た可くないのであるかを判別する事が出來ぬから、偶々人が忠告をして呉れても其所に氣が附かぬのみか、却つて此の魔心のために百年の知己を仇敵とするやうになる、

斯くまで深く魔心に侵蝕せられたものは、到底安心立命と云ふことは夢にも見られないで、常に煩悶苦痛の境涯に呻吟せねばならぬので、その見安き例を擧ぐれば、所謂彼の墮落女學生なるものである、彼等の多くは谷間の櫻ではないが、覗かねば見えぬ程の鼻を高くして、鄕黨隣里に向つて誇らんものとその三寸腐爛の口車に兩親を説き載せて、一朝故鄕を白雲の内に埋めて遠く都の空に來て見れば、いつしか虚榮心の爲には學資の不足を告げ、猜疑心の爲には學藝の進歩を止め、嫉妬心の爲には知己朋友をも失ひて、今は二進も三進も行かなくなつて、故鄕

にも飾れぬ褸襤の袖のみにて、振附け難き身一つの乘るべき汽車も思ほえで、軌道の露と消ゆるものも出來るのである、

又女學生以外に就て曰へば、今の世に女權呼はりをするもの丶多くである、是等の輩はその十中の八九までは、彼の三大魔心より煩悶の刺戟を脱せんが爲に、幾んど脚の下の楷梯を打忘れて空しく天に向つて救濟を叫ぶものである、故に、今この魔心的女權の膨脹せる家庭を見るのに、どうも圓滿に治つて居るものは至つて少くない、それは外でもない、彼の魔心的女權より割出した自我的觀念を振廻はすから、一家一族も終に疑惑の渦紋の中に投ぜられて、果ては屋根があつても涙の雨に袖を沾すに至るのである、

又世間には是等幾多の狂態を目擊したり、或は無意識に自己の煩悶を解脱しやうと試みて、彼の魔心的女權の發動よりして終身獨棲などを主張したり、又は自衛自活の途を講ずるのであると稱へて官吏となり、或は商工となり若くは敎育者となる者もあるこの自衛自活の途を講ずるといふ事は、女子として決して不必要なものではない、隨分或る塲合には必要なものであると思はれる節もあるが、彼の魔心的より割り出したものでは到底成功することは出來ぬものである、

そは獨り我國のみではない、西洋にても同じ傾きがある、最も西洋の婦人は、概して我國の女子よりも一層獨立心に富んで居て、隨分立派に成功を遂げて居る人も現に多くある、とは云ひながら、併しこの魔心の爲に之を永久に持續けることの出來ないものが其大部分を占めて居るとの事である、

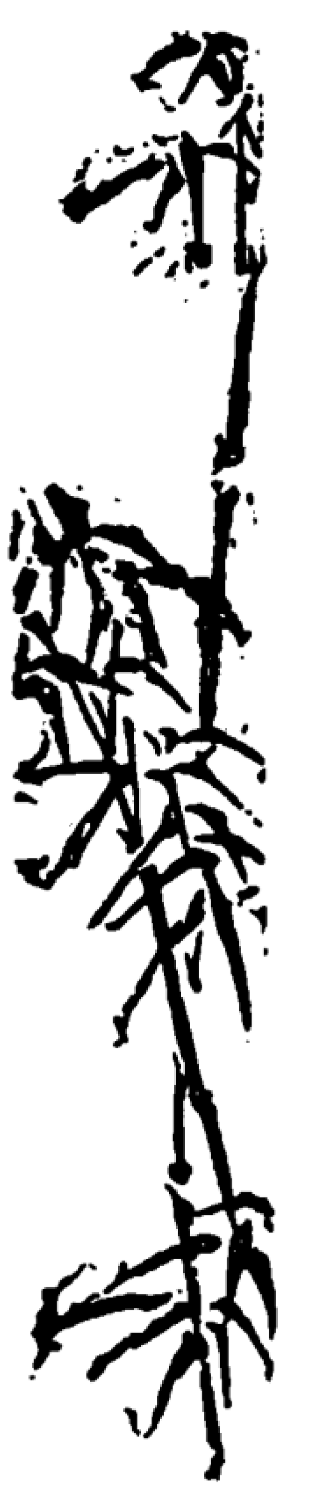
斯く言はゞ、此の魔心は獨り女子のみの專有のやうに聞えるけれども、決して女子のみが有するものでは無い、男子の側にも此の魔心の爲には失敗に陷つた者が古今尠なくないのであるが、凡て男子は女子の思想の狹小なるに比すれば、遠大で周密であるから、縱ひ一たび此の魔心に魅せらるゝとも、その

反省が迅速であるから、覿面に失敗を招くといふやうな事は稀れなのである、

然らば如何にして此の三大障碍を驅除することが出來るかと云ふに、例へば、五穀の豐饒ならんことを祈るものは、相當なる方法に依りて耕し耘らねばならぬ如く、安心立命を獲んと圖るものは、また必ず之に相當なる方法を講せねばならぬ、即ち精神を修養して魔心を擊退せしめねばならぬが、偖前段にも述べた通り、この魔心を除き去ることは甚だ困難ではあるが、譬へば亭々として雲を凌ぐの喬木も、嫩芽の中に摘まめば造作もないのと同じで、この魔心も其勢力の未だ逞しからざる以前、即ち幼年時代の未だ世の惡慣惡習に感染することの淺き中に防遏するのが最上の手段である、

去りながら之が根底を鋤き去るのは、本人が自己の非行爲を知りて改むるのではなくて、之が父兄若くは敎育擔當者の敎導に因るものであるが、時としてはその家庭の主婦がこの魔心に冐されて居るが爲に、其子女の魔心の發達進歩は非常に長足であるから、迚も學校位の敎育では之が趨勢を防遏する事が出來ぬ、併し中等の敎育を受けたる女子は、已に精神の修養も多少得て居るから、監督者の許に居る間は、彼の無學無識の輩に比すれば容易であるが、若し監督者の膝下を離れて多少獨立の域に進むときは概ね再燃するの恐れがある、

併し半可通で前後の分別もなき一種の者の如き悲境に沈む者も又少ないやうである、依つて之が父兄は勿論、敎育の任に當る者も共に全力を注いで之が敎導に留意して矯正の途を講じ障碍を芟除するに努めねばならぬのであるが、女子それ自身に於ても此の三大魔心こそは各自の志望を荼毒することは、彼の蛇蝎猛獸より怖るべきものである事を知つたならば寸時も速かに其域を脫すべきである、



女子の實務

徳江三千世子

現時の女生方が學問を爲さるゝ有樣を觀まするに、固より私共には、女子教育の精神とか又は目的など、申します六ケ敷い事は判らないので御座いますから、或は見當違ひかは存じませんが、夕ゞ衒燿に修學なさると云ふ傾が多くはあるまいか、その傾が勝つたら、自然に實務に遠ざかるのではありますまいかと存じます、例へば、誰某は何處の學校を優等で出た方であるが、お輿入の後、どうも家庭に適應しないなど、云ふ事を、屢耳にもし又直接眼にも觸れるので御座います、尤も學校は、將來主婦となりて家政を整理するに足るべき大躰の智識を授けるに止まるもので有りませうから、別段學校の教育が何うの斯うの申す次第ではありません、

概して學校出身の女子自身の頭腦に、自分は何所其所の學校を優等の成績で卒業したものである、されば金箔附のものである、何所へ出ても、押しも壓されもせぬものであると云ふやうな、妙な一種の塊が頭腦の裏に凝つて居るのではありはすまいか、或は私の見違ひかは存じませんが、如何も一種の氣風が滯つて居るやうに思はれるので御座います、併し何うして其樣なものが養成せられましたか、その原因に至りましては判りません、けれども兎に角に在るといふことだけは爭そはれぬやうでございます、

手近いお話が、裁縫の一科でも、片附きました後先方の舅姑だちが、之は著惡いから、此所は斯う、彼所はア、と指圖をしますと、少しも之に耳を假さうとは致しませんで、心の裡に思ふやう、自分は某裁縫學校を優等で卒業したもので、現にその免狀までも持つて居るものであれば、何んの舊弊人が知つたことかと云ふ、その冷嘲に稍怒りを加へた相が顏貌に表はれますから、從つてそれらが原動となつて折合が惡くなるので御座います、

右に反して、學校の成績は毎時も良くないのみか、その卒業證書は漸く校長その他職員のお情で得たと

云ふやうな方の縁附た後を見まするに、中々家政を整理して行く鹽梅、又は舅姑に奉侍する模様などは、實に見上げた行ひがあるので、斯ういふ方を見聞しまする毎に、如何して學校の成績は良くなくとも、家庭の主婦たる任務を盡すに當りましては、謂ゆる模範とすべき振舞があるのであらうかと、實は不思議に堪へませんから、その後は是等の對照に就きて心を注ぎますると、別に不思議と申す程では御座いませんが、或方面に其原因のあることを發見したので御座います、それは云ふまでも無く、即ち家庭の教育で御座います、

まづ今日まで自分の僅かなる實驗に因りますと、學校の成績は幾ら優等でありましいても、縁付た後、家庭の實務に適應しない方の家庭は、子女に對して放任主義であります、けれども結婚の後よく主婦たるの實務を處理して行く方の家庭は、能く子女に對する家庭の教育が行屆て居るので御座います、右の如き實况で御座いますれば、子女をお持ちになつた方々は、まだ、其手許に居らるゝ間に、學校の教育は勿論將來主婦として務むべき事柄を、間がな隙がな導いて行かるゝのは、蓋し世の母たる方々のお務であらうかと竊かに考へるので御座います、

また子女達は、母の命令は背くやうな心得違ひがあつてはなりません、のみならず他日餘所へ嫁し付いた後、若しも舅姑等から注意があつた時には、自分が學校で學んだのは、只大躰に止まるものであれば、今現在に當りては、その人の肥瘠等に基て實地に腕を磨くので御座いますから、決して嫌な顔などは爲ないで練習を積むやうにして欲しいもので、それは單に裁縫ばかりではありません、何事でも一家の主婦たるものゝ務めは實用的でなければ可けません、皆様が實務に適應したならば、御自身ばかりでは無くして、一家の幸福は如何ばかりであらうかと存じます、

女子教育講演會　第二回の景況

去十九日午後一時より、本誌編輯局の催にかゝる第二回女子教育講演會は催された、今其景況を記さんに、當日は先日來の天候順にて、先づ雨を氣遣ひたるに、朝來殊の外の快晴にて、幹事の側では、今少しく曇る方が、かゝる會合には妙ならんなどいふものさへ出づる位であつた、重野先生、先登第一に午前十一時頃より臨場せられ、定刻には他の講師諸先生も御揃ひで、幹事は早く安心をすることが出來たのであつた、

日本時間といふものがあるのと、正午といふ開會の時間がよくなかつたのであつたが、午後一時頃になつて、漸く會場は賑ふに至つたのである、本誌を最も愛顧せらるゝ高島先生、先例によつて開會の辭を述べられ、つゞいて女子の力の偉大なることゝ、その偉大なる力を善用すべきことを説かれて、次に鳩山博士夫人登壇せられ、母の責任といふ題下に、極めて行屆いたる注意があつた、いづれも夫人の實驗より割出されたる説で、頗る活氣がある、隨つて聽衆を深く感動させたのである、その聲の朗なると調子のよきは、婦人教育家中の第一品であること素より論のないことである、次に重野先生美髯を撫でながら登壇せられ、女子讀本の最有益にして、然も餘り多く知られざる、宗大家の女四書を、其解説を試みたる若江女史と、共に紹介せられ、ついで洋行談があり、輕薄なる女子教育に一棒を加へられたのである、終つて山階德次郎氏の令孃等三氏の仕舞が、餘興の第一に演ぜられた、流石の名人の系統を受けたれば、その聲の妙に至つては云ふまでもない、頗る品格よく、然も皷の音色など聽者の耳を淸むるに足るべきものであ

つた、次に澤村先生の茶の話があつた、茶は我國の食堂に一回も缺かされざるに拘らず、茶に就ての知識は甚だ乏しいのが多い、先生は原料を示されて、親切に茶の功能を説かれたるは、最も有益に、然も少からぬ興味があつたのである、

その間に挾んで、齋藤とし子氏の宮本玉川があつた、六玉川の光景絃に乘つて、居ながら歌枕を聞くの感があつた、この演奏中休憩室にて、講師諸先生及び紀念として、幹事連と同席したる光景などを撮影したのであつた、

次に岡田先生登壇、時節柄最も心得ねばならぬ、風邪のことに就て親切なる注意があつた、而してその説の具體的に解説せられたるは、先生の體格で、醫家のいかに衛生に留念せらるゝかを示されたのである

次に大木のぶ子氏、その師山室千代子氏と連彈にて、箏曲松竹梅を餘興として演ぜられた、

最後に寺尾先生登壇せられ、一家の主婦の仕務の重きことより説いて、如何にしてその重き任務を盡すべきかに結論せられ、頗る爽快なる講話であつた、

以上の如く本誌編輯局は、第一回といひ、今回も亦第一流の學者諸先生によつて、有益なる講話を廣く紹介するは大に榮とすべきもので、實に寺尾先生の云はれしごとく、成功し過ぎた位であつたのである、

さて此の講話は殘らず筆記したれば、

本號には高島先生の婦人の力、重野先生の女四書の話

十二月號には、鳩山先生の母の責任、岡田先生の衛生談

來四十一年初刷誌上には、澤村先生の茶の話、寺尾先生の一家の主婦

を掲載する豫定である、また當日は紀念品として、菊花のかざしを來聽者に呈したるが、この花かざしは女藝專修學校の製作にかゝるものである、



第四回講演筆記

さる十月十九日本誌編輯局の催しにかゝる、第二回女子教育講演會は、東京讀賣新聞に依つて傳へられたる如く頗る盛會なり(別項參看)しが、本號より其筆記を掲載して、來聽せられざりし誌友諸孃の一讀に供せん、來聽せられし諸孃、亦之を讀んで更に感を深くせらるゝなるべし、

婦人の力

高島平三郎君

私は此頃方々を旅行いたしまして、色々婦人の有様などを見て參りまして、婦人の方々の勢力の大變に大きいものであるといふことを實際に感じましたのでございます、それ故に、御婦人方の力といふものはどういふ風な方面にどんなに及ぶものであるかといふことに付て、一言申上げたいと思ひます。

一體世の中の人が自分の行儀を崩したり我儘なことを致したりしまするには、二つの極端がございます即ち一つは自分を大變にえらいものと見まして、自分は是だけの仕事をして居る、是だけのえらい人物であるからして、此位な惡い事はしても宜からう、禮儀に背くとか何とかいふけれども、自分のえらさを以てしたなれば、此位なことはしても宜らう、此の如き考を以て隨分ふしだらな不行儀なことをする者が、世

の中に少くないやうでございます、又其正反對でございまして、自分のやうなものは誠に數に足らぬものであつて、迚も惡い事をしたから、善い事をしたからと云つて、それ程眼に立つものでない、自分のやうな者が何をしたからと云つて、それ程世間の障りにもなるまいからして、何をしても構はない、それは自分が人の上に立つたならば行儀も愼まなければならぬけれども、自分が斯ういふ身分で居る間は、何をしても宜いといふやうに、自分を大變に卑下いたしまする點からして、又不謹愼な行をするといふやうな者があるやうでございます、それでは前のやうな自分を大變えらいものとして、大きいものとしてやるといふ方は御婦人方の中には、あまり認めないやうに思ひます、是は男子に多いのであつて、所謂當世風の成功をした人達の中には、往々さういふ考を以て自分の行儀などを亂す人があるやうに思はれます、併ながら後の方の、私のやうなものはどうせつまらない者といふやうな考からして、自分を餘り賤しく視、小さく見る所からして、自分を重んじないといふ方は、是は男子にもありますけれども、殊に御婦人方の方には往々免れないことでは無いかと思ひます、總て人間は自分を知るといふことが大變大切でございまして英吉利の言葉を申しますといふと「セルフ、アップレシエーション」自分を自分で評價する、自分はどの位の者である、自分はどういふ性質の者であるか、どれだけの力の者であるか、どれ程の仕事の出來る者であるかといふ自分の所謂自覺を致しまするといふことが、人に取つては大變大切なことゝ思ひます、私共には分りませぬが、色々學者先生方が仰しやることを聽いて見ますといふと、日本の婦人には自覺といふものが無つたのである、自分で自分を認めないで、無我夢中で生活をして居つたからして、自覺をしなければならぬといふことを、先生方が仰しやいますが、私共も眞にさういふことがあつたかと思ひます、どうか皆樣方も御自分で婦人といふものはどれだけの力があるか、婦人といふものはどういふものである

かといふことを御自覺になつて、皆様方の志して御居でなさる所に從つて進みますることを切に希望しまするのであります。

それで私は婦人の力といふものを認めますに付て、二つの方面に分けて御話をしやうと思ふのであります。併し是は大變に大きな問題でございまして、長く御話をしなければ出來ないことでありますからして今日は極簡單に申述べて置きますが、一つは社會の方面、一つは個人の方面、此二つに分けやうと思ひます社會に立つて婦人の力の○



あるといふことは此頃段々と日本でも認められて來て、實に今まで婦人の力といふものを、それ程に思はなかつた所の人達も驚く△

△程のことであります、其社會の力の中でも、第一に慈善の仕事などゝいふことは、唯今までの日本の社會に於ても、御婦人の力に俟つてことが多かつたのでありますが、今後は益々御婦人の力に依つて社會慈善の事業といふものを發展して來なければならぬ、此事は愛國婦人會のやうなものもありますが、又赤十字社の婦人部のやうなものもあります、其外育兒會であるとか、或は将校婦人會であるとか、色々な團體が

あつて、御婦人方が社會の慈善の爲に御盡しになつて居る、此事は實に喜ぶべきことで、益々此事柄を盛にして行かなければならぬ兎に角御婦人の力が社會の慈善といふことに向つて非常に有力のものであるといふことは爭ふべからざる事實であると思ひます、それからもう一つは此世の中の生産上の仕事、即ち實際の商賣をするとか、農業をするとか、總て婦人が働いて生産的の仕事を爲さることゝいふものが非常に力がある、今までも殊に農業の地方に於ては、婦人の働といふものが男子と何等の區別もなく、色々に生産の爲に盡されて居つたのでありますが、今後商業や工業や其他色々な仕事が段々發展して參りましたならば、其方面に向つて婦人方の力といふものが益々進んで參るのであります、私が今年の夏琉球に參りまして感じたのでありますが、琉球は皆さんが御承知になつて居るかも知れませぬが、實に婦人が能く働きます、何事をするのでも、殆ど婦人の手を藉らないものはない、尤も琉球でも農業地方に行きますといふと男子も女子も同じやうに働いて居りますが、其外の仕事に付ては殆ど女が働いて居る、私は此夏に參りましたのでありますが、殆ど日中は百三十度位の暑さの所である、そこで一般に勞働する婦人は裸足で、芭蕉布の着物を一枚着て、さうして二十貫も或はモットそれよりも重い位の物を頭の上に載せて、さうしてせつとせ働いて居る、如何にも婦人の擧動が活潑であつて、少しもぐづ〳〵して居る風が無い、私が如何にも琉球の婦人は活潑である、内地に是ほど歩くのでも何でも活潑の態度を取るものは少いと申しましたらば向ふに居る事務官が、それは此處では餘義なく活潑にするので、頭の上に物を載せて歩くから、若し途中で落すと困るから仕方がなく活潑にして居るのだと言ふて居りましたが頭に何にも載せない時でもお婆さんなどでも、杖も突かないで、サッサと歩いて居る、私はそれを見て大に感心しました、併し僅の間居たのでありますから、どれ丈琉球の國の成立に付て女の力があるかといふことを認めることは出來ませ

ぬけれども、其處に暫く居た宣教師などの話を聞いて見ますといふと、琉球の國は一體婦人で持つて居るので若し婦人が男子のやうに怠惰であり、又男子のやうに御酒を飲む……彼地では有名な泡盛といふものが出來まして、獨逸の人が麥酒を飲むやうな工合に泡盛を飲む、尤も獨逸では女まで麥酒を飲むが、琉球では男子の外婦人は酒を決して飲まない、尤も多くの中には飲む人もありませうけれども、大體婦人は飲まぬ、それだからして能く働く上に子孫に惡い遺傳をするといふやうなことも少くて、全く精神的にも物質的にも殆ど婦人の力で以て國が成立つて居るのであるといふことでありますが、私もそれを聞いて實際さうであらうと思ひまして、大に感じたのであります、併し又婦人が餘り働いて男子が遊んで居るといふことは、是は開けない野蠻の遺風であるといふことを人類學の上からして申しますが、それは實際さうでございませう、だから私は琉球の人にも勸めて、婦人の斯く働く如くに男子も此通りに働け、さうしたらば後れて居ると思つて居ることを取返して、寧ろ本州よりも盛な發達をすることが出來るであらうといふことを忠告して參つたのでありますが、其通りでございまして、此日本の內地に於ても皆樣方が御自身は勿論のこと、後來皆さんの御子さんや又女の子供を教育なさる上に付ても、婦人が生産をして働く力といふものは實に唯無形の上ばかりではない、有形の物を生産して行く、御金を殖し富を增して行く上に付ても非常の力のあるものだといふことをお教へになり、又御自身がそれ等のことを御實行になることをお勸めたいのであります。

それから社會上の禮儀、道德といふやうなものも、婦人に依つて維持されることが多い、男子といふものは綱の無い馬のやうなものであつて、非常な突飛な事をやるもので、兎角禮儀を亂したり、風俗習慣に背いて、それ等を破るといふことをやりますが、それ等を能く適當に維持して行くといふことは、昔から

御婦人方の力に俟つことが多いのであります、それ故に男子の方面に於て禮儀を失ふやうなことや、昔の良い風を變へて來るやうなことがあつても、婦人は能く之を整頓して之を保つて、男子が突飛なことを爲さぬやうにする力が十分ある、社會に於て、さういふ美はしい禮儀の存することゝいふものは、婦人の間に最も強く行はれて、男子を抑制することが出來るのであります、現に私共が書生の頃に外國の婦人から會話を敎はつて居つたことがありましたが、其頃は亂暴書生が澤山居まして、敎場などが非常に亂れて居る、其處に一人の外國の婦人がちやんと整然たる態度をして自分の身繕ひをしておとなしく、しとやかに這入つて來ますと、流石亂暴な書生……男の先生や何かに對しては、隨分無禮なことをしたり、ふしだらなことをして居るものが　肅然となつて仕舞つて、大變おとなしく敎授を受けるので、婦人の力といふものは偉大なものであるといふことを、私は其時に深く思つたのでありますが、萬事其通りでありまして、禮儀といふものは實に御婦人方が社會の秩序を維持して行つて下さることの出來る、大切な力であると思ひます。

それから又もう一つは趣味です、社會の趣味が段々墮落して來るといふことは、誰も憂へて居ることでございます、此趣味を高めて行つて良い趣味を維持して行くといふことも、御婦人方の力で十分出來ることであつて、人に動かされず御婦人自ら立派な趣味を持つて御居でなさるならば、男子の社會を動かし、一般の世の中を高めてゆくことも出來るのであります。

以上申しましたやうな社會の方面に付ては、四つの力が婦人に依つて大に顯はれるものであるといふことを私は信じます。

それから又一個人の方面に付きましては、昔の人が申しましたやうに、女は弱いけれども、併し母は強い、實に其通りです、全體の御婦人としてはそれは弱々しく見え、或は男子のやうに意志が強くないとか

感情に脆いとかいふこともありませうが、併しながら母の勢力となつたら非常に強いもので、其弱い中に嚴然として侵すべからざる所の威嚴もあれば、又さういふ威嚴といふものが現はれないでも、其心が子孫に影響し傳はるといふことは、大變に強い力である、どうか此點は殊に皆さんが深く御考へになつて、御自身銘々を重んじて下さることを私は希望するのであります。

それで婦人が一個人の影響として子孫に及ぼす力は身體の上と心の上との二つに分けることが出來る、身體の方に於ては生れる子供の弱いと強いといふことは、殆ど御母さんたる御婦人の身體の強いと弱いとに依るのであります。病氣の如きも遺傳する病氣と▲遺傳ではない胎内に居る時に傳染するのもあるといふことを、御醫者さんの方では申します、どつちにしても生れながらにして子供が持つて生れるといふ病氣は、殆ど母の方から來るのであります、それゆゑに子供の身體の弱いとか強いとか、所謂體質の如何といふことは、殆ど御母さんの身體の如何に依るのでありますから、御婦人自らが自分一人ではない、それが子々孫々に影響して、段々延いては國民の強弱に



も及ぶのであるといふことを御考へになつたらば、今頃からして皆さんが十分に御自身の御身體を御大切になさらなければならぬといふ御自覺が、深く御出來なさるだらうと思ふ、彼のナポレオンが何處かに行きまして、其土地の兵士の强弱如何といふことを知る爲に、お母さんを呼出す、お母さんで兵隊を組立てる積りかといふと、さうではない、それを整列さして檢分して見て、宜しと云つて返してやる、即ちお母さんが丈夫だといふと、此地の兵隊は强いといふことを知つたといふことでありますが、流石はナポレオンだけあつて、能く根本に氣を附けたのであらうと思ふ、實際お母さんが弱ければ子供も弱くなるものでありますから、身體に付ても十分御注意を願はしいのでありますが、最も大切なものは精神であります、子供の精神の如何といふことは多く母親に由る、女の子の方は父親から遺傳を受けることが多くあつて、父親の遺傳を受けた方が女の子は幸福である、日本の諺にも父親に似た女は仕合せである、母親に似た男の子は運が好いといふことを言ひます、是は意味のあることで、又多くの場合に意味のあることを認めて居るのであります、それは女の子が父親に似ますといふと、女の弱い所と男の剛健な强い所とを先づ調和した働が出來ますから、女に取つては誠に缺點も補はれるやうになる又男の子が母親に似るといふと丁度其反對で、男の餘り殺伐な所にお母さんのやさしい氣性を以て補はれるのであります、だからして昔からえらい人、殊に男として世の中に立つたえらい人といふものは、其お母さんがえらくなかつた人は無い、時に依ると子供が餘りえらいからして、お母さんを强ひてえらくしたのではないかと思はれるほどに、誰でも其人がえらいと、お母さんがえらいといふことが書いてある、併しそれは態とさうしたのではない、お母さんが實際えらかつたのである、二三の例を御話しますれば、日本の楠正行のお母さんであるとか、或はズット後になつて湯淺常山の御母さんであるとか支那の有名な孟子の御母さんであるとかいふものは

皆さんが能く女學校あたりでも話に御聞きになることでありますから、別段に申上げる必要は無いことでありますが、西洋に於てもさういふ例が澤山ある、例へば名高い昔の王樣であつて、さうして哲學者であつたマアカスオーレリアスなどゝいふ人は、是はお母さんがえらかつた、お母さんの遺傳に依つて王樣であつて哲學者になつた、それから亞細亞の英雄として有名な成吉思汗といふ人もお母さんが勇武な人であつて、其のお母さんの氣性を承けて、大英雄になつたといふことである、それから帖木兒といふ人は其後に出ましたが、此人も成吉思汗の母方の方の人であつて、矢張お母さんの感化に依つて、ア、いふえらい人になつた、其外文人などに例が多い。例へば有名な獨逸のゲーテ、それから英吉利のバアンス、バイロン、或はスコットであるとか、或はベンジョンソンであるとかいふやうな人は、皆お母さんが實に快活な人であつて、言葉が誠に明瞭で、人に交際をするのも殊に上手である、或はお母さんが文學の趣味も大變あつたとか、何かお母さんが子供に傳へ、又子供を感化するやうな特質があつた、殊にゲーテのお母さんなどゝいふものは、假令ゲーテが居なくても、唯一人の婦人として大變立派な人であつた、其人と會ふといふと、誰でも愉快な感じを起さない人は無いといふ風に交際が巧みであつて、趣味の廣い高い、しとやかな良き婦人であつた、それから又皆さんも教育をお受けなすつた近頃の教育を始めて實行しました所のペスタロッチといふ人は、是はお母さんばかりでない、其乳母が大變えらい人であつた、其二人の感化であゝいふ人が出來たのであります、それから獨逸の音樂家ベートーベン、是はお祖母さん（お母さんの側であります）が大變音樂の良く出來る人であつて、其系統を引いて、さうしてア、いふ音樂者になつたモッアルトなどゝいふ人もさうで、お母さんから小さい時に音樂などを教つた、さういふ工合に大概な人が皆母の遺傳か或は母の感化か、どつちかを受けない者は無い、皆さんも或はお讀みになつたでせうが、新

渡戸先生が隨想錄といふ書物を書かれた、其中にお母さんの寫眞に對する感じが述べてある、實に私共も涙を以て讀んだ、私も新渡戸さんと同じことであつて、母の事に付て考へるのでありますが、自分が婦人自らを敎へて見たし、ショッペンハウエルの如き婦人の缺點を擧げて、婦人は男子に及ばない。大きな子供のやうな者であるといふ惡口を書いた書を讀み、時に依ると斯ういふ事を敎へても解らず、或は解つたのか解らぬのか一向反響がなし、石地藏に敎へて居るやうでつまらないと思ふ時には、ショッペンハウエルのいふ樣に女は分らないのではないかといふ心が起ることがある、併し其時に私は私の母の事を考へるとさういふ心が去つて仕舞ふ、婦人はつまらない者でない、自分の尊敬して居る母は婦人ではないか。斯ういふ考が起つてそれを打消して仕舞ふのであります、其外色々私の友達などにお父さんから感化を受けた人も多くありますが、大概お母さんに依つて感化され、又お母さんを尊崇して居る人が多いのであります。

是等の實例から見ましても、又古人の事から考へて見ましても、母の子供殊に男子に及ぼす勢力といふものは大變に強いのでありますが、どうか皆さんが御自身で御自分の身を御謙遜なさるのは宜いけれども本當に女といふものは迚も男に叶はないものだ、迚も世の中でどれ程の仕事の出來るものでないつまらないものだといふ考をお持ちにならずして、十分に自分を重んじて自分は實に國と人とに對して大きな務があつて、而も其務といふものは立派に自分の力でやり遂げることの出來るものであるといふお考を以て、御勉强をなさるなり、或は御自身の御家庭の事を御執りになるなり又は子供をお育てになるなり、兎に角皆さんのお心の中に堅い信念といふものをお作りになつて、皆さんが自分の力は如何に強いものであるか、大きいものであるかといふことを自覺なさることを偏に希望いたします。

女四書の話

文學博士　重野安繹君

此女四書と云ふのは、茲に持つて出ました本があります、此本の話を一ト通り致して、夫から私は近頃歐羅巴へ參つて歸つて參りましたから、歐羅巴で見聞した所を少々お話しやうと思ひます、

先づ女四書のお話でありますが此書は支那の女教訓の書を四つ寄せまして女四書と名付けましたのでありまして、先づ女誡と申す書物が始めで、是は漢の曹大家と申す婦人の著はしたものであります、夫から女論語と申すもの、是れは唐の世の宋若照と云ふ婦人が作りましたものであります、其次は女孝經、是も同じく唐の代の陳邈の妻鄭氏の拵らへましたもので、其次は内訓と申して、明の成祖の妃、仁孝文皇后の著書であります、以上四つをば女四書と申して何れも皆女の學問道徳を修むるの書物であります、恰も男子に四書のあるが如く、女四書として、女の教訓をば詳しく説い



てあります、此女四書をば我國で和解致しました者が、此方に持つて參りましたもので、和解女四書と申すものが五冊あります、此和解致しました人は、京都の詩人でありまして、今の皇后陛下の御師匠、若江秋蘭と申す人であります、まだ　皇后陛下が一條家に居らせられました時分に一條家に御出入申して、此人が　皇后陛下をお育て申し、御教訓申したのであります、

此人が和解女四書を著はし、誰にでも讀めるやうに日本文で詳しく解を致しましたので、誠に解が能く出來て居ります、此の若江秋蘭は京都の人で、父は從四位若江量長と申す人の娘であります、姓は菅原名は薫子秋蘭は別號であります、同じ京都の岩垣月洲の門に教を受けまして、さうして學問した婦人で餘程行狀も正しい人であります、併しながら不幸にして終身時を得ませぬ、最も此人の三四十の時分には、彼の京都に勤王騷ぎがありまして、其勤王騷に係致しました爲に罪を得まして牢舍に居ました事があります夫も幸に助かりましたが、遂に終身時を得ず、不幸にして四十何歳で歿しました、其歿しました時には皇后陛下より厚く賜物などありまして、それで葬式など致しました事があります其死しました時分に、此書をば因州鳥取藩の安達清風に托しまして、何卒上木して貰らひたいと云ふ事でありまして、此安達清風といふのも勤王家でありましたが、不幸時を得ず、明治十七八年に死にました、此清風が囑托を受けまして、斯樣に上木致しました、是は大阪の山田榮造と申すが校合致しましたので、餘り澤山刷りませぬから世間には餘り傳りませぬ、ぢやに依つて私は此書を以つて參りまして、此通り假字が振つてありますから誰にでも讀めますから、御婦人方に御紹介申す次第であります、此安達清風と申すのは、私の舊學友でありまして、此書を上木致しまする時分に、私が序を書きました、是は明治十七年頃に大阪で上木致しましたので、私の序は甚拙文でありますが、此書の内容はなか〳〵好いものであります、

女解は有名な漢書を著はした班固の妹で、曹壽と云ふ人の妻となり曹大家と申した人であります、大家は大なる家と書きます、なか〳〵女でも學者であります、それで女誡の初めに婦人道德上の議論は充分盡してあります、

女論語の著者若照と云ふ婦人は、宋棻と云ふものの女で、德宗宮に入つて女官と爲り、女學士と稱し、終身嫁せず、五帝を歷て、而して長壽なりとあります、內訓は前にも申す通り、仁孝文皇后と云ふ皇后の著書で、此御方は中山王徐達の女で、成祖の母孝慈高皇后の敎を述べたとあります、初め淸の康熙年間に瑯琊王晋介と云ふ人が、女誡、女論語、內訓、女範の四つを纂して箋註を爲り、女四書と曰ひましたが、若江秋蘭が女範に代へるに女孝經を以つてして、和訓女四書と云ふを著したのであります、御承知の通り我國は、すべて男女共に支那の道德倫理を主として敎へたるものでありまして男では四書五經、女では女四書などは最も尊むべき書物であります、此和解女四書は明治十六七年頃に上木になつた者でありますが不幸にして世間に知られませぬから其故御吹聽申して置くのであります、此女四書の話は是で止めて置きまして是より私が此度歐羅巴に參りました御話を致します。

私は先づ日本に生れまして漢學者とか申す者であります、日本人でありますから國學のことも少々は心懸けて居ます、所が洋行といふことは八十一歲の此年になつて始めて致しました、さうして大凡半年掛りまして歸つて來ました、此洋行中に見聞したることに就ては、別けて男女の間の事はどういふものであらうか、其實蹟を一つ見たいといふ豫ての志でありました、隨分八十一歲までの間には、飜譯書位は見て居り、又あちらに參つた人の話したのも澤山承つて居ります、即ち耳學問といふやうなものは此長い年數の間、隨分人並に聞いて居りますが、併し物は實見をせぬければ本當に心に會得は出來ないものでありま

すから、それ故必ず洋行をしやうと豫て思うて居りましたが其宿志を當年漸く果しました、參つて見まするど成程文明國と稱しまする丈に何も彼も揃うて立派なことである、是は申すに及びませぬ、先づ第一に建築、道路、其他商賈の繁榮することやら、船、車、悉く眼を驚かすものばかりであります、然る所が唯我邦で謂ふ倫理道德といふことに付ては隨分批難すべき所が澤山あると思ひます、第一に男女の間殊に其批難もすべき所が多い、それはなぜと申すに、先づ女權の重過ぎるといふことは、どうも甚しい權衡を失つて居る、是は私が申さずとも近頃では段々女權の重過ぎるといふことは、皆人も心得て居るやうであります又向ふでも矢張り女權は重過ぎるといふ考のやうに察せられます、仕方なく啻に女權を重くすることに注意いたしましたからして、其弊茲に至りました、全體西洋は御承知の如く、初から文明開化ではありませぬ、優勝劣敗、初は隨分野蠻であつた筋に見えます、其野蠻の時分には何處でも同じこと、女をした丶かに蔑すものである、それを敎法などで以てどうも是ではいかぬといふことで、そこで女權を追々と重くして、其弊今日に至つたので、是は男女の間、それと此上下の間も同樣、初め野蠻の時分には下民をした丶かに窘めましたもので、それがどうも敎法で以て天から見ると、同一の人間に上下のある筈は無いといふことで、そこで其敎に依つて上下の間の差別の無いやうに成るべくしやうといふ其主義が募つて今日社會主義とか、無君主、無政府などゝいふことになつて、さうして勞働者が跋扈するやら、何やら至る處の國も皆之が爲に困つて居る、男女も上下も皆同じ趣意で、さうなつて來ましたが、是は勢の然らしむる所である、ぢやに依つて、私は誠にどうも困つたものであると思つて、何處の政府の話を聞いても皆さういふ譯、爆烈彈が始まるやら何やら、勞働者が引連れて罷業をするやら何やら、それはひどいことになつた、そこで女權も矢張同じこと、先づ女が議員にならうといふので、即ち當年倫敦でも其騷があつて、新聞紙

などにも見えて居て通りであります、之が爲には捕縛されたなど丶いふ女が澤山ある、さういふことが始終絶えませぬ。

そこで私などが參つた時分に芝居を見に行きました、其話を一つちよつと御話し申すと、倫敦で私は菊池男爵、此二人がこちらから參列に參つた者であります、菊池男爵は倫敦に昨年の冬から參つて、私よりか先に行つた、そこで私は後から四五月頃に參つたのであります、其時にもう公務も果てましたから芝居見に一緒に參つた、其芝居が斯樣な芝居、或所の金持、詰り身分も賤しからぬマー上等の人、其娘が兄弟ある、男の子が無い、そこで或所から、是も豪族の金持にして、身分も華族あたりになつて居る人であるそれが婿になつた、尤も女子の方の國に參つて、さうして其所で夫婦結婚といふことになつた、さうして子供が二三人出來ました、さうすると其女といふが誠に御轉婆者であつて、自由勝手に働く、夫が偶には叱言などを言うても聞入れぬ、親に言はして親から異見をしても聞かない、又叔父やら其他夫の朋輩などといふ者から言うしても、誰が言うても聞かない、唯もう自由勝手にお轉婆を働いて居る、子供を二三人持つたが、其子供は皆媼婆がどつさりあつて、それに打任せて、さうして先づあちらにブラリ、こちらにブラリと歩いて、朋輩などを連合つて行くといふやうなことで、一向どうも子供の教訓、唯今鳩山君が御演説になつたる母の務をちつともしない、實にどうも困つたものなか〳〵利巧な娘ではあつたけれども唯我儘勝手で仕方がない、そこでもう大概夫も呆れ果てた、併ながら子供も出來て居ること、殊に結婚しては離縁をするなど丶いふことは彼地では悉くどうも忌むこと、又出來ないといふ位になつて居るから、そこで此敎法の爲に辛抱をせねばならぬといふので、餘程虫を耐へて居つたけれども、唯今申す通りのことで、殊に又骨牌を弄ぶことが甚しい、いつも朋輩を寄せて骨牌ばかりして家で遊んで居る、出る時には朋

輩を連れてわっちにも遊山、こっちにも遊山といふので仕方がない、そこで能く〳〵のことで、其夫も仕方がなくなつて、自分は故郷の方へ歸ると言ひ出した、故郷へお歸りなさるならお歸りになつても宜しいと、頗と平氣である、初は威し同樣に言ふたけれども、なか〳〵威されぬから、最早結局手を盡して、もう仕方がないといふ時になつてから、其夫が大變な長い演説をして聞かせました、それは長い忠告演説でありました、我々共は一向英語などは知らない者だから、何を言ふか解りはしないが、菊池男爵は英學者であるから一つ〳〵能く解る、要な所などは此處は斯うだ、あゝだといふて聞かせる、さうすると先づ趣意をアヽさうであつたかと思うて聞いて居ました、所が其長い演説に於て結局の所になると眼を上げて……あちらの人が怒る時には眼を上にやつて、耶蘇の十字架に上つた時のやうに、斯ういふ風に（博士は其形容を爲し）上の方ばかりを見る、まるで眼球の下は白い、十字架に上る時に天を見た、あれが不思議に西洋の男女には皆あの眼が付く、美人などの繪を見て御覽なさい、皆さうだ、其大變な眼をして居つた、それからもう歸るといふて袖を拂つて立つと――日本で言へば――西洋では袖は無いけれども――立たうとすると、其處になつて先づ女房が下に泣沈んで居つたが、もう袖を拂つて立つといふ時になると、ズットト下から上つて來て、夫の肩に手を打懸けてさうして止めた、どうか私を連れて行つて呉れ、もう今までの御意見を十分に用ひます、御一緒に故郷に連れて行つて下さいと云つて泣付いて、さうして接吻した、そこで夫も大變にどうも喜んで、さうしてアヽさうか、それでは一緒に行かうといふて穩になる、其芝居それは今申す通り英國は女權が甚だ重きに失して、さういふ御轉婆者などが追々現はれるからして、時の敎の爲に此劇を拵へて、先達て佛蘭西でもやつたといふやうなと、それは見ませぬが何とかいふ名優がやつたと申すこと、後から承はれば、さういふ芝居などをして今の女權の重過ぎたのをば矯めることゝ見え

る、マー芝居といふものは日本の芝居も同様、皆時の弊を矯める爲に作つた芝居が多いものである、所謂こちらで世話事と申す芝居の作りはさういふことが多いに依つて、教訓の爲に其劇を演じたものと見えまするが外の所でも斯ういふ趣意で矢張少々宛は作つて居るけれども、維納では斯ういふ鹽梅にした、巴里では斯ういふ鹽梅にした、獨逸では斯ういふ鹽梅にしたといふやうに皆少々宛の異同がある、此話は私が實見のことであり、私ばかりでない菊池大麓氏と共に見ました大麓氏と私とは當年今申す通り一緒に參つてあちらでアカデミー會に



列しましたが、全體は菊池大麓といふ人はなか〳〵眞面目な人でありますけれども、芝居が好で、私が芝居が好て、それで故團十▲

▲郎や菊五郎などの時分には、休暇毎に、或は初は新富座、後に歌舞伎座、いつでも一緒に參り居つた、さうして芝居道樂の仲間でありますからして不思議に今度は海外に行つて其芝居を見などゝいふのは、面白いことであると云つて、兩人で話し合つて見たのであります。

兎角倫理の道といふものは誠に萬古不易であつて、幸に我邦は先づさういふ弊がありませぬ、併ながら

隨分電車などに乘つて居りまするると見掛けますが、女には席を讓るといふことゝ見えまして、男が席を讓りますと、一禮もせずに傲然と構へて席に著きます婦人などを見受けます、隨分一禮位はしても宜かりさうなものと思ふ、外國で此老人が、髯の眞白な者が、彼地は女が大切だと聞いて居りますから、席などは女を先に讓つてやりますが、それでも平氣で禮も何にもしませぬ、當り前のやうにして此老人などが席を讓つたのをズン〳〵行く、甚だ彼地では腹の立つことがありますけれども致方がない、土地の風俗で餘義なく屈して居らずばならぬことになる、どうも仕樣がない、併ながらあちらの方に長く居る日本の人などから話を聞きますと、田舍に行つて見ると妙ぢやと斯う言ふ、何が妙であるといふと、田舍の中以上の財產家などは女房を連れて都の方に出て、さうして歸つて來る、都ではマー謂はゞ女房の靴を取つてやるといふ位は常にするが、田舍に歸つた時には足を出して靴をば女房に取らせる、それでアレは飾りだ、都に出た時には飾りでさういふことをして居るが、田舍では矢張さういふ風俗があつて、女に男が靴を取らしたり何かする、都の方で見たのとはまるで違ふ、あれは虛飾だなどゝ言つて話して居ますが、それが事實か何かは解りませぬが私はさういふ話も二三人から聞いて、何れも皆日本から行つて居る人々でありまして、長く居るのでありますから田舍を廻つて、時々田舍の風俗を見ると矢張り男尊女卑である、あれは今の都の飾り物だと、斯ういふて嘲つて居ります、成程男女の別といふものは自然のものでありまして、それを枉げてやればこそ女尊男卑になつて行きませうが、自然に任せて置けば矢張り男女は尊卑の自らあるものであると思ひます、それで先刻鳩山君も亦其前のお方も御話のあつた通り、道德といふものは其自然の道に依つて拵へたものでありまするから、若しこれを自然の道に反して枉げてやるといふことになると矯過て、却て惡い事になる物でありますから、餘り又重過ぎるも善し惡しといふ事であらうと存じます。



佐々木信綱先生選

兼題 和歌 水鳥

天　伊賀　佐々木すゞ子

水災のおもかげすごきにはか江に
　三ッ四ッ浮ぶかもめさびしも

評　水災後のさびしき面影うかびいでて巻中の白眉たり。俄江の造語も無理ならずしてよし。

地　下野　井上尚子

旅僧のかげとほざかる江の夕
　水とりなきてあしの花ちる

評　題の水鳥はやゝうすけれど、江畔の蕭寥寫しいでてよし。

人　土佐　秋月廣江子

かゝる夜を呪ひの人やたゞずめる
　通夜堂ちかく水とり鳴くも

評　物すごさ胸をおそふ心地す。さるかたにすぐれたり

秀逸

東京　林艶子

水鳥は一度にたちぬ公達等
　ふためきし様の目にも浮びて

陸前　大槻初音子

水鳥のむれてあそべる心には
　ふちせあるよとおもはざるらん

常陸　岡田萬子

夜を寒みなやめる母の伽しつゝ
　聞けば身にしむ水鳥の聲

越後　松永繁子

渡守呼ぶ人絶えてあしかげの
草屋淋しき水鳥の聲
埼玉 横田政子

土大根あらひ捨たる畑川を
ふたゝびにごすかもの村鳥
肥後 友永常子

夜あらしの吹ちらしたるもみぢ葉と
ともにうかべる池の水鳥
肥後 友永章子

玉霰まどうつ音にたぐひ來て
そゝろにさむし水鳥のこゑ
秋田 細矢はる子

つはものを追ひし昔をしのばせて
はねおとたかくみづ鳥のとぶ
伯耆 錦織幸子

枯あしのしげみをいでゝ一群は
江の朝もやに遊ぶみづ鳥
大連 武村留意子

芦のはのかれにしなかにたゞよひて
青羽めにたつ鴨のうきふね
東京 原三幸子

朝日さす池のこほりのうちとけて
むつびあそべる水とりのこゑ
東京 松本まつ子

みはかしをつるぎの池の風さえて
霜よをわぶるみづとりのこゑ
東京 河合清子

朝日さす池の芦はらしもとけて
おりたつ鴨のこゑさわぐなり
清國 富成梓子

からころもきつゝなれても水鳥の
こゑこほる夜は故さとおもほゆ
東京 松原みな子

むつまじくをし遊ぶなりうすらひは
朝日にとけし神のみいけに
東京 服部彌惠子

つぶてうつうなゐもしばしたゝずみぬ
池面の鳥のむつましさみて

甲

○ 東京 平塚白百合子

舟の燈にそゞろなきよる水鳥のつばさむげにあられふるなり

○ 東京 堤いく子

すさましく照る月ふみて氷る江に霜夜もともになくかなしどり

○ 山口 村上操子

水のうへにうきに我世をわたれるはこの鳥とのみ誰か見るらむ

○ 松山 上原のぶ子

つゝの音の聞えぬ池はみづとりも人になれつゝさわかざりけり

○ 須磨 とみ子

親も子もたのしかるらん水鳥のなみのまに〳〵ながれ遊びつ

○ 横須賀 柏原みな子

風さわぐ汀の松に月落ちて曉さむく鴨なきしきる

○ 福井 牧かれ子

見るだにもさむきあさけのうすらひになれてねむれる池のをし哉

○ 新潟 岩本芳子

朝一里山寺とへは僧はあらず庭のみ池にかもぞ遊べる

○ 東京 青木たま子

霜の床氷のふすまなか〳〵にかされてさむきをしの羽衣

○ 東京 岡田ちよ子

霜さやくあしの枯葉をふく風になみたちさわぎなくかもめとぶ

○ 甲府 名取正代子

夜もすから風と浪とにさわがれて立居さためず鴨ぞなくなる

○ 甲府 風間千代子

風寒みおのが羽風のさゆる夜はをしのつがひも聲たてゝなく

○ 東京 白井春子

くちかゝる海人のすて舟水鳥の折々やすむかたとなるらん

○ 岩代 菅野和子

さつをらも銃をれむる御幸沼ゆめに浮きつゝ鴛鴦のむれ

○ 神奈川 山本久代子

秋晴や薄紫の竹生島かすめ〳〵て水鳥の飛ぶ

○ 神奈川 山本綾子

水鳥は眞珠色なす翼のべて霜を拂ひて水かゞみしぬ

○ 美濃 芳翠敏子

朝月は葦の葉かげにかたむきて雛啼きやぶる水鳥のむれ

○ 埼玉 横田秋子

水鳥のつらゝの床や寒からん廻の月に一聲ぞなく

○ 埼玉 横田やな子

角田川堤のそひの渡り口船棹おけは鴨ぞなくなる

○ 韓國 原野みき子

古沼の青蘆枯れて水よどみ水鳥啼きぬしのゝめ時を

○ 東京 中村千代子

霜さゆる冬の夜寒に水鳥のうきねの床やわびしかるらん

○ 筑前 島村作子

なには江のあしまの月にかげさえてむすばぬ霜をはらふ水鳥

○ 神奈川 鈴木まつ子

夕まぐれみそれふりきて池水にあそべるをしをおもひやるかな

○ 旭川 佐藤央子

まこもかるほり江にあそぶ水鳥のこゑうちさわくつゝのひゞきに

○ 東京 岩谷淺子

睦しき鴛鴦のふすまの羽がきにも夕の霜やおきあまりけん

○ 伯耆 錦織千代子

ひまもなき足にあた波しらずして雪ふる池に鴛鴦むづましき

われもまたうきたるよをは過す身のみつ鳥のみをよそにやは見む　○　大阪　水村春江子

山風にねさめてきけは寒き夜をあかしかねてや水鳥のなく　○　和歌山　植本崇子

かづきするかたなきまでにこほるらむよるかの池にさわぐ水鳥　○　東京　吉岡邕子

朝しものこほる蘆まにうちとけてつはさならぶる池のみつとり　○　東京　五十嵐清子

おきまさるつはさの霜やはらふらんよふかくさわく水鳥のこゑ　○　東京　西村直子

蘆のはる霜風さえてみつとりの　あさるかたなくこほるいけみつ　○　東京　小島榮子

蘆鴨のはおと高くもきこゆなりこほりやとちしふじ川の水　○　東京　高野元子

遠くなりちかくなるをのうらなみに一むらめかもむれ立にけり　○　奈良　栗山俊子

朝つく日影さす池の中島に睦つましげにも眠るをし鳥　○　東京　佐々木蓉子

さよふけて波もこほらむ蘆かげにゆめを浮べて鴨ぞ眠れる　○　美濃　落合かぎ子

我門のうつきの垣のさゝ流れ水鳥あそぶ夕月夜かな　○　岐阜　好文　さかゑ子

うき草の花さく方にみづとりのともよびかはすこゑしきるなり　○　佐賀　尾方やゑ子

茶はひえて炭はつきたる冬の夜を吹雪とだえて水鳥のなく　○　岩代　岸野[illegible]子

水鳥のなくこゑさびし妹のひつぎをおくる川添の道　○　岩代　岸野つれ子

○　神奈川　白露子

旅まくらゆめとも氷れるさよなかをなく音さびしき池の水鳥　○　名古屋　不破きみ子

紅葉なす雙手をあげて幼兒がよびなす方へ浮ふ水鳥　○　東京　服部光子

玲瓏と月冴え渡る池の面に羽音靜かに水鳥のなく　○　東京　神谷てる子

紅葉ちる池のあし間の水鳥のしもうちはらふ音のさむけき

乙

水鳥のうきねの夢やさましけん夜寒の床になくねきこゆる　○　大阪　生田なみ子

ふる雪に草のあとを尋ぬれば遠き渡りに水鳥のなく　○　磐城　木幡きよ子

川そひの靜けき岸に年をへて心清くも世を渡るらむ　○　長野　北澤千枝子

いかばかり浮寝の床の寒からむ夜をこめてなく鴛鴦の聲　○　東京　林　環子

あつき日もいつすぎにしかふじ川のあと忍ばるゝ水鳥の聲　○　神奈川　吉田はな子

おのがすむ水もこほれる冬としもしらぬかほなる鳥もありけり　○　松山　田村多豆子

水鳥の群ゐるなみもしづかにて松ふく音もたのしかりけり　○　西須磨　繁子

よもすがらをしのむづみにいけみづの氷のとこやぬるむなるらむ　○　神奈川　中島兆子

小波の氷りもえせぬ池の面仲睦ましく遊ぶ水鳥　○　横須賀　高橋つれ子

○　相模　杉森とよ子

睦しく結び合ひたろ水の上水離れてぞ水鳥の聲

○　豐橋　廣名矢野子

人とはぬ野中の庵に小夜ふけて月すむ川に水鳥の聲

○　秋田　古瀬りく子

河きしにむれゐるかもを山かせのおろすこのはと思ひけるかな

○　秋田　古瀬惟子

かり人にうちもらされて水とりのしばしむれたつおときこゆなり

○　岐阜　長濱關子

岩がれにすてしわらじに霜見えてさむけき朝を水鳥のなく

○　美濃　波傍島みゆき子

池岸の手植の鉢の雪とけて水鳥あそぶ冬日和かな

○　廣島　鈴森きみ子

ながめ居し水面に浮ぶ月影をうごかしけりな水鳥おちて

○　東京　高宮安子

角田川波のまに／＼都鳥おもふ事なき樣にもあるかな

○　陸前　前田河千年子

水鳥のたわますあさるさまみても己かなりはひはげまんものを

○　陸前　前田洲みすゞ子

水鳥のあかき休めすあさろをもあはれ此世のつとめなるらん



○　東京　土田八重子

小夜ふけて鳴く聲寒し水鳥の翼に霜やおかむと思へば

○　神戸　今西操子

小波の寄るにまかする池の面は水鳥さわぎ月くだけつゝ

○　奈良　栗山たか子

月かげも入江のあしにしも見えて明がたさむくかもめなくなる

○　美濃　目島細子

すげ小笠稲穂かろ子の一群れを月に送りて水鳥のなく

○　美濃　長縄みの子

水の面にかろげに浮ぶ水鳥もうきみはおなじ世渡りの道

○　佐賀　尾方綾子

かゝみなす池の面白く見ゆるかなさゞなみたてゝあそぶみつとり

○　神戸　足立あさ子

をし鳥の玉藻の床のうきまくら思ひも深きこやの池水

○　神戸　足立ゑい子

おく霜を羽風に拂ふ水鳥のあたりや波の立ちさわぐらむ

○　神戸　すい子

帆かけふれ行くともしらぬ海原に白きを見れは水鳥のたつ

兼題和歌 看護婦

天

東京　奈良八重子

秋ゆけどいたつき療えずはや三月
　みとれる君を姉よと呼びぬ

評　やさしき看護婦の情言外にあふれたり

地

横須賀　柏原みな子

來と言へば來ぬを祈ると君は言ふ
　笑みてわかるゝ病院のかど

評　退院する患者門に送る看護婦面わに笑滿ちて日の光もうらゝかなり。

人

美濃　傍島みゆき子

やみ人の枕べ近く倚そひて
　みとれる夜半をかりの遑なく

評　看護婦の意はやゝ薄けれど看護婦の心になりてよめるなるへし初句いたつきのをやみんのと改む。

秀逸

越後　松永しげ子

小春日にかへり咲く花小さきを
　やむ人助け嬉しげに見る

甲府　名取正代子

國の爲めつくすいさをはみとり女も
　ますらたけ雄に劣るべしやは

兵庫　梶原京子

み軍にてきずおひたるますら夫を
　みとりする身もわが君のため

常陸　岡田萬子

たらちねの親にあらねどかくばかり
　あつき心は忘れかねつも

大阪　木村春江子

絶えぬべき玉緒さへやつなぐらん
　眞心こめしほそきかひなに

清國　富城梓子

身をすてゝつくすまことはもろ人の
　いのちのはゝとなりにけるかな
東京　服部彌恵子

病める身にやさしき君の慰めは
　天つ御神の使なるらむ
東京　服部光子

いたつきの身をみとります其君は
　神のつかひと仰ぎけるかな
東京　神谷てる子

女郎花はなにあふるゝまごゝろに
　まさるくすりはわらじとぞ思ふ

甲

○病人を赤き心といたはりてちりにもそみぬ白衣の君　東京　平塚白百合子

○看護婦の心つくしは片糸の苦るしき中に笑める苦しさ　磐城　木幡きよ子

○心こめてまくや繃帯白妙の心の色ぞ世にもたふとき　長野　北澤千枝子

○敵味方へだてもやらで看護るなる神の心よ看護婦のとも　東京　林[illegible]子

○やむ人のれいきうかゞび窓もるゝ月にましろき袖をぬらしつ　東京　堤いく子

○やまひたしみとる少女のふるまひは薬の外のくすりなりけり　松山　上原のぶ子

○やまひたしいやす醫師の外にまたくすしくみとる人もありけり　松山　田村多豆子

(秀)白布にあがきをまきこめてみくにゝつくす乙女子ゆかし　福井　牧かれ子

○やむ人のこゝろ／＼をくみわけてみとりする身のいともやさしき　陸前　大槻初音子

○にこやかに愛てたゝへつゝあまくだる女神とも見んみとりする人　西須磨　繁子

○若き身を國にさゝけてやむ人にまことをつくす女うれしも　甲府　風間千代子

○眞心な白衣につゝむみとりめは誠の愛の天使なりけり　横須賀　高橋つれ子

○醫師去りて閨は一入靜りぬ針の運びも我責めにして　相模　杉義とよ子

○花と散る君がいまはにみとり女の涙そゝがむ露の如くに　東京　よしの子

○足引のやまひ室のいく薬ふかきや妹がこゝろなるらん　埼玉　横田すま子

○なまぐさき風しげく吹く小さき家に傷者いたはる女雄々しや　神奈川　山本綾子

○もだえつゝ水乞はるれどすゝめ得ず此の身につらし病院の窓　美濃　芳賀敏子

○病む人にくすりまゐらす白衣愛の泉はむれにわくなれ　韓國　原野みき子

○　肥後　友永常子
武士がきついたはりてをとめ子もみ國につくす道はありけり

○　肥後　友永章子
髪のみどりがほのくれなゐそひにけりこの姫松のつゆのなさけに

○　秋田　細矢はる子
しろたへの衣ながらも病人にあかきこゝろを盡しけ

○　陸前　前田河千年子
まこゝろを衣のいろにあらはしてつとむるをとめたのもしき哉

○　東京　岡田ちよ子
やさしくも共に軍の庭に出て深手ねきらふ女郎花かな

○　伯耆　錦織幸子
敵味方おなしなさけの眞ごゝろに命さゝげてみとる男々しさ

○　伯耆　錦織よし子
あたし野に今はたゝゆる玉の緒を涙に看護る白衣の女神

○　東京　吉田龜子
身のやまひすが〳〵しくも成にけりかしつき人のねもころにして

○　東京　原三幸子
病人のしつむこゝろも浮たゝむかしきをづとめねもころにして

○　東京　西村直子
人のみのやまひをいやす殿にきていのちとたのむかしつきをとめ

○　神戸　今西操子
たをやめがつくす誠のみとりこそくすしのほかの寶なるらん

○　東京　佐々木露子
病人は天使の愛の御心に看護せられて安く寐れる

○　佐賀　尼方綾子
たふとしやこれの女のまこゝろは病にし人のたからなりけり

○　佐賀　尼方八重子
みいくさにおのがかよわき身をすてゝ御國につくすこれの女子

○　伊賀　佐々木いすゝ子
百萬の敵におそれぬ猛將も病みては君のなさけにそなく

○　名古屋　不破きみ子
かくてこそ病いゆらめまめやかにやさしくみとる天つみつかひ

乙

○　大阪　生田奈美子
もの丶ふの深きいたでもいゆるらん朝な夕なの君がみとりに

○　東京　林環子
看護するをみなに病める人は皆とく癒ゆる世となりにける哉

○　神奈川　吉田はな子
やみまさる少女のすがたながめつゝあすとは知らて看護せしかな

○　山口　村上操子
あだなしも敵とはなさてみとりするをみなも國の爲とをもへは

○　豐橋　廣名矢野子
あれきみは召されていまは北の野に赤き十字の帽いたゝける

○　横須賀　渡邊比佐子
事ある日國のためとてやさしくも清き心を身に纒ひつ

○　東京　よし子
白妙の衣つけたる看護婦はあまつ女神の化身なるらん

○　岩代　宮野和子
たらちねのなさけを思ふ看護婦に別れぞつらき病癒へし身は

○　和田　古瀬りく子
あたみかたいたてになやむ武士の中もあはれとへたてざりけり

○　秋田　古瀬惟子
戦ひの庭にもいてゝなゝしきはよきくすしにもいやまさりけり

○　神奈川　山本久代子
現ともなくて唱ふる君が代に袖しぼりつゝみとりするなり

○白妙の衣につゝむ赤心を幸なき人に惠みけるかな　東京　中村千代子

○水もはき藥もはきてくるしめる君が顔打ちながめつゝ　美濃　長濱關子

○やまひ人くすしの道の外に又心ふかくもつくす妹かな　埼玉　横田秋子

○やむ人のこゝろにつとひて朝な夕なくすしのみちをつくす妹かな　埼玉　横田やな子

○紅の野邊ながよわきみうでもていたてに病む武士を負ひ行く　和歌山　植木榮子

○御胸の十字の色を心にて幸なき子ともすくひますらん　土佐　秋月廣江子

○こゝろこめて戰邊にたつたをやめをなやめる人の女神とや見ん　廣島　鈴森きみ子

○やめる身はみとる人こそちから草なさけも清き衣にもみゆ　陸前　前田河みさを子

○身はすてゝやまうとみとる少女子のあかき心いたのまるゝかな　筑前　島村作子

○いたつきもいへてうれしく思ふかななさけもあつき君のみとりに　旭川　佐藤央子

○とりとめし人の玉のをいくはくぞ此わさなきの開け初めて　東京　岩谷淺子

○やさうでにますら武夫の國の緒もつなぎとめけり大和なでしこ　伯耆　錦織千代子

○嬉しくてうれしくはなし病いへて白衣の君と別るゝこよひ　東京　土田八重子

○病ふしてなやめる人もねもころにかしづくをとめいとながるらむ　大連　武村留意子

東京　五十嵐清子

○れも頃に人を見とれば病ふしてなやめる身にもたのもしきかな　東京　小島榮子

○みとりする人のいたはりふかければやまひになやむうき事もなし　東京　高野元子

○長きよもいねずおきゐて病人をいたはりまもるをとめ子やたれ　奈良　栗山たか子

○國のため人のためとてとつ國にゆくたをやめの心をゝしも　奈良　栗山俊子

○いたてせしますらたけをゝみとりしてあかき心をつくすたをやめ　東京　青山たま子

○さま〲に女のわざはありつれとみとりのみちぞくしくこそあれ　下野　井上倫子

○あたゝかきなさけに細き腕もていざやつくさん我くにのため　神奈川　中島兆子

○ものゝふの病ひをみとるわざもまたわが國をもるめの子とそしれ　神戸　足立あさ子

○手に馴しことゞはいへと吾妹子がみとりの業そかしこかりける　神戸　足立ゑい子

○ねもごろに病ひの床にかしづかん情けは人の爲めにあらねば　岩代　岸野常子

○看護婦のすがたけだかし久方の天津女神を見るこゝちして　東京　松原岑子

○病める人をみなはらからの心にていとまめやかに護るたをやめ

短文

文學士鹽井雨江先生選

天

離別

東京府　奈良八重子

檜の林を出ると友も妾も無言のまゝで、音も靜かないさゝ小川に沿うて道をとつた。

手も鼻も缺けた石地藏が、何十年といふ永い歷史をその冷たい頭に秘めて、慈愛の相貌貴く、色の褪せた涎懸をかけて、肩の上や膝の上には小供の惡戲であらう、小石を載せたまゝ、秋の夕日をあびて、立つてをるのを見て暫く行くと、道はまた林に入つた。

かけすのけたゝましい叫び聲がして、美しい藍色の羽が梢を縫うて彼方の杉にかくれると、栗を手にもつた、六つ位を頭に五六人の女の子が、何事かのゝしりながら杉の下道からあらはれた。

氣味の惡い杉林を通りぬけると、二間ばかりの小川に、丸太の危げな橋がかゝつて、川下には水車小屋が一軒、大きな音を響かせて、この靜かな森の夕暮れの空氣を破つてをる、取り殘された庭の柿の實に、夕日がさして、ひとしほ赤く見える下に、今し手拭を被つた小娘が、家鴨に餌を與へてゐる。

面白い畵題だと思ひながら土堤を下ると、あやしげな渡守の小屋が蘆の中から見える。

『渡らつしやるかね』と渡守の老爺の問ひに、たゞうなづいたのみで、岸につないである小舟に乘つた。

『此處で御別れに致しませうね、花ちやん。送つていたゞいて濟まなかつたわ、何うぞ皆さんにも宜しく。』

『妾何んだか別れるのが嫌やよ。』

『でも何處まで行つても同じだわ。』

『さうね。でわ、御別れに致しませう。又いらつしやいな。』

『あゝ有難う。』

こんな會話が、二人の間に繰り返へされてゐる中に、舟はゆら〳〵と岸を離れて、中流に出た。

今まで輝いてをつた入日も、今を名殘りと、紫の晴衣を着た箱根山の北に沈んで、薄紫に染められた富嶽の頂から、湧き出したやうな雲が、樺色に

かゞやいてをる。

（雨評）可憐なる別れの情景描き來たりて面白く、維も氣もちよく整ひたる文に候かな。

地

あゝ妾が父　　埼玉　高橋よし子

お前の御母樣は、口付きは誰れに、眼付き鼻付きは誰れに似て　髮は黑く、性質は温順で、よい御母樣であつたが、お前が四才の時に死つたのだと、以前寢物語に父から聞いたのであつた。そを物語つた人、あゝ妾が父は、思へば淚の泉　湧きいで、語りいづるも心苦しけれど、停車場の驛員であつた父は、例の通り朝の六時にお出勤なされて、お務めせられてをられたが、其日は、如何なる刧風の吹き荒んだ日であつたらう。猛虎の勢に進み來し機關車は、レールに跌いて倒れた父を無慘にも粉微塵にしてしまつた。之れを思ふ度每に、妾が膓は千千に斷たるゝ心地である。嗚呼、妾の如き不幸者は、此の世に澤山とあるまじ。女子として最も慕はしき母上に別れ、今亦掛け替へ無き父上を失ふ。

つい此の間の事であつた。妾が外出せんとする妾を、つく〴〵と見られて、御母樣でも居つたなら、どんなに喜ぶであらうと仰せられた、しかも母上の任務まで兼おび給ひて、わが身を斯くまでにせられし父上は、今何處の空に彷徨うて居らるゝであらう。お務めの折りは、妾を祖母樣に托し、歸れば掌上の玉と愛で玉ひ、愛と情に生ひ立てば、不自由乍らも妾を學の窓に入れ、且つ、女の業の末々まで授けさせられし有難さ、此の御恩を返さんは、いざ是れよりと思ひきや、無念の滊車に、之が父かと思ふまで、五尺の體を刻まれんとは。折れた手挫けた足を見た時の自分は、ブラットホームの人山の中前後も知らず泣き伏してしまつた。思へば、罪深き妾哉。天にも地にも只一人の父上を、末後の水を捧げずに亡ひし事の無情さよ。父上よ、死んでおはすなら、なぜ妾も伴つて下さらぬか。父上を奪つた惡魅よなぜ自分を殺さなかつたか。切めて一日一時たりとも、再び生かし參らせて、御膝下に侍かんに、噫。

（雨評）眞情のこもりたる文、愛すべし。父の詞によりては、亡き母の事を語たり、母を語りでは、母亡かりし後の父の恩義の深きを語たりて、父を悲しむの情を深く語たり來たれる文の組み立て方も面白し。

人

暮秋　東京　神田けい子

薄暗い杉の下道、半分赭色になつた草を踏んで行くと、右の方は谷になつてる、秋も早暮れに近いヒユーヒユーと木の間を傳つて泌みいる風に、暮れ行く秋の恨みを訴ふるやうに、尾花かしどろもどろに亂れる。枯れた萩や桔梗の高い中を、かさ〳〵と音さして、谷の方へ下りて見ると、鏡の樣に澄んだ、かなり大きい池、落葉か處々に浮いてる。前の山の黑ずんだ杉の梢を、はつきり水の面に畫いて。深さうに見える。聞き馴れぬ聲の小鳥が、池の面を掠めて飛んで行つた方を眺めた時、さら〳〵と汀に聲があつて、脊丈程の枯れかゝつた葦が靡くと見れば、水晶の玉を蒔いたやうに、葉末の露がはら〳〵と袖に溢れる。池にたゝんだ岡の杉の形が亂れる。後の山の方を見ると、丘の中程迄夕日を受けて、一村茂つてる楓、朱を濺いだやう。其の陰に、灰色の茅葺小家が、畫のやうに景色をそへてる。竹が朽ちて崩れかゝつた垣の邊、白菊が二三本ちよろ〳〵と心ありげに首をかしけてる、筧の水は涸れ樋の中も苔に閉ぢた庭石も。落葉が一ぱい。蔦のからんだ枝折戸、小窓を半隱す疎な萩の垣根、この谷にこの小家、あゝこの山の秋を司る神のすみかではあるまいかと佇んでると、翁らしい咳嗽が洩れる。何か小聲でさゝやいてをる。日は、向の森の上雨を含んだ黑い雲の中に入りかゝつた。鳶がせはしく舞ふ。風が急に襲つて來る。又雨らしい。今宵降るならば、恐らく秋は一夜の中に遠く去つてしまふであらう、噫翁この庵に何を語つてる、我世の秋の更けたのを歎してゐるのではあるまゐか。

（雨評）美しき文である。四條派の畫を見る心地がする唯だ個文の結びが稍時。ろであるのが欠點である

秀逸

◎◎ 秋の光　土佐　秋月廣江子

秋とやとても、ひとりは堪へ難き夕べ哉、せめて君共に泣きて給はれとて。

あゝいかにすべき我が身なるらん。晃はみまかり候。かのみ空より父母の御招ぎありしが。さらば、我れも共なるべきに、天地に陰なき一人の姉を殘して、みまかり候。十三の小さき胸にも、いぢらしや、家の再興をちかひて我を慰めし弟は、世を去り候ひぬ。夢かあらず、幾度かへりみるも我れは現世にひとりなり。かくても尚ほ我れは世にあるべきや……

扨ても、ふるひし筆の跡に、君共の折りのみ胸ぞ忍ばるゝ。

定めなき世なる哉、晃様の涙かわかぬ同じ暮れ、妙様も亦世を去り給ひつ。涙に染みしこの玉章はやがて君が最後の御筆なりしよ。悲しきかも。思へば、つらき人の世なりけり。皆人の若くはゝゑむべき二十年を、妙様の生涯は餘りに悲惨なりしよ。父上はいつ頃なりしか、只一人の母上にさへ、十五にして別れましつ、未だ浮世の何物をも知らぬ君は、幼き弟君を守りつゝ、あらゆる世の困難と戰ふべき運命となりし也。君は常に語りましぬ、我が生命は弟と共に生きたりと。されば、君は世の何物をもかへり見ずして、ひたすらに晃様の教育につくし給ひつ。其の甲斐ありて、晃様はをしくも亦やさしく、學びの業も並ぶものなしときゝしも、仇や、天は尚ほこの望み多き少年をもうばひて、一人泣くべく君は殘されぬ。

其の折りの君の歎き、君の悲しみ、言ふも愚かや遂に一月をいでぬ秋の暮を、晃様の跡追ひまして、何事も終はんぬ。あはれ、雨の晨、月の夕、思ひ出でらるゝは、君が涙の生涯ぞかし。幾年の苦辛は、淋しき野邊に、二つの墓標と化して些の光明を見ざりしぞ、はかなき。

今年も秋は來にしか、前栽の秋の花、風なきにはらく／＼とこぼるゝ様の、去年この文えし日に似しもつらきに、まして弱き其の秋の光り……あゝ。

（雨評）　同情の涙はやさしくきこえたり。末段の趣向も

文才見えたれど、唯だ筆に今少しく錬熟を欠くあるをてしむ。

◎◎此の心　大阪　木村春江

許せ我子。暑に堪へで萎れし花も、慈雨に逢へば又美敷色を見するでないか。弱き光りの數度消えなんとする燈火も。油だに注げば、又細字の上をも照らすでないか。

思はじとて、如何で思はずに居られ樣。こぼる丶乳房押へつ丶、牛乳進めし時、汝は何故其を飲まなんだ。母の乳を慕うて泣く汝が聲の哀に堪へんには、餘に我れは弱かつたのである。一年餘、虫の病もなく育てし乳が、今更惡いとは、どうして思はれやう。悲歎呻き聞くに得堪へで。與へし乳は、散れよと荒ぶ雨であつたか。思ひ迷うて替へた醫師の見立を信じて、つぐみし口に强ひて注ぎし藥は、光に効なき水であつたか。あ丶、許せ、我子よ。

去月の今宵、又しても浮ぶ幻。血の氣なき石像の樣な顔、幽に震ふ唇、力なき曇りし瞳は、我面にのみ注いで居つた。いとしき樣に堪へ兼て、抱か

んとせしは、幾度であらう。輕からぬ病とは聞いたが、死といふ事は露思はなんだ。ましてや、今宵限りの命とは、夢にも、あ丶夢にも……とても死すべき運命と知つたならば、誰がとめしとて抱かずに置かう。色あせし唇なりとも、肉落ちし頬なりとも接吻して。我が暖き懐に安き眠りを取らせたであらうに。あの氷、嘸冷たかつたであらう頭をふりしは、其の爲めであつたか。身と魂と別る丶際は、耳も聞えず目も見えずとか。苦しかりしか、切なかりしか、乳を求めてか、母を探りてか。冷たき床に母ならぬみどりの人の衣を握りて、あはれ汝は、いかばかり本意なく、本意なく逝いた事やら、あ丶、許せ、我子……。命に替へて愛でし玉の肌を、烟となして、はや三十日、今猶消えぬ幻に、果なき影を浮べつ丶、あの折り、とせば、この時かくせばなど、はてもなき悔いの念に、夢も結ばぬ秋の夜の、さても長き事よ。

（雨評）切情は深くきこえて悲しき文なり調を今少しく修養せらるべし。

◎秋　和歌山　植木素子

つくづくぼうしの聲に、世はいつしか秋に入りて門の銀杏は、日ひと日黄ばみ庭の山茶花、芙蓉など、咲きほころび、去年夜市にて求め來りし楓も、紅の色にもえ出でぬ。松をとりまく萩は、白に、紅に、おのがむきむき、咲きわけ、梢を渡る微風は、夜毎に虫の聲々と相和し、物思はぬ我が身にも、淋しくうら悲しき心地ぞする。秋もやうやくふけ行くまゝに、萩は葉も穂も白う枯れて、楓は愈紅をまし、風のまにまにひらひらと散り落ち、綠の苔を色どりつ。天つみそらには、雁など鳴きわたり、あはれさいはんかたなき折柄、ひとりめでたく匂ひ出て、人の心を慰むる菊の、雪かとばかり見まがふ花の色、みどり深き葉にうつろひたるに、夕日さへ華やかにさしそひたるさま、實にあはれなり。秋もいよいよ名殘少なくなりては、玉のごとかりし虫の聲々も、かれがれに細り行き寒さにたへでや、露の命のせまりしにや、今にも消えなんとするね、いと心細く、まして、寢醒の枕に、遠く近く砧のきこゆるは、誰がために、かく夜更くるまでと思ふに、夜寒の風、いとゞ身にしみ渡るなり銀杏、楓などはしきりに、飛びかひ、晝は書窓を掃ふ影、鳥かと、疑はれ、夜は軒端をうちて、晴れたるに雨を想ふ。つとめて庭淸めんとおり立てば、一面皆落葉見上ぐれば、あかず眺めし楓も、錦の衣をぬぎ捨て、黄金なる雪かとみし銀杏も、やせて、晩春の黄なる蝶にも似たるを、此處彼處に殘したる。あゝ、秋も何處に行くかといつしか手にもてる箒も打捨てられてなん。

(雨評) 綺麗に暢流なる筆は見るべし。想の別に新しきところなきををしむ。

◎鄙の天長節　相模　杉義とよ子

今日は朝から風もなく、いと靜かな、暖かい、凪日和で……南向きの日當りよき村長樣の門には、見慣れない日の丸の旗が、無雜作にかゝげられてある。聞きなれた入谷川の瀨音も、一入淸く澄み渡つて高く、空には一つの雲だに見えない、黄金の波は近く、遠く、賤が屋の浮いて寶船の其れかの樣。

「今日のよき日は大君の……」

「生れたまひしよき日なり……」

夕風のそよ〳〵と、持て來る童唄、節面白く聞えて、いと可愛らしく、稻の中に消えた。車井戸のきしる音の嬉しく、背戸にあふれて、夕餉の仕度にせはしない、隣り村の煙りまでが、白く衣笠山をめぐつて、高く、大津の原に戯れてゐる。高音の百舌が、一聲清く、川向ふの森に冴えてまたも、牛の聲、モーと長く、村一つぱいに澄み渡つた。まだ、村長樣の門には、日の丸の旗がちら〳〵、オレンジ色の入日を招いでゐる。

（兩評）あつさりとしてなか〳〵に其の情景の浮びたるところ見るべし。

◎撫し子の面影　越後　水野屋すゑ

頃は小春日の花はなけれど、蝶も飛ばん日の午後作文の淸書を命じて、机間を巡るぽつとほてりたる、福よかな頰の色を見せて、輝くその目には、何の光を放つらん。四十の頭腦何の音もなく唯だ鉛筆を走らすのみ。その時、妾はいひしらぬ感に打たれて、その面影をうつさばやとは、この文のおこはり。

○○子

衆崩るゝも獨り泰然、衆笑ふもひとり毅然、竹にも折れぬ呉竹の操極めて固きは、この子。おひ先いかにうれしからん。

○○子

素々たる容、繊々たる態とやいはん、話しざまのやさしさ、人を恍惚たらしむ。母なる人の面影さへ思はれて、床しきは、この子。

○○子

男ならば、短小精悍、意氣人を呑むとやいはまし。

○○子

口は輕くして、辯も明。世才巧にして、友をそらさず。

唯だ他日交際場裏の花とならんも、流水の誘ふところとならんことを恐る。

○○

ふさ〳〵したかみ、白玉にうるしのやうな眼、愛らしきはこの子。

○○子

婉雅貞淑、女らしき女とはこの子。

○○子

天上の星二つを、地上のものと、二つの眼に、鈴をふりたつる様の聲。愛しき子、無邪氣な子、生々したるしかも女らしき子。

○○子

一寸すまして何かいはるゝれば、すぐ口を噤むところに、愛嬌あり。天眞よく流露す。

○○子

例へば、風にもたへぬ青柳の、春の朧の月夜の如く、うつくしきやさしき心に、うすほんのりと淋しみの愁の霞に掩はれし如き子、可憐にして人の情をひく子、聞けば母君なしとか。

○○子

例へば、潮風にもまれし松の如くたとへば敵國に捕はれし人の、ひがめるが如し。されど、家に歸れば秘藏の娘。

○○子

器械室の魚の骨骼を見て、せんせい干鱈の骨ですね。おかしくて、今に忘れぬ子。

○○子

紫のゆかしき所なくして、徒に清少の流れをくむ。

（雨評）思ひつき面白し。

◎秋である　越後　松永松葉子

庭の五葉松にジイ〳〵鳴いて居つた油蟬のこゑが、今日はばつたりやんだ。その筈、朝から雨が降るもの。

垂柳の葉幾萬の葉毎に宿つて居る露が、吹き來る風に惜げもなくこぼれる。若しこれをさゝがにの細い糸で貫き合せて、飾とせば……誰れに送らう。

萎れ安い朝顔も、今日は、晝すぎの今、尚ほ露と相待つて、色艶なり。葉蔭から飛び出た蝶が、何物に恐れたのであらうか又すぐかくれた。

梨や林檎の葉かげから漸く顏を出した、處女が伊豫すだれから覗いたやうに……人の心を深くも引くのである。袖垣に二むら咲いた萩白いのは氣高いが、赤いのはいやしい。だから自分は白い方を取る。垣の外は畑である。黍や豆粟栗、畑の中には案山子が立つ。だが、雀群は自由に貪食を逞しうして居る。嗚呼かうなつては、案山子の德はないのだ。黄ばんだ葉これは花と見ても差支へある

まい。

淋い雨雲が、やさしい角田山の腰を取り巻いて細い細い雨が、をやみなく降る。

野菊櫻たで、咲き匂ふ堤上を、女馬子が行く。馬老いたれど、娘は若い笠を傾けて行くのは、今朝結つた髮を惜しむのであらう。

來るか來るかと川下見れば河原柳の影ばかり……

清くすゞしいこゑが、とけるやうに……しまひには消えてしまつた。暑くもない、寒くもない涼しい……一年中いつも、否、幾年も幾年もかくあつたらばよからうに……とは思つたけれ共、さうすると、亦變化がない。なければ趣味がない。いやさうなると困る。矢張春もあつて、花さけばよい。秋があつて、月がすめばよい。夏もある冬も來た方がよい。これで、愉快になるのである。

秋が來た惜に秋なのだ。燈火親むべき好時期が到來したのである。月ゝ花つゆしも虫禽……此等を秋から取り去らば、如何……秋は一入淋しからう。

びしよぬれになつた雛三四羽軒下にすくんで立つて居る。何か深い思ひに沈んで居るやうに……雨だれがぽちり／＼石を穿つて、小氣味よい程である。

あゝ秋が來た……秋である。

柳のこぼれ葉が、散つて散つて、蟬と蝶のなきがらを、無心におほふのである。

嗚呼秋が來た……秋でるある……。

（兩評）今一といきの文なり。

○乳母　　東京　檜皮輿志子

一週間ほど前についた端書に、大方今日あたりはと思うて居たら、其の通り、杖を力にはろばろとたつれてきた乳母は、十時頃我が家の門を音づれた、自分は何年ぶりかで玄關に迎へると、乳母はもー目は一ぱいに露を宿して、挨拶するのもなろなろ聲、急になつかしくなつて、手をひいて座敷に通すと、始めは、それでも涙をおさめて、母樣と一とほりのあいさつをすませ、其の後の摸樣をかたり合うて居る。自分は、まあ、乳母のかしらの白髮のふえた事とながめて居ると、話はだんだんこちらの事にうつり、乳母は丈ののびたのがうれしいと云てはなき、女學校に通うて居ると、云うてきかすればむせび、頬はいつもぬれどほし。袖はなかなか、わきさうもない。年よつた我身もわすれて、それ程までに自分を思つて居てくれるのかと考へると、うれしくて、どうやらこちらも目から雨がふりさう盆けが終へてから。皆あつまつて御土産のつつみをといたはじめにころげ出たのがさつま芋。思へば女

子の大好物と、兄樣が大聲に云つたので、さすが涙もろい乳母も是には笑つた。次には栗、皆よろこんで、大きいのをより出しなどして居ると、乳母は我が手を取つて、あなたがくりくりとおふとりなさる樣にと思つて、持て參りましたと云つたので、皆の笑聲は室をふるはした。

よるは、母樣にねがつて、ほんとに久しぶりで、乳母の隣に床をのべた。つきぬ話をあすにのばして、床に入る昨今までの恩がへしと云ふ程ではないがつかれたらうから足でもなでやうと云つても、うば遠慮してきかぬ、仕方なしに。それではは床に入ると、又もれものがたりがはじまつて小さい時度々乳母を困らした事や、村のまつりに着物きかへてよろこんだ事をはなしてくれたが、其話も終つて、乳母はいつかすや／＼とねむりについたらし樣子。目をつぶれば、この第二の母樣の恩も、中々かへしつくされぬ程であるのに、今までの我ままはと、我れしらず顏を赤くしたが、それにつけても、今度國へ歸るまでには、何をしてなぐさめやう、あれもしてこれもしてなど考へる中、いつか自分も夢路に入てしまつた。



（雨評）情も景も一とわたりは見えたり。筆は一層の苦心を要す。

〇書窓の感想　埼玉　足立　富貴子

垣根に唧く虫の音のいたう細りゆく秋の末、しんしんと沈みゆく夜のけはひにつれて、やをら机に身をよせ、讀みあましし歴史の枝折に手をかくれば、今宵はいつになく心地すがすがしく、知らず知らず北條足利氏の卷も讀み終りぬ。さて、熟々思ひ見るに、我が國數千年間の歴史の中にていとも涙の種なるは、鎌倉山に風吹きそめし頃になん。世の中なんとなう物悲しく、うき秋の色ぞなすなる。亂臣賊子のつれなさ、野分の風にもまさる可く、桔梗刈萱女郎花などの七草も、吹き亂さるゝまゝに靡きければ、などて色のある可きや。雲の上の重き御身も、はなれ小島に流され給ひ、寄せくる荒波の音に、わびしき御夢をさまさせ玉ひあるは、笠置の山をのがれいで玉ひて、松の露しぐれに御袖をしぼらせ給ひし事ども、悲しなど云はんも愚なる、世の中にてぞあ

りける。其の他、淀川の水泡と消えしもあれば、四條畷の露と散りしもあり、又、眞心を櫻の幹にあらはし、船上山に[illegible]かばひしなど、思ひ見るさへ堪へ難き。ところ〴〵の、戰に露と消れる月にもまさりてすさまじく、千軍萬馬の聲は、松の嵐のそれよりもいみじかりけん。されど、一たびは亂れ、一たびは治るは、世の習ひながら、今は天地も蘇りけん、殺手走る音も無く、鯨波つくる聲も耳にせず、四海波靜に吹く風も枝を鳴らさず、五千萬の民草、君が惠みの露に濕ひて、生ひしげれる大御代にめぐりあふ我れらこそ、いかにうれしからずやはなど、思ひめぐらす折しも世の中は人無きまでに靜けく、戶外に通ふ夜風も、いとかすかに。

（雨評）　整ひたるところは見るべけれど、硬きをなしむ。

〇秋雨の夕　岩代　岸野常子

日もすがら低う垂れこめし雲の、暮るゝ頃雨となりぬ、興なきまゝ小窓に倚れば、崩れたる石垣の邊り、返咲きの百日紅、雨を帶びて、ほろ〳〵と散るが見ゆ。

庭には早や、夕餉の煙り低う漂ひて、厨よりは物煮る香り溢れ出つ、壁を這ふ蟋蟀の姿も、今日はいとゞ瘦せて見ゆるよ、彼方なる垣のあなた、いと大きやかなる柿の、一もとありて、赤き實の二つ三つ、つれづれさうに殘れり。ひそやかなる蟋蟀の聲起りぬ。

森隠れの道を人や行く、土をする下駄の音懶げに、何處よりか、臼の音靜やかなり。

妾に目を外らして、遙に草生ふる小道の邊りに注ぎぬ。遠の森は霞みて見るべうもあらず、折柄の雨、いとゞ降りそぼりて、仄にに烟る尾花小路、蹲ける如き黑き影の立てるが見ゆ。妾はぢつと見入りつ。

あはれ、牙は小牛の立てるなりき。雨はいかに彼が身に降りそゝぐらん、温かき黑の毛衣をも濕すらん。されど、小牛は動かず、たゞ尾のみ折々打ち振りて、何か思ひてか、つく〴〵と草の面を眺めいぬ。あはれ、汝は何時何處の空より、たらちねの温かき膝下甘き乳房を離れて、今の深き思ひにや沈む。はた汝が世の賢らししを、人の子情なしと、己が伏屋にも歸らで、かくは雨にそぼつか。思へば、はかなき汝が運命かな。されど、歎くを止めよ。汝は今自然の神の織りましし自然の掟に、暖かき步路を辿るを得るにあらずや。定めなきは此の浮世の常なるを。

雨は止みぬ。やがて、向の森近くいと太き牛の聲はげしく起りぬ。見れば、葉落ちて疎らになれる木のもとに、老いさらぼひし翁の杖にすがりて佇むあり。太き聲の牛は、その裏手の方にて又、鳴きぬ。小牛は耳を立て、振り返りてたぢろきぬ。されど、其影は

柿赤き彼方の村へと消え去りぬ。俄に冷たき風の梢を搖がして、一しきり雨ははげしく降り出でぬ。向ひの岡煙りて見えず、たゞ軒の玉水の音のみ、いや高し。顧れば、室内仄暗く、靜けき夜の幕、はや下り初めぬらし。

小窓を閉ぢんとする折柄、彼方に幽かに、細う、悲しげに鳴く小牛の聲。

（雨評）　今一層情を活かしたき心地す。

〇秋の郊外　岩代　菅野和子

空よく霽れて高く、秋の日脚は迥かに弱く照して消し、文讀む窓に悽然影おとすを見れば、蔓枯れし朝顔の添竹の端なり、何處よりつとゐ宿りしは蜻蛉よ、驚くとはなしに飛び去りぬ、また歸り來たれり。けふの日課は復習の一頁を殘せり、いざと再び辿る學びの道。

靜かに窓の月を押せば、先の蜻蛉は影もなく、庭越しの彼方の野邊には、女童の歌のみ聞ゆ、手に〳〵七草の花々を持てり。

いとゞ興ある日曜を、しかく心地よき小春日和と佇めば、日頃親しき友垣も、徒らには暮さぬめり、三人四人集ひ來れり。いでや近郊の景色を探らむと、心一つぞうき立ちて。

黄菊白菊咲き亂るゝ中に、香を追ひつゝ、石階を昇りて、常泉寺に至る。茲は川俣名所の一と數ふる眺めの寺なり。

神工鬼斧の岩角に、緣したたる枝振りよき松の、永久に、變らぬを見るにつけ、悲しく思はるゝは、人の玉の緒にこそ、などはかなき。

墓場を弔へば、蓬茂りて、墓標さへなき無緣佛も、あはれなり。新らしき墳墓もいたましや。

暫しと絕えし歌聲も、行々鈴虫の聲に誘はれて、後庵館にぞ着く。崇峻天皇の女御小手姫の庵跡なりときく。かゝる山間邊陬の地に、國産たる羽二重の産夥しき川俣あるも、此の姬が御教の遺れると、殘るありがたくなりぬ。

少し下れば、大清水に機織神社あり。神に祀られけるも由緣あるかな。社は壯ならされども、工女等が手すさびの絹切の旗旌、風にはためくもうつくし。

足は公園に進みぬ。森にうかるゝ胡蝶と袂つられし此所、今櫻の紅葉鮮かに、一入の興添へたり。

これより、尾穗散じ畦をわけて、蝗の群れを驚かしつゝ、急坂を攀らて、身は荊棘と戰ひ、小松山に喘ぐ。汗したたれど、鼻尖に足下に、初茸、しめじなどの生へるに、心うばはれて、いつしか頂に、昇り詰めたるぞうれしき。

午後二時といふに、辨當うち開き、午餐したゝめぬ。かくも甘く食べたるはなかりき。

山査は、思はぬ、あけび、栗、葡萄。妹や喜ばん、弟や待たんなど、急ぎ山下れば。晩鴉歸雲を追うて喧しく、我れ等も劣らじと唱歌うたひつゝ、別れ〳〵に各々、興充てる袂を夕風に飜へして、かげ消えぬ。

（雨評）前段の筆は趣きあれど、中ごろよりの筆も想も苦心足らず。

〇少き思　豐橋　匿名矢野子

暮れ行く秋の小寒むの風は、はだにしみわたる樣であつた。其の夕方、私はながの御わつらひに御やつれなされた父樣の御藥を買ひに來た事もない花園町迄で出ました。來た事もない私は、此の町のにぎやかさ、きれいさに見とれて、つい父さまの御藥買ふ事も忘れて、あちら、こちら、とながめあるいてゐると、丁度年頃私と同じぐらゐの御孃樣、上下縮緬づくめの御召に、模樣の御羽織、其の美しさ、まことに雛樣のやう。同じ女に生れながら、私は見すぼらしい此の姿今の御孃のあの御姿のうらやましい事。此世に同じ女と生れながら、なりもあらうに、此の見すぼらしい私の姿、淺間しや悲しやと、今更氣がひけて、思はずに走りに二丁程。又も忘れたのか目について、立ち停まつたのは、吳服やの陳列場、見れば、化粧品、振袖友禪の派手模樣、縮緬の半襟、やれあれほしや、これほしやと思うて見やれば、ちらりと此所の硝子戶にうつりし私の姿、見るともなしに見た其の時、ほつと思ひがらだがもえる樣の思ひがして、又も藥屋ののき下迄思はず知らず走りました、此の時、私は氣がついて、淚をはら〳〵とこぼしました、父樣の髯ぼう〳〵と、情けなや、貧しい家に永の御わづらい、おやつれなされた其の姿が、私の目にあり〳〵と見えたあゝ、父樣ゆるして下さい。家は貧しい其中に、二人のくらし。力と御思ひなさるのは私し一人。其の私が、たとへ二度この春の

花咲く時とばいへ、紅おしろひのさたとは何事ぞ。耻かしや、まの悪るさもあらはこそと、我が家をさして、急いで歸りました。

（雨評）　其の想は可憐なれど、筆の幼きををしむ。

〇待つ春　横須賀　渡邊比佐子

昨夜降り出した雨は、朝霧と共に消え去つて、■光りの柔かな朝日が築山の横から斜めに、拭きぬいた廻り椽を滑つて、庭の飛石に散つてゐる。垣根の傍の山茶花、色あせて、枝に唯一つ、高く百舌の二聲三聲が、糊の弱い障子を微に叩いた。竹柱によりかゝつて、餘念なく編物をして居た君ちやん、鈴の音に眼を放つと、小猫の「タマ」が、レース糸の端を咥へて、ジャラしてゐる。何に驚いたか急に、水仙植木鉢を倒して、庭へ飛び出した。紛襖の意匠に苦しんでゐた御祖父さんが、眼鏡越しに庭を見下して、「武坊何をしてゐるのダ」「御正月の御飾につけて貰うダイ五助ニー」と平氣で、御父樣の大切な盆栽の青蜜柑をちぎりとつて居る。叱られたのか、武坊シク〳〵しながら御母さんの室へ入つた。間もなく、ビスケットの包を持て出て來た、「姉ちやん御正月は何日來るノ」「モー四つ寢ると、御正月なの。ソーして、あのイヽ御着物を着て遊ぶのですよ」「嬉いしナー、一ツ二ツ三ツ四ツ寢ると御正月ダッテ、坊の齡と同じだ子ー」と指を折つて算へてゐる、「ソーネーよく覺えて居ました、御賞美に姉さんも上げましやう」と箱から御菓子を出してやると、頂いて、サツ〳〵と行つてしまつた。

庭の紅葉は、すげなくも幾世變らぬ松の色香を捨てゝ、骨ばかりの梢を危くさゝへてゐる、石燈籠の影隱かに、歸り咲きの山櫻一輪二輪、ありし昔を忘れかれて、とく其の中に一人ほゝ笑むで居る。立切つた六疊の間には、行儀よく三人の小袖がならんで、幾板の下に長々と春を待つて居る。

（雨評）　情景一とわたりは見えたれど、さして取り立つべきところもなし。

〇秋の一夜　常陸　堀　光子

山寺の鐘も身む染む夕暮の風一渡り、美事に熟せる栗のばら〳〵と落る心地よさ。妹としきりに拾ひ集る內、何時しか籠に滿ちぬも

ー澤山ですよと妹を促せば、さも嬉しさうに見入りしが、姉さん隣の千代ちやんにも上げませうれと。さう〳〵、それでは千代ちやんと健夫さんをお招きしませうよ、姉さんが湯出るから靜ちやんお迎へに行てお出と言ひすてゝ家に入りぬ。暫く立つと、七つの千代ちやんと五の健夫さん、よく似た姉弟ふつくりとした顏に例の笑くぼをよはせて、入り來たりぬ。洋燈はまばゆく、先づ四人は火鉢をかこみ、あど氣もない話に、思出て多き秋とやらは何處か、自分もいつしか子供の樣すると、千代ちやんは、何かお話して頂戴よ。何時か聞いたの、面白いから、もう一度きゝたいの。又健夫さんは又、僕は桃太郎のお話大好、僕にもして頂戴よと。此の可愛子供か、左右から責るのである。それから、無邪氣な三人を相手に、桃太郎の話をして居ると、さき程いけて置た栗が、燒けたと見えて、火鉢の炭が、ふつと立て、香ばしい匂ひがほつこり。やがてあまりおそくならぬ內と、二人を送り出づるころは、いとも清けき月さして、小山の影もおぼろに見え心あくまてすが〳〵し。

（雨評）　全體に今一層の苦心を要する文なり。

〇女子と修養　埼玉　天野ひで子

熟々廣き社會の有樣を見渡すに、人の世は實に〳〵複雜な樣にして、聊も單調一律の支配を受けず。且つ、常に活動進步の位置に

ありて、片時刹那と雖も停止せざる事、さながら滔々としてよどみなく流るゝ瀧つ瀬とや云はまほし、嗚呼宇宙の事物は、實に文明の利器によりて、日に日に進み行く事のうれしさよ、殊にこゝ三十年余りの星霜を經しほどに、我文明の度は進み進みて遂に現今の狀態を釀しつ。さるが中にも、教育の發達は驚くより外にはなかるべし國家のため、はた己等同胞のため、如何に嬉ばしき極みならずや。そも〳〵、一國の強弱は國民の元氣に依る者にて、其國文明の程度は、又教育の振不振による者ぞかし。さればにや、大國民たらんには、先づ充分なる教育を受け修養をつみて、物の理人の道をわきまへ、品性を高尚にせんこそ、いと〳〵肝要ならめ、さるに我國古來の習とて、女子としいへば、無下に能なき者とさげしめられ女子自も之に甘じて、敢て事物の蘊奧を極めんともせざるが如し。あはれ、愚の限りにこそ。

今後の日本女子たる者、いかでかくてあるべきぞ、日露のみ軍は我が日本をして、一躍して世界一等國の地位に進めしにあらずや。さればにや國家の母たるべき婦女子にして、昔日の夢尙さめず、悠々なす事なくて、あたら貴き光陰を過さんか、戰捷の榮譽は一醉の眠りと、淡くも消えてつき果てなむ、あはれ、危きかな、國家の運命それ偉人は賢母ありて。初めて世に現はる事、恰も根を培ひ、能き肥料を與へたる草木に、艶けき果實の結ばれて、人々に歡迎せらるゝと等しかるべし。さるからに、世の婦女子たらん者は、唯々美衣美服に憂身をやつさず、己れのためはた國家のため、尙進みては人類のために、學を勵め、業を勵み、身體の健康を計りて、ひたぶるに一身の修養を怠らず、他日社會の一部を占むるに當て、勝利者たる事を期せでやは、殊に廿世紀の今日は、己れし學ぶ心あらば、凡そ如何なる事なりとも、究め得らる事なるを、家貧なりと云ふ勿れ、寸暇なしと喞つ勿れ、天は世の不幸者をは、決して捨つる者にあらねば、奮發勉勵、たふれて後止まむ覺悟こそあらまほしけれ。

（雨評）文は整ひたれど、さて言ひふるされたる事なるをいかにせむ。

○秋山家　肥後　友永常子

よべの村雨が、名殘なく晴れたので、我が山の松の木のまのもみぢは、今朝一入の色を添へて居る。それに、朝日のくれなゐふかく差したる。えも云はぬながめである、あゝ都の友に、花びらならぬ此の色よきもみぢを、二葉三葉文に卷込んで、我が山里の秋の景色をほこらむと思ひ折りしも、軒の松風のたえ〴〵に、鹿の聲のかすかに聞えるのである、さて、此の鹿の音はいかにせんか、

○行く秋　小樽　澤谷都音子

淋しき秋を友逝きてそゞろ堪へ難き胸の思ひを、好める繪筆に慰めて、露滋き一朝、亂れ伏す秋草の中を、縫うて流るゝ裏の小川に、鉾洗ふべく下り立てば、こゝにも行く秋の哀れを見せて、色あせし野菊の花の、羽つかれし蝶一つのせたるが流れ來ぬ、見る物毎の悲しくて、實に秋は淋しくも哀深きものと。

○柿を送られしに返す文　越後　松永しげ子

けふ、妾の庭の菊も、今を盛りですから、貴方樣の花園はさぞさぞ見事でせう。いつか一度參つて、菊の香や色をおほめ……その上箱柿を頂かうと存して居つたですが、つひ參られませぬでしたそれを御心深くも、今日はわざ〳〵美しい柿を一籠下さつたとは誠に御禮の申しあげやうも御座いませぬ。早速一同揃つて賞翫いたしましたに、至極結構で、三個まで食へましたけれど、まだ飽きませぬ。貴女の御注意もありますから、亦晩に頂かうとよしまし

た。

この栗はすこしてありますが、西山から到來せしもの。新鮮てございますから、御禮のしるしまでにさしあげます。亦今日は雨……お心淋さへふります。梢にゐのこる柿は、さぞ寒いでせう。帽子でもやりたう。殘りの柿食べたく、晩がまたれてなりませぬ…。左樣なら。

○妹の死を旅の友に　牛込　平塚白百合子

秋かぜは庭の青桐さそひて、猶も花の露をちらしてゐる。今日は星も見えず、黒き風の時々木の葉ゆるがせて、こゑあるにかと思はれる、その今宵ひ、ひさしき病につかれし妹は、すきとほる青白の顔に少し血の氣見せて、姉さま、露さんのおかへりも見ないで、私はお目にもかゝれず、先にゆきますのね、のこりをしくございますわ、せめておうしゑでも」と申します、机の上君のうつしゑわたし候へば、わな〳〵とふるふ手でとりあげて、色あせしから、唇にあて申し候ひしが、たゞあとは、露さんと切に胸に押あてなすや〳〵と肉おちし頰に笑をうかへて、神のみ國に旅たち候ひぬ、、、、、、、、、、、、、、、、、、、露子の君よ、此の後は御判じ下され度、とりみだしたる筆のあと、、、、、、、、、、、、とりいそぎ草々、かしこ。

、、、紅葉　東京　檜皮與志子

名におへる高尾のほとりに住み給ふ友垣より、御案内にとて、紅の一葉まきこめて、文をこせたまひたる、風流の御心もしのばれて、いとなつかし。入日の花やかなるが、紅葉に照りそひて、一きはくれなゐましたるは、春の花のにぎはしきに異なりたる眺めなり。

峯より風にさそはれてちりゆきし其の葉の、ふもとの小川にうかびて、仰ぎても又うつぶきても紅なる、さながら浮世の外のものとおぼゆ。また、三つ二つ其葉のせたる流れの、曲り曲りて、はては行方も知れずなりぬる。けしき、げに心ゆくばかりにて、歎心なき我れの口惜しさ、云ふばかりなし。

、、、遠征の兄君　東京　吉村まさ子

夜やいたく更けぬらむ。犬の遠ぼえも今はとだえて、音するものは板戸をたゝく雨のみ。あゝ、淋しき夜牛かな。想へば、過ぎにし今宵、我兄君は遠洋航海より歸りたまひ、久し振りにて皆々打まどひ樂しく遊びにし其の折りよ。あゝ、夢かまぼろしか、彼のなつかしき面影は、何故まのあたりに見え給はぬ。彼のやさしき御聲は、何故聞えざるか。さればよ、今は波濤あらき海のあなたにあらせ給へばなり。家にこもり居てすら、物すごきこの雨の夜にも、公の務めにたづさはり給ふ兄君は、意のまゝにやすらふ事も得叶はず、如何ばかりかなやませ給ひてならむ。風よ、雨よ、情あらば、我が兄君が身をよけてよ。

、、、秋の夜　神奈川　平塚白露子

さつ〳〵と音して窓たゝくは、友やおとづれしと柴の戸開けば、月はさえて人影もなし。あなうたて、入らむとすれば、またもたゝく。

けものにやあらむかしと、そとうかゞへば、いともなかし門邊の梧桐、おほかたわくら葉となりしが、折々の風にさそわれて散りゆくが、雨戸にあたるなりけり。あまりのおもしろさに、思はずもたゝずめば、散り來る一とは、いつのまにかけしにや、さゝかにの葉にとゞまりて、靜かに夜にはなりぬ。

、、、折にふれて　神奈川　鈴木まつ子

愛せし松虫は、きのふはかなくなりぬ。たゞすてんも哀れと思ひて、自ら庭のすみに埋めてやりぬ。あゝこよひより、やさしの聲も聞く事も叶はぬかと、一夜寐ざめがちにてあかしつゝ、けさはいつより早く目さむれば、身にしむ雨はふりいでぬ。まだしも松虫の

いづこかにてなく心地するこそ、あやしけれ。虫を埋めし處に來てみれば、哀れはひとしほふかし、こゝにけさは朝がほの白のみ咲しも、哀れを添へて。

、、秋の夕ぐれ　　東京　千秋　雅子

空すみわたる秋のもなか、はれたる日なれば、おのづからなるのどけさに、我れとしもなく田のもさまよひぬ。日もはや西にかたむきて、のこりの光まばゆくてらせる、又明日の好天氣なるをしめしぬ。うちつゞくたの面の稲葉、こがれなみ吹く風に、よせては返へすさま。ゆたけき御代のしろし見えて、いとうれし。見わたせば、くろみわたれる鎮守の森のかたかげに、ねぐらもとむるむらがらすのこゑかしましきに、家路いそげば、遠寺のかれかすかにひゞきて、秋のさびしさとみにそひて。

、、秋　祭　　松山　田村　多豆子

神の社の御祭は、おほかた秋に執行はるゝは、豊けき八束穂の新稲を奉りて、新年の御祭の報賽なりとこそ承りつれ。笛竹の聲も朗かに唱えて、皷の音のとう〳〵と鳴響くは、今や御神樂を奏するなるべし。今年よりは、片田舎なる郷村社にも、奉幣使とかいふものを立つる掟となりぬときくも、いと〳〵畏こく尊くなむ。わが國は神國といへは、誠にさもこそあるべけれ。

新　体　詩

文學士　鹽井雨江先生選

地

琴の聲　　大坂　木村　春江子

[illegible]　[illegible]

何故物を思ひます、櫻の頰の色あせて、
花の唇笑みもなく、「星にも似たる瞳には、
露のきらめきたえずして、日頃手なれし我にさへ
つれなき樣のいとしさよ。
秋や、更けて燈火に、むかし忍ぶの昨日今日、
ゆきにし母を慕ひてか、つれなき君を恨みてか。
とてもかくても現しよの、なやみの程は絶えざるを、
主は少女の胸せまく、心の憂に堪へざらば、
などか悲しき詩を誦して、我れに合はしてたまはざる、
主の御手だにふれもせば、我が十三の糸毎に、
思ひ思ひの音を立て、憂きをなくさめまゐらせむ。
なぐさむまではあらずとも、共に悲しきねをたて、
主が涙の秋のつれ、手なれの琴の願ひなる。

（雨評）　やさしき琴の聲どきゝたり。

人

ゆく秋　　土佐　秋月　廣江子

逝く秋を虫の音枯れて、風寒き三杉の野末、
平川の流に沿ひて、新らしき石碑はたちぬ。」
誰が子とや世は思ひやる、露といふ名さへ厭しき

石の面に刻みし年は、春浅き花の十七。」
其の胸に何か響きし、雨の夜半こゝの流れに、
若き夢を我れから捨てゝ、殘せしは三十一文字。」
　花咲かぬ國に導け今宵えし、
　　人の命は語りこそせの。
ありし日は我が世の幸を、ほゝゑみし君にふさはぬ、
歌の謎誰れしもとけで、樣々の噂はいでつ。」
言ひつぎつ星はうつれど、遂にそが秘密は解けず、
いつしかも人は歎して、平川の水碧りとはに。」
風寒き三杉の野末、新らしき石碑は建ちぬ。
花さかぬゆめは安きや、さめぬ世を秋も行きけり。」

（雨評）　餘りにおぼろなる嫌ひあれど、想には慥に詩あり。

透逸

〇朝　越後　水野屋すゑ

靜かなるかな朝の景色、夜の御神の漉して成せる、
世は淸祉の氣にかをりて、人の汚れも見えぬかな。
眼醒くれば、遠く近く、神の恵の白き露や、
脚を運べば、爰にかしこに、散りてほろ／＼地に聲あり。
靜かなるかな、森の姿、嗚呼、その下に夜もいねて、
思ひに沈みて君はますか、なげけに沈みて君はますか。
淸しき風よ、白き露よ、風よ、拂へ君の愁ひ。
露よ、拭へ君の涙、せめて朝は君を笑ませよ。
おゝ、我が君よ、首あげませ、光りは東の空にみちぬ。
世には活動、人には希望、神は是より與へまさなん。

（雨評）　朝のけしきと思ひに沈む君とが未だ何んとなうつぎあはしたるやうなる嫌ひあり。

〇草庵　群馬　吉田静子

荒れにあれたる草の庵、音なふ友もなく虫に、
哀れを語る秋の暮れ、そゞろ淋しき思ひ哉。
浮世を空になき渡る、雁の一聲身にしみて、
また迫りくる悲しさを、小さき胸に包みかね、
　野菊にそゝく一雫。
隙漏る風にゆる／＼と、消えゆく夜半の汀火と、
果なき夢を、此の庵に、結びて終らん現身の、
幸も希望もうたかたと、消えて流るゝ憂愁の、
涙冷たき湖衣、母の形身と身にそふれば、
　袖に亂るゝ夕嵐。
定なき世の定めとて、逝きては歸らぬ父母の、

よみぢはせめて安かれと、　鈴の音細う祖母様が、
數珠つまくりて、念佛の、　聲も愁しく、夜は更けぬ、
うなだれて聞く襟元に、　冷たう觸るゝ夜の風、
膝に重ねし細き手に、　自つと落る涙かな。

（雨評）　悲しき情は思ひやらるゝものあれど、詞はまだ
大に銑練を要す

○野の小石　東京　鵜澤菫子

華美しき彩雲に、　暮るゝを知らで空高う、
愛の光を背にあびて、　戀の讃歌ふ夕鳥。
落葉そよめく野の末に、　靜寂の姿いとほしう。
眠るが永久に默しつゝ、　草に埋もるゝ石一つ。
生れしまゝの悲哀さは、　「ただ小時の矜りぞ」と。
玉の庭をも輕視て、　我から朽つる身の運命。
元來戀ひは知らぬ身の、　朝夕通ふ里の子が。
世に秘む歌をききながら、　如何なる夢や結ぶらん。

（雨評）　野の小石は、面白き詩題を。採り來たり、意匠
もあるやうなれど、發表まだ幼し。

○行く秋　神奈川　山本久代子

見よ、秋姫の御車は、　轍の音もいと高く、
雨と風とを伴うて、　南の國に行かんとす。
折しもあれや、紅葉は　秋の七草諸共に、
せき來る涙止めあへず、　御車留めてとぬかづきぬ。
姫はこを見ていぶかしみ、　如何なる事ぞと問ひ給ふ。
先に進みし紅葉は、　涙を拂ひて答へける。

君ましまさずば、冬の神　我等の肉をばねぶりなん。
吾等を哀れと思召し、　姫よ出立延べ給へ。
姫も暫しの貰ひ泣き、　濕りし聲もて宣ふは、
時こそ經たずあらんには、　水の流れの止まんには。
紅葉ははつと畏まり、　傍の谷の水せくと
造りし柵いと堅く、　赤々染めぬ水の色。
七つの草は取々に、　時計の中に忍び入り、
長き短かき針止めて、　時計の文字を彩りぬ。
され共、見よや、限りなき　自然の力の大いさを。
秋姫立ちぬの其報は、　都に鄙に傳りぬ。
紅葉七草諸共に、　怨みの息をはと吐けば、
冤の聲あぐる木枯と、　なつて秋姫追うて行く。

（雨評）　工夫せられたる意匠ならむが、想の組み立て方
も、詞のあらはし方もまだ工夫足らず。

○短篇二首　神奈川　足立あさ子

「山にいざよふ月かげの、　影のしのふにうつろひて、
露の玉たれかゝる身も、　思ひを述へん、夜もすから。」
「雨はれがての虹の橋、　渡り來にけり、雁金の。
幾羽つられて文字の跡、　みそらに殘る雲烟り」

（雨評）　綺麗けなる詞を並べられたれどそれまでなり。

○閑居　大分　佐藤家子

廣き牧場に牛飼ひて、　長き畑に玉蜀黍植ゑて、
露にぬれつゝ草刈りに、　日にさらされつ畑打ちに、
日々の暑さに堪へかれて、　逗子のはま邊や箱根山、
思ひ〳〵に都人、　暑さをさくる夏の日は、
涼しき谷の青葉陰、　夏白かしの根に坐して、
いささ小川に釣りの糸、

庭の柿の實色つきて、
端居しつけき竹椽に、
すべて自然の風景を、
ちりの浮世をよそに見て、
月影清き秋の夜は、
牡鹿なく音をきき乍ら、
心のままにたのしみて、
住むや深山の閑けさよ。

（雨評）　流暢の調を得たるやうなれど、かう辭句をつゝけては面白からず。

○月　夜　　和歌山　植　木　素　子

みそらに清く澄む月に、
枝折戸をあけ、虫の音の、
桔梗刈萱女郎花、
月のひかりにおく露は、
そよ〳〵渡るあき風に、
折りしもすぐる雁のねに、
更け行く夜もしらざくの、
よみさす文をさしおきて、
しげき草葉をふみ行けば、
尾花も袖に打なびき、
みがける玉とかゞやきて、
はら〳〵かゝる衣の裾。
仰げば月に限なくて、
まがきの下にさまよひぬ。

（雨評）　詞は綺麗なれど、別に取り立ててきくべきふしもなきにあらずや。

○廢　寺　　肥　後　友　永　常　子

入相告ぐる鐘の音も、
軒はかたぶきかべはやれ、
あはれ深くも苦むせり。
鼠にはまれし御佛の、
かけぞと軒を洩る月に、
狸は木魚をたゝくなり。
たへて幾とせふる寺の、
瓦は落ちて、草村に
前のあか棚、ともし火の
庭の松風經をよみ、

（雨評）　狸の木魚とは滑稽にあらずや。元來叙景の詩を作るには、其所に大に感興したる情なかるべからず。其の情を本として、其の景を描ぐやうにせざべからず。然らすば其の景しきは浮ぼす

○短篇二首　　神　戸　足　立　ゑ　い　子

「幾世ふりにし神の代を、
立ち添ふ雲は八重垣の、
思ひ出雲の宮はしら、
隔ては今も無かりけり。」
「物の淋しき秋くれて、
誰が誠よりふり初めし、
猶もしぐれの神無月、
袖や紅葉の色はえむ。」

、、、鳴く雁　　越　後　松　野　繁　子

秋草の花咲く堤、
河岸へはしりに走る、
人集ひ、黒山なせり、
秋晴の今日を嬉しと、
茸狩に、鳥は囀づる、
松山の腰を巡りて、
幾もとの菌とりとる、
珍らしきえ物なりとて、
かゝる足に歸りしの道を、
柱くち、傾く軒に、
よりかゝり、獨言いふ、
親戚の四つのいとし子、
雨あがり濁れる水の、
落ち入りておし流さると、
屍はまだもあからで、
夜の暮は堤おほへと、
一つらの雁は鳴きつゞ、
大聲に人死に有りと、
板橋のたもとは早く、
警官はまたし見えれど。
友三人誘ひ合せて、
花すゝき桔梗色よき、
草を分け木の葉拂ひて、
携へし籠に牛ばす。
綠こき松葉ふりかけ、
人死に有りと人々さわぐ。
顏見れば、一人めしひが、
子守りらに連られゐたる、
今し方橋に遊びて、
かさ増して流れつよきに、
かなしげに涙こぼしぬ。
さわぎして探せ探せど、
人死に人またさわぐ。
金鉢の山を越えて來ぬ。

（雨評）　秋風河畔の死人には、詩はあるべけれども、かかるよみ方にては、詩とはならず。

、漁夫の妻　　伯　耆　錦　織　幸　子

生靈あまた奪ひし海の、
たゞ何事も白浪高く、

月さえまさる此の夕、
返す小波はしろ金の如く、
岩が根遠く、島松青し。
ぬれしまゝなる秋をふりて、
波路十里の漁にゆきし、
夫を思ひて夫を詫びて、
折から、さかまく
大波小波、
其の間にきこゆる
櫓こぐ音。
襲たれ衣秋うちふり、
泣きてよろこび迎ふる妻に、
板子一枚はかなき
夫は、
磯にとび下り、
きと握り合ふ、
つめたき其の手、
もゆる唇

よろ大波は黄金の如く、
砕きてよせて月もてあそぶ。
磯のこなたに襲たれ衣、
よぶ聲さむくかなしくひゞく。
夫をまづ締の此の夜の風に、
深くろもしらで佇みつくす。

（細評） 詩は想の組み立て方を大に考へざるべからず、此の歌全く其の用意を欠きたり。

御歌所寄人 小出粲先生選

天

折にふれて　神奈川　鈴木まつ子

[redacted]

[redacted]

地

うきことのたえぬわか身はゆめにまで
なみたの落ることもありけり

岩代　岸野菊子

人

つとにとて一枝をりし紅葉ばに
つれなくわたる夕あらしかな

甲府　名取正代子
世話文事凪



とりはきしつるきにかへて筆の鋒
たゝかはすへくなれる御代かな

秀逸

秋のやまふみ　東京　白井春子

朝露にぬれてをれふす萩尾花
かきおこしても行く山路かな

、○海邊夕　肥後　友永常子

流れよる汐木ひろひて磯つたひ
ふねなるつまを待ゆふべ哉

、○秋街道　美濃　傍島みゆき子

かし家の札を斜目に月さして
虫の音淋し秋のうら街（まち）

甲

○　宮城　大槻慶子

さま〴〵の色ににほひし花野とはたかおもふらんふゆのあはれさ

○　横須賀　柏原美奈子

砧うつ家にやあらむ山松の木の間に見ゆる里のともし火

○荻音近枕　東京　高宮安子

玉くしげ暁寒き夢さめてまくら吹きこす荻の上風

○初霜　常陸　岡田萬子

小山田に破れし案山子の袖白く今朝初霜のおき渡したり

○天長節　常陸　岡田まん子

日のみ旗かゝげし賤が垣根には千代の香高き菊も咲きけり

○　神戸　足立あさ子

月花や人のこゝろをうつし絵のことの葉がきのかをる世の中

○霜　大阪　生田奈美子

○　横須賀　高橋つれ子

夕へすてし落葉の上に霜おきて昨日にまさる今朝の寒けさ

○　新潟　岩本芳子

松風の絶間を亦も小夜時雨いとゞ寂しき冬の山里

○　東京　平塚白百合子

夕月は尾花がすゑにほのみえてしかの音遠しみやきのゝ原

○筏　相模　杉美登代子

君まつとはしゐして見る初あきのそらよゝ雁のまづおとつれぬ

○秋のやまふみ　東京　白井岑子

利根川の霜をのせたる筏舟董影寒く下る頃かな

○伊勢大廟に詣でゝ　飛騨　平田寶子

萩尾花分けつゝのぼるみ山路は足のつかれもおぼえざりけり

○秋月　下野　井上尚子

大まへにひれふす今の心もてすが〴〵しくも世をばわたらん

○松虫　播磨　田淵ふじゑ子

秋くさの咲きて埋るゝふるさとの板井にさよきふきのよの月

○河上霧　播磨　田淵きさ子

さびしさにたへぬ長夜をれや近くなくさめてなく松虫の聲

菊地武時　岩代　岸野常子

舟子らの聲を殘してきり深み棹さす舟は見えずなりゆく

○百舌鳥　東京　松原岑子

千代へてもかをりはたもし君がためこゝろつくしの菊のひともと

○茸狩　東京　神田けい子

朝きりはあとなく晴れて山はたの柿のこずゑにもずの鳴くなり

○里蚊遣火　埼玉　横田やな子

あしもとの茸はいつしか失せにけり柴のもみぢのいろを見るまに

○鶉　神奈川　山本久代子

うけらたく煙うすれて軒つゝき蚊の群むせふ山本の里

露深き小野の篠原分け行けば萩のしげりに鶉なくなり

○案山子　　神奈川　山本綾子

いかにして今宵の露を凌ぐらん笠飛ばされし裏の案山子は

○秋雨　　群馬　吉田靜子

迷ひゆく胡蝶の羽袖やぶれけり秋雨そゝぐ白菊のその

○山家獣　　肥後　友永章子

住なれしわが山里も中々にましらなく夜はさびしかりけり

○近江にて　　美濃　足濱闘子

うきみ堂さゝ波よせて秋風は艪とる船の帆さきふくなり

○折にふれて　　旭川　條藤央子

北の海はてとのみこそ思ひしがかぎりしられずなりし御代かな

○秋野　　和歌山　植木桑子

けふも又花のあるじにとめられてゆきすぎがたき秋の野邊かな

○友をしのびて　　土佐　秋月廣江子

様々のすがたはいつかさまざまの宿世となりぬうつしゑの友

○植物園　　東京　原三幸子

國といふ國のかぎりの草も木もむつましげなるそのゝうちかな

○菊露　　東京　松本まつ子

咲にほふ色なつかしき菊のうへにちとせをかけてむすぶしら露

○電話　　東京　河合濟子

鈴の音のひゞきかよへは言とひてかたらふわさのくしき御代哉

○庭月靜　　宮城　前田河千年子

靜かにも軒はの松のかげしめて宿れる月のかげのさやけさ

○谷霧　　宮城　前田河ちとせ子

谷間より立のほりける朝きりに峯のなかばはかくろひにけり

○谷霧　　宮城　前田河みさを子

立のほる谷間のきりにおふはれてたかれの松もかすかにぞみゆ

○河千鳥　　奈良　栗山たか子

渡しふれよぶ人もなく夜はふけて瀬々に寒けくちとりなくなり

○庭菊　　奈良　栗山俊子

きのふより寒さまされりいざあすは霜おほひせん庭のしらきく

○水災地をおもひやりて　　清國　宮成梓子

川ぞひの里もまがきもあれはてゝよさむのころもうつはたがつま

乙

○夜紅葉　　東京　土田八重子

小倉山木の間を走るいなづまによるのもみぢもさやかにぞ見る

○　　三重　吉田仲子

嵯峨の奥七草めぐる庵にして小督に似たる君を見しかな

○　　佐々木直子

秋のたびなれにし身にもものうきはかぜにおきふす松の下なぎ

○　　松山　田村多豆子

さよきぬたうつ音ちかくきこゆるは風の心のしわざなるらむ

○　　神戸　足立ゑい子

幾年の秋をかされて九重の御園にかをるしら菊の花

○　　東京　檜皮與志子

おなくしは紅葉ちりしく我庭に深山の鹿を呼びて見ましを

○　　東京　紳谷てる子

ぬしやたれ月かげさむき柴の戸に匂ふもゆかし白菊の花

○秋の蝶　　横須賀　渡邊比佐子

すゝき野を吹きそれ落ちて秋の蝶行く手に見ゆる三島菅笠

○月　　東京　堤いく子

今宵しも曇らぬ月を鏡にて戀し故郷うつしても見む

○箱館火災後の慘状を見はべりて　　秋田　古瀬惟子

たくはへしたからも家もやけ果てゝふゆはくれともきる衣もなし

○秋夕　　神戸　三日月堂なみ子

白萩の花はら／＼と夕風に少しこほれて秋は淋しき

○旅　行　　兵庫　田淵みき子
たゞひとり遠き山路をたとり行けどまだ人里は遥かなりたり

○寒　秋　　神戸　井口うの子
蟲の音のひと頃絶えてまたさらに秋の別れを告げ渡るかな

○養老瀧　　埼玉　横田秋子
酒としもかたりし瀧をくみあげて老をやしなふ子等ぞめでたき

○煙　草　　埼玉　横田須磨子
とり／＼に富士敷しまの巻莨くゆらす御代に成にけるかな

○決海外行　　廣島　鈴森きみ子
心をも身をもさゝげし君とあらば爽幽の空も何かいとはん

○菊　　東京　中村千代子
九重の雲井の庭も賤がやも同しかをりに匂ふ菊かな

○題しらず　　大阪　木村春江子
ちかひてし君はかへらす里川の流れにやせし月のかげかな

○瀧　車　　東京　西村直子
大龍の雲をおこすと見るからうちにまかれのみちをゆくくるまかな

○折にふれて　　神戸　すい子
悲しさはいとゝ増すなり秋の野につれなき虫の聲をきくかな

○蜂　　美濃　長縄みの子
をさなごのかたくもにぎる蜂のさき手も足もなき人もかきけり

○秋　嵐　　東京　奈良八重子
杖ひかぬさきに散りしと聞きしより秋の嵐そつれなかりけり

○　　埼玉　天野ひで
秋風にたきしめたるか木犀の得ならぬ香ぞ袖にふれける

○　　陸前　大槻初音子
いたづらに更行夜半のあじろ守つきもうらみのかげやそふらん

○　　兵庫　梶原京子
うちけぶる柳が下のいさゝ川をぼろながらの月ぞながるゝ

○　　岩代　菅野和子
日盛りの命はもたぬ次々に霜にさかゆるあさかほの花

○秋の歌の中に　　美濃　芳翠敏子
昨夜まてははさみさゝえし手植鉢にいつしむ秋の蟲のなくかな

○千　鳥　　韓國　原野みき子
日は西の海に傾ふききらめけば金波銀波に千鳥のとぶも

○秋　夕　　神戸　今西操子
いかはかりみやび心や物足らぬこの夕暮のながらましかは

○時　雨　　磐城　木幡きよ子
紅葉々はいとまたうすま初時雨ふる郷遠く思ふ頃哉

○　　東京　鵜澤薫子
尾をひきて星は南へ流れたり醫師へ通ふ野の道にして

俳　句

内藤鳴雪先生選

天　　越後　松永繁子
名月や石山寺に女連れ

地　　横須賀　吉岡艶子
後の月入江にうつる古城哉

人

徳島　中川龍子

露ちるや虫の飛び合ふ草の中

武士のうつほ光るや朝の露　横須賀　齋藤松代子
夜寒さや提灯走る橋の上
夏川を夜渡りけり小提灯　神奈川　木村ふみ子
仁和寺の門まで來たり宵の月
朝顔の二つ咲きけり筒井筒
蟋が屋の夢うらやまし夏の月
闇の香や此夕風の新らしき　徳島　中川龍子
耳立てゝ馬も行くなり小夜砧
名月に琴なき宿の恨かな　相模　吉岡艶子
朝顔にぼん〳〵時計鳴りにけり
名月や柿の梢に猿一つ
村の子が牛驅る露の夜明けかな　相模　山下照子
竹賣りで酒にかへたる夜寒かな
山蔭に誘ふ水あり落葉風
一の橋二の橋人の月見かな　横須賀　渡邊久子
稻妻のとゞかざりけり沖の島
餓釣る灯の流れけり秋の川
傾城の月を泣きけり格子先　神奈川　加藤よし子
名月や塗弓光る幕の内
圖らずも乳母に遇ひぬ墓參り
宗鑑の醉ふて斛や今年酒　同　高橋二松子
寒月や法話もどりの話し聲
寛ヶ淵の水澄みにけり秋の雨
加茂の里暮れて明るき秋の水　同　稻葉花子
美き人の月見ておはす橋の上

[illegible]　[illegible]

尼寺の古き障子や秋の月
月低く雁渡るなり隣山　相模　秋本はる子
朝寒の池に鯉見る姉妹かな
燈前や人かしこまる夜寒の灯　横須賀　藤原すみ子
雨の夜の松明凄し虫送
初霜や引き捨てある人力車　鎌倉　山本紋子
子を連れて岩に月見るましら哉　紀伊　早川常子
古井戸を圍みて咲ける野菊哉　神奈川　山本久代子
朝寒や雑魚を煮る火の懐しき　越後　松永しげ子
寺に高き銀杏一木や時鳥　美濃　芳澤敏子
鹿鳴くや杉に小ぐらき溪の橋　兵庫　梶原京子
謡もる萩の庵の小雨かな　神戸　船津澄惠子
泣きたりし顔洗ひけり秋の川　金澤　國井芳惠子
紫の褪せぬ茄子や秋日和　東京　松下萬里子
返り花に蝶一つ來し小春哉　越後　水野やすゑ子
武藏野の名殘を鉢の芒かな　下野　土屋藤花子
女郎花うりの街にくれりけり
朝寒や香焚く人の後影　東京　山下みの子
綿弓の音や夜寒の灯か揺るゝ
紫のふつとふくらむ桔梗かな　越後　海野幸子
瀧よりも上に道ある紅葉かな　神戸　足立あさ子
鹿笛の眞に迫りて哀れなり　同　足立ゑい子
渡船漕や消き出る岸に柳散る　岩代　岸野常子
歌よみに行かはや虫の草の宿　東京　渡邊花柳子
炭賣りがさむげに來り秋の雨　越後　岩本翠浪子
野分してあけては閉づる雨戸哉　東京　土田八重子
蚊帳に寢し兒等の顔に稻妻す　名古屋　橋多賀子
名月や池にも魚の浮ぶ見ゆ　和歌山　早川新子
海人も笘敷て浦のつき見かな
くつわ虫れられぬ夜は聲高し　埼玉　濱野秀子

女鑑投稿規定

投稿はすべて婦人に限り、〆切は毎月十日とし、翌月の本誌に掲載す、但し俳句は選者の都合により締切期日を掲載前々月末日迄とす、

兼題和歌の甲乙、短文、新體詩、兼題外の短歌俳句それ〴〵別の用紙に認しられたく、又同じ用紙に二人またはそれ以上の名を並べることなきやうに願ひたし。

短文、新體詩の當選者には各天賞二圓、地賞一圓人賞五十錢秀逸繪葉書を呈す。

兼題和歌、雜題和歌、俳句の當選者には各天一圓地五十錢、人三十錢秀逸繪葉書を呈す。

和歌兼題

十二月（落葉 歳暮）

一月（梅 新年）

定價

		定價
一册	前金	貳拾錢
三册	前金	五拾七錢
六册	前金	壹圓拾錢
拾貳册	前金	貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

行	五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁	三十二行	金八圓
一頁	六十四行	金拾貳圓
表紙一頁		金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十年十月廿八日印刷

明治四十年十一月三日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　合資會社　國光社

右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　橋本忠次郎

印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　守岡功

發行所　合資會社　國光社

（電話新橋二六九三番）

（電話新橋特八八番）

文部省體操遊戲取調委員
井口あくり　可兒德　川瀬元九郎
高島平三郎　坪井玄道
諸先生共著

第六版 體育の理論及實際

總クロース
菊版五百餘頁
正價金壹圓參拾錢
郵稅拾錢

目下新式體操書の發刊せらるゝもの其數尠からずと雖ども概ね一個體操家の手に成り單に一部動作の形式方法等を示すに過ぎず其斯學大家の共著に成り學說實地全體を網羅して完全無缺なるは世間唯本書一あるのみ本書は曩に文部省體操遊戲取調委員として調査研究せられたる前記諸先生が其取調報告書に基き教育上生理上の學說及實地演習の動作方式等を詳細（新式基本姿勢は特に詳密に）解說せられたるものにして姿勢動作等には百六拾餘個の木版運動服體操教室等には石版摺着色畫を挿入し丁寧親切に說示しあれば此書を繙く人は恰も諸先生に就て親く教授を受くるが如しされば新式體操に志す人は勿論中學校高等女學校及高等尋常小學校には必一本を備へざる可らず

發行所　東京市京橋區築地二丁目　電話新橋特八、二六九三　株式會社　國光社

大賣捌所　大阪市東區南本町　合資會社　積文社

女鑑

明治四十年十一月三日發行　毎月一回一日發行　第拾七年第十一號

明治廿五年三月二十日第三種郵便物認可



東京築地株式會社國光社印刷